

「豊かさ」に関する意識の変容 (2)

—— 1955年から1964年までの「豊かさ」に関する意識の様相 (上) ——

富貴島 明

1. はじめに

1955 (昭和 30) 年から、1964 (昭和 39) 年は、ダイナミックな波動をともなった成長とともに豊かさを実りあるものにしていった時代であった。1954 (昭和 29) 年 11 月から 1958 (昭和 33) 年 6 月まで、有史以来の未曾有の景気という神武景気が続く。1956 (昭和 31) 年『経済白書』は、「もはや戦後ではない」と宣言し、新生日本経済を強調した。造船業が経済を引っ張る。トランジスタラジオの生産が 1955 (昭和 30) 年から始まる。二輪車、三輪車、軽四輪車の生産も拡大する。カメラも新製品が次々とつくられる。映画館とデパートの建設ブームもおきる。週刊誌文化も花盛り。三種の神器も普及しだす。アメリカと同じような電化生活を実現していく。都市化現象がおき、住宅の建設も進む。しかし国際収支のバランスを改善するための金融引き締めにより、1957 (昭和 32) 年 6 月からなべ底不況に沈む。1958 (昭和 33) 年 6 月から 1962 (昭和 37) 年 10 月の岩戸景気が続く。神武景気を上まわるといので、岩戸景気と俗称されている。投資が投資を呼び、技術革新による産業の近代化が進められた。

例えば鉄鋼の圧延部分におけるストリップ・ミルが投資により稼働されると、薄板価格が低下し材質も向上する。すると重電機器の小型軽量化や塗装性・深絞り性が改善され、自動車の車体や家庭電器の外装を美しくすることができるようになり、自動車や家庭電器への投資が増大する。自動車産業が発展すると、ゴムタイヤや合成樹脂の需要が増大し、それらの分野でも投資がおこなわれる。また機械工業での投資も増大していく (有沢広巳監修、昭和経済史、390 頁)。1964 (昭和 39) 年の IMF 8 条国に向けた、官民協力しての国際競争力強化が図られたのである。鉄鋼・石油化学コンビナートが群生し、輸出は堅調である。それにより、労働力過剰経済から完全雇用経済へ移行しようとしている。1960 (昭和 35) 年に打ち上げられた「国民所得倍增計画」の実施により、所得が増加し、消費ブームがおき、景気をさらに押し上げる。三種の神器のような耐久消費財の消費も堅調である。さらにモータリゼーションの波も始まる。営業用車から事業用自家用車へ、個人自家用車へと主流が移りながら、乗用車台数は増大する。昭和 40 年代の主流と

なる自動車産業を準備したのも、この昭和30年代である。食事や生活環境の洋風化も進み、インスタント食品、肉、西洋野菜、ソースなどの調味料、ベッド、カーテンなどの消費が伸びる。さらにレジャー志向の高まりが、映画や旅行への消費を拡大した。大衆が豊かさを求めて消費する大衆消費社会が実現したのである。しかも1962(昭和37)年10月からオリンピック景気が始まる。世界に日本の恥ずかしくない姿を見せなければならぬとして、建築投資ブームがおきる。新幹線、高速道路がつくられる。日本の古いものは、恥ずかしいものとして取り壊されていく。しかし、オリンピック終了後に「戦後初の大不況」と呼ばれる不況に突入する。このように、所得は増加し、消費支出は拡大し、豊かさは着実に増大していった。しかし豊かさの影の部分である物価上昇、社会資本の遅れ、公害、自然災害、社会問題なども、着実に拡大しているのである。1955(昭和30)年から、1964(昭和39)年は、経済の発展とともに豊かさが着実に拡大するとともに、外部経済としての、豊かさを疎外する面も顕在化し、問題化されてきた時代である。

このような複雑な時代の豊かさ意識を分析する方法は、前稿と同じ共時的・通時の手法をとる。その手法を確認しておこう。柳田国男も変動のメカニズムを、制度やイデオロギーの変化においてでなく、衣食住にたいする民衆の情動(感覚、感性)の移動においてとらえようとした(柳田国男、明治大正史 世相編、10頁)。フェルナン・ブローデルは『物質文明・経済・資本主義 15—18世紀——日常性の構造 I』のなかで、「いくすじもの進化が立ち向かい、支え合い、さらにまた矛盾相克してきたさまを辿ってゆく」ことで、歴史を解明しようとした(Fernand Braudel, *Civilisation matérielle, économie et capitalisme, XV^e-XVIII^e siècle, tome 1, LES STRUCTURES DU QUOTIDIEN: LE POSSIBLE ET L'IMPOSSIBLE*, Paris, Armand Colin, 1979, p.6. 村上光広訳, 8頁)。日常生活での人間の身体(衣食住、病と健康)と心(感覚、行動規範、観念)にかんする事実を細部にいたるまで丹念に積み重ねるという歴史的方法で、日常性の構造を解明することができる、としている。本稿でも、日常生活の断面に現れるさまざまな事実、さらにはその基底にある人々の感性や感覚の分析をつうじて歴史を記述する。社会とは、政治、経済、社会、文化、教育など各領域の境界線が曖昧になり、それらが相互に関連する「ボーダーレス」の状態なのである。『「モノと女」の戦後史』のなかで、確かなモノは、いまや衣食住と性を基礎に広がる暮らしの領域の「小状況」しかない、と述べられている(天野正子・桜井厚、「モノと女」の戦後史、26頁)。社会の大状況を説明するためには、この小状況の分析と積み重ねという手法が必要なのである。

この手法にもとづき本稿でも次のように論じられる。1955(昭和30)年から1年ごとに8項目が分析され、最後にその年の豊かさ意識がまとめられる。8項目とは、(1)政治・経済(初めにこの年の経済動向が示され、主な経済指数も列挙される。次に、月ごとの出来事が示される。自動車産業にかんする記述が多いが、豊かさの象徴が「カー」であり、豊かさを実現する重要な手段が「カー」だったからである。最後にこの年の主な出来事があらわされる)、(2)社会(教育、

公害などを含む)、(3)食料、(4)住宅、(5)ファッション、(6)文化・レジャー、(7)音楽・テレビ・ラジオ・映画、(8)本・雑誌・新聞・漫画である。最終の節(9)まとめで、この1年間の豊かさ意識の様相がまとめられる。本稿では、1955(昭和30)年から1959(昭和34)年の豊かさ意識の様相と変容が論じられる。次稿で、1960(昭和35)年から1964(昭和39)年までの各年ごとの8項目が分析され、最後に昭和30年代全体のまとめが、通事的になされる。その全体のまとめにおいて、図表を使って、各種数値の比較・検討がおこなわれる。

おもに参照した本は、下川歌史・家庭総合研究会編『昭和・平成家庭史年表 1926～1995』、岩波書店編集部編『近代日本総合年表』第4版、Media View 編『1946-1999 売れたものアルバム Playback Memories』などである。これらの書物を参考にすることで、豊かさに関する意識の変容をみていくことにする。

2. 1955(昭和30)年

(1) 政治・経済

この年は「戦後経済最良の年」といわれている。3つの理想的経済の発展がおきたのである。①欧米経済の活況、国際競争力の強化などを背景に輸出が伸張し、国際収支が大幅に改善した。国際収支は5.3億ドルの黒字で、特需収入5.7億ドルを除いてもほぼ黒字になった。「特需なくしての均衡」を達成したのである。②インフレなき経済の拡大である。鉱工業生産は輸出に支えられ、12%増大、鉄鋼が綿製品を抑え主要輸出品のトップに立つ、農業生産も天候に恵まれ19%増大、国民所得は1割増。卸売物価はわずかに上昇したが、消費者物価は横ばいであった。③経済の正常化が進んだ。金融面のオーバーローンは著しく改善され、金利は長短とも低下した。不健全な設備の拡張や在庫仕入れは改善した。経済は、貿易を除けば、戦前水準を上回った。1人当たり実質国民所得は戦前水準を13%上まわった。鉱工業生産も87%上まわった。消費水準は戦前水準を18%上まわっている。実質的には、戦中・戦後に消耗した家財の充実に充てられているから、生活水準は大幅に低いとみられているが、住宅を除いて充足の時代は終わり、戦前との差は解消に向かっている(土志田征一編、経済白書で読む戦後日本経済の歩み、47頁)。

主な経済指数は次のとおり。経済成長率実質8.8%、名目10.1%。GNP 8兆3,991億円。年末現在日銀発行残高6,739億円。鉱工業生産指数180.7。製造工業生産指数189.4(1934(昭和9)～1936(昭和11)年平均=100)。財政投融资実績2,978億円。個人消費支出実質7.9%、名目7.1%。民間設備投資名目-5%。輸出・名目14.7%。消費者物価-1.1%。米の生産が史上最高の1,239万t。乗用車生産2万268台。7月末における二輪車を除く自動車保有台数約45万台のうち、32%は乗用車(普通車18%、1,500cc以下の小型車14%、2年後の1957(昭和32)年には、

普通車 13%，小型車 19%）。四輪車生産台数は、1947（昭和 22）年以来初めて、前年比マイナスを記録し、6 万 8,932 台。三輪車生産台数は 1946（昭和 21）年以来初めての前年比マイナス成長（8 万 7,904 台）。二輪車生産台数 25 万 9,395 台（前年比 57.7%の大幅増）。この年の下期より輸出船ブーム（輸出船受注は、1954（昭和 29）年度 59 万 t・1.3 億ドル、1955（昭和 30）年度 223 万 t・5.2 億ドル）と豊作を契機とした神武景気（輸出景気）が始まる。その景気は 1958（昭和 33）年 6 月に終わる。

1 月 4 日、ビキニ原水爆被災にかんする日米交渉が妥結する。アメリカ政府は、法律上の責任と関係なく 200 万ドル（7 億 2,000 万円）の慰謝料の支払いを決定した。1 月 5 日、トヨタ自動車純国産乗用車「トヨペットクラウン」（1,500 cc，48 馬力。乗用車製造技術が国際水準に近づく）を 101 万 4,860 円で、12 月 9 日、「クラウン・デラックス」を 121 万 9,860 円で発売する。外国メーカーとの技術提携のない、自主技術による純国産車であった。新築の住宅よりも高く、サラリーマンの年取の 5 倍もした。会社の社長用、タクシー用として爆発的に売れる。1 月 7 日、閣議で国産車愛用を了解した。1 月 12 日カナダ、1 月 17 日フランス、1 月 19 日オーストラリアと航空協定を結ぶ。1 月 28 日、共闘会議総決起大会で、合化・炭労・私鉄・電産・紙パ労連・全国金属・化学同盟・電機労連の民間 8 単産共闘で、統一賃金闘争をおこなう形式が決定。春闘の始まりである。春闘に参加する組織は拡大し、翌年には官公労も加わり 80 万人から 280 万人に増加した。1960（昭和 35）年には 440 万人も参加し、規模を拡大していく。企業内組合活動と連携しながら春闘は、国民経済レベルでの賃金決定機関としての役割を果たすようになる（昭和経済史、413 頁）。1 月、閣議は、国産品の使用奨励方針を決定した。国際収支の均衡のためである。

2 月 3 日、八幡製鉄、富士製鉄、日本鋼管は、フィリピンのアイアンマインズ社とラップ鉄鉱山開発契約を調印した。180 万ドルを投資し、5 年間毎年 120 万ドルの鉱石を買入る。2 月 4 日、日航が香港線を開設する。2 月 14 日、日本生産性本部設立。自動車や鉄鋼などの分野で、欧米の経営管理、職制、会計制度、購買・販売組織、労使関係、労務管理、賃金制度、福利厚生施設など、経営全般にわたり視察・調査をおこない、その成果を吸収・消化し、日本の経営の近代化を推し進めることになる。10 月にアメリカ視察団が帰国した時、石坂泰三団長（当時東芝社長）が、これからはマーケティングを重視しなければいけない、と語った（昭和経済史、388 頁。日本自動車工業界編、日本自動車産業史、154 頁）。2 月 27 日、NHK が第 27 回衆議院総選挙で初の開票速報を報道する。民主 185 議席、自由 112 議席、左社 89、右社 67 であった。革新派は、憲法改正阻止に必要な 3 分の 1 議席を確保した。政治は安定し、経済も安定する。2 月、丸井が、5 ヶ月払い方式を 10 ヶ月払い方式に改定する。「10 ヶ月払いの丸井」のキャンペーンを展開する。2 月、日本楽器（現在のヤマハ）が初めてのオートバイ第 1 号車「YA-1 型」を発売する。「赤

とんぼ」の愛称でヒットをする。

3月5日、政府関係者は、日中貿易拡大について、アメリカより非公式警告ありと業界に注意を喚起した。3月29日には中国通商使節団が来日した。3月18日、第22回特別国会召集(7月30日閉会)。民主・自由両党の支持で鳩山一郎(1951(昭和26)年公職追放解除)を首相に指名した。3月22日、国鉄関西線の大阪・湊町一名古屋間の準急列車が気動車になる。気動車準急のはじめである。3月22日、簡易保険契約高が1兆円を突破した。これらの資金が経済界に流れ込み、経済を活性化する。3月30日、鉄鋼19社は、屑鉄購入合理化カルテルの許可を公正取引委員会に申請する。3月31日認可される。3月から約20年間続く集団就職列車の運行が始まる。就職列車はそれ以後全国に普及する。ピーク時の1963(昭和38)年春には7万8,000人の若年労働者を、地方から東京・大阪・名古屋などの大都市に輸送した。昭和40年代に入っても、数年は7万人台を輸送していたが、1970(昭和45)年には4万人台、1973(昭和48)年には1万人台と減少し、1974(昭和49)年に廃止された。就職列車20年の歴史は、地域社会変動の歴史であるとともに、歌にうたわれるほどの思い出と感銘を残した。1939(昭和14)年4月9日、秋田から上野駅まで高等小学校卒業生580人を運んだのが、就職列車の最初である。3月、通産省は、乗用車の自給体制の早期確立、国産化範囲の拡大、外貨割り当て基準の厳格化などを内容とする「外国乗用車国産化の新方針」を決定。技術提携による組立生産からの自立を促した。

4月1日、富士精密(現在の日産自動車)が、6人乗り1,500cc乗用車「プリンス」を発売する。4月7日、政府は、アメリカ政府との間に生産性向上のための援助にかんする公文を交換する。4月14日、運輸省は、総合交通6ヵ年計画を発表した。4月、通産省は、「石油化学育成方針」を決定した。日本石油化学は川崎に、三菱油化は四日市に、三井石油化学は岩国にコンビナートを建設する計画が実現した。ついで丸善石油化学は五井、東亜燃料は川崎に、大協和石油化学は四日市等に建設するという計画が企画された。有利な立地条件(岩国と四日市は旧軍施設の払い下げがあった)を持つ地区の争奪戦と、地方公共団体の熱心な誘致運動が繰り返された。地域全体の社会資本の充実と、その整備のための国からの莫大な資金援助を狙ってである(昭和経済史、393頁)。4月、呉羽化学工業は、塩化ビニリデン繊維を開発し、生産を開始した。日産5t。

5月1日、通産省は、綿紡績・兼営織布部門に12%の操業短縮を勧告した。この月、中小紡績企業の経営危機が表面化した(8月1日には操短率16%に引き上げ、12月1日以降12%にもどす)。5月5日、東京の晴海でわが国初の国際見本市が開催される。5月7日、第2回全日本自動車ショーが日比谷公園で開催される。入場者79万人。5月14日、6大銀行(富士、三菱、住友、三和、第一、三井)が、第二封鎖預金の支払いを開始した。5月18日、通産省は、国民車育成要綱案を発表した。7月15日に自工会と小自工は、通産省から国民車構想の説明を受ける。乗車定員大人2人、子供2人の4人または2人で100kg以上の荷物を載せられること、最高速度

100 km 以上、時速 60 km（平坦な道路）で燃料 1 l 当たり 30 km の走行が可能なこと、エンジン排気量は 350~500cc、車重 400 kg、天下の険といわれている箱根の湯本一芦ノ湯間を 30 分以内で安定して走りきることができ、大きな修理をしないで 10 万 km 走行が可能な耐久信頼性をもつこと、価格は月産 2,000 台を目標に 15 万円以下（後に販売価格 25 万と訂正）というのが構想であった。非現実的目標であるとして、異議が唱えられ、構想は立ち消えとなる（日本自動車産業史、122 頁。プロジェクト X 挑戦者たち 9 熱き心、炎のごとく、82 頁）。5 月 18 日、富士自動車は、特需削減で、鶴見・追浜工業の 3,700 人整理を発表した（組合は 6 月 10 日ストに入り、7 月 29 日、2,397 人整理で妥結）。5 月 20 日、鈴木自動車工業が、わが国初の軽四輪トラック「スズライト」を 45 万円で発売する。

6 月 1 日、初のアルミ貨（一円）を発行。6 月 9 日、通産省は、合成樹脂工業育成 5 カ年計画を決定した。15 万 2,000 t 生産を目標。6 月 30 日、大阪、京都、神戸、横浜、名古屋の 5 大市警察が廃止された。自治体警察の全てが消滅したことになる。6 月、森永砒素ミルク中毒事件がおきる。8 月までに 27 府県で 1 万 2,131 人の乳児が中毒になり、そのうちの 130 人が死亡した。森永乳業が、本来なら廃棄処分の工業用第二燐酸ソーダを安定剤に使用したのが、中毒の原因である。患者は 12 月 9 日には 1 万 1,788 人に達し、そのうち 133 人が死亡した。被害者らは、国と森永乳業に対して訴訟をおこし戦った。

7 月 13 日、通産省は、石油化学工業育成対策五カ年計画を発表。7 月 25 日、過度経済力集中排除法等廃止法が公布された。企業の合併・統合をすすめる、規模の利益により企業の力を強化・拡大し、技術革新や合理化を進めさせるためである。

8 月 7 日、東京通信工業（現在のソニー）が、アメリカのウエスタン・エレクトリック社より技術を導入して製作した、わが国初の「トランジスタラジオ TR-55」（携帯型 5 石スーパー）を、1 万 8,900 円で発売する。トランジスタをラジオ用に生産するのは不可能に近いといわれていたにもかかわらず、商品化に成功した。メイド・イン・ジャパン製品は「安かろう、悪かろう」との評判を覆す努力のすえに、輸出を拡大していき、トランジスタ時代を開くことになる。8 月 10 日、日銀は、公定歩合を 4 厘引き上げ 2 銭とした。8 月 10 日、石炭鉱業合理化臨時措置法が公布された。8 月 19 日、政府は、繊維産業総合対策審議会を設置した。8 月、日立製作所が、わが国初の交流電化電車「ED 44 形」を製造した。1957（昭和 32）年 9 月国鉄仙山線の仙台一作並間を初めて走る。8 月 28 日、トヨタ自動車の「トヨペットマスター」の値下げに続き、各社乗用車の値下げを実施する。本年から翌年にかけて値下げ競争が激しくなる。1954（昭和 29）年 4 月に小型乗用車に対する物品税が、20%から 15%に引き下げられたこと、量産化が進み、技術提携車の生産コストが下がったことも、値下げ競争を刺激した。

9 月 10 日、関税および貿易にかんする一般協定（GATT）の正式加盟国になる。国際経済社

会への復帰である。舶来品ブームがおきる。9月13日、砂川基地拡張のため強制測量を実施しようとしたが、警官隊と地元反対派や支援労組・学生が衝突した。9月14日に再び衝突(11月5日には精密測量を強行し、重軽傷20人余をだす)。9月、本田技研は、二輪車生産台数で国内第1位になる。

10月13日、社会党統一大会ひらかれる。左右両党に分裂していた社会党が、4年ぶりに統一。日本社会党として再発足した。10月24日、東京の新宿駅ホームにアルバイト学生の「押し屋」第1号が登場した。正式名称は「旅客整理係学生班」である。10月25日、八幡製鉄は、530万ドルの世銀借款協定に調印した。厚板圧延機械購入のためである。最初の世銀鉄鋼借款。

11月15日、自由・日本民主両党が合同し、自由民主党(自民党)が結成された。11月22日、第3次鳩山内閣成立。保守合同、社会党の左右統一で、いわゆる「55年体制」が始まる。11月28日、郵便貯金高が5,000億円を突破した。11月、国鉄が座席予約システム「MARS」を試験導入した。国鉄の指定券をとるためには、半日がかりの行列を覚悟しなければならなかった。列車が増え、限界にきた手作業でなく、コンピュータによるスムーズな指定席発券をおこなおうとした。しかし導入しても午前9時にはコンピュータのパンク、切符の二重発券、配席ミスなどがおき、システムの信頼は、最初のうちがた落ちであった。それが改良され、5年後のみどりの窓口へと発展する。11月、理研光学工業(現在のリコー)が「リコピー101」(湿式複写機)を、13万8,000円で発売する。「リコピー1台事務100倍」というキャッチフレーズとともに、事務機の革命として一世を風靡した。XEROX複写機「スタンダード・ゼロックス」の輸入も開始され、売り上げを争った。

12月7日、日航国際線に初の日本人機長が誕生した。江島三郎ほか4人がDC-6B機の機長資格を取得した。12月20日、住友化学工業が、イギリスのICI社からの高圧ポリエチレン製造技術導入を許可される。12月21日、通産省は、繊維輸出入会議米国市場問題特別委員会(官民合同)を開催した。アメリカ向け繊維製品輸出制限を翌年1月1日から実施すると発表した。12月19日、原子力3法(原子力基本法と原子力委員会設置法、原子力局設置法)が公布された。今までタブーとされていた原子力発電に向けてのスタートである。12月29日、地方財政再建促進特別措置法公布。赤字団体に再建債発行などを認めるが、自治庁長官の承認が必要になり、国の統制が強化された。12月、閣議で「経済自立5ヵ年計画」が決定された。戦後公式に定めた初めての経済計画である。アメリカの援助と特需を当てにしない国際収支の拡大均衡を軸とした「経済の自立」と完全雇用を目標としていた。目標実質経済成長率5.0%(実質9.1%)。重点政策項目は、産業基盤の強化、貿易の振興、自給率の向上と外貨負担の軽減など10項目である。

この年の主な出来事。土地区画整理法で町名番地改革が進む。東京芝浦電気(現在の東芝)が完全自動炊飯器(電気釜)を、6合炊きで3,200円で発売する。「タイムスイッチで寝てる間にこ

飯が炊けるなんて、そんなだらしのない女のことを会社が考える必要はない」として、とりあえず試験的に500台だけ売ってみようとスタートした。「主婦に睡眠時間を」を合い言葉に、台所革命をおこしたのである。翌年には月産10万台の生産、1957（昭和32）年には家庭の50%に行きわたる大ヒット商品になった。家庭電化時代の始まりである。電気毛布、電気クッション（座布団）も発売になった。中古車を日貸しする「ドライブ・クラブ」が流行する。ヤクルト本社、ヤマハ発動機、藤田観光、三井石油化学工業などが設立された。

(2) 社 会

2月、『婦人公論』2月号に石垣綾子が「主婦という第二職業論」を書く。主婦の社会活動、再就職、家事労働につき「主婦論」が盛んになる。3月18日、「大成丸」は、ガダルカナル島など南太平洋の激戦地に散った遺骨5,889柱とニューギニアの密林で生活していた元日本兵4人を乗せ、横浜に着いた。2月、医薬品メーカーが、広告にかんする自主規制を申し合わせる。新聞全5段以下に自主規制をする。ビタミン剤など大衆薬の乱売合戦がおこったからである。5月11日、国鉄宇高連絡船「紫雲丸」が濃霧のため「第3宇高丸」と衝突し、沈没する。修学旅行生など168人が死亡。7月9日、日立造船が全社を挙げて産児制限に取り組むことを決定した。年間6,000万円の扶養手当を少しでも節約するためである。8月1日、結核診断が全国民を対象とするようになる。9月26日、文部省が、父母が負担する生徒1人当たり教育費（年額）を小学校7,968円、中学校9,641円、高校2万5,251円と発表した。8月6日、第1回原水爆禁止世界大会が広島で開催された。8月15日、東京大会。原水爆禁止署名、日本3,238万人、外国6億7,000万人。10月1日、熱海に簡易保険郵便年金加入者ホーム「熱海荘」が誕生した。初の国営老人ホームである。10月1日、文部・厚生・労働の3省は、義務教育の不就学・長欠児（30万人）の対策を発表した。10月1日、国勢調査が実視された。人口8,927万5,529人（東京都803万7,084人）。10月24日、東京で国際家族計画会議が開催された。帝王切開の増加、人工中絶の増加による、出生率の低下などが問題となった。本年初めて出生率が20%を割り19.4%。以後さらに減少していく。11月1日、北海道茂尻炭鉱でガス爆発がおき、死者60人。11月、児童扶養手当法が公布された。12月、経済審議会民生雇用部門会が「婦人よ家庭に帰れ」という意見を発表した。

この年、女性労働者数が1,700万人に達し、そのうちサービス業に239万人が従事する。全電通が、全国5ヵ所に保育所を設置した。職場の保育所づくり運動がおこる。「2人っ子革命」、
「家族の55年体制」と呼ばれている現象がおきる。それは、子供が、「授かりもの」から「つくりあげるもの」に変わったことを意味する。少ない子供を「つくって」、よい子に育てるのが「家族の幸福」という考えが定着してきたのだ。だから女性は、結婚し子供をつくったら退職し、

子育てに専念し、子供中心の生き方をし、子育てが終わると、子供の教育費と家計の不足分をパートとして再就職し働く、というイデオロギーに支配されていった。女性は、高度成長の人材養成のための子育て機関、そして格安のパート労働として、産業社会に飲み込まれていくのである(大門正克・安田常雄・天野正子編、戦後経験を生きる、157頁)。1948(昭和23)年の優生保護法により中絶数が急増してきたが、中絶の対出生比は、1950(昭和25)年67.6%、1953(昭和28)年57.2%、1955(昭和30)年67.6%である。届けられていないヤミ中絶を加えると、出生率と中絶数はほぼ同数といわれ、合計特殊出生率が、それまでの3以上から一挙に2近くに下がっている。東京都が、蚊、ハエをなくす運動を開始した。30代女性の結婚難が深刻化する。原爆症患者の死亡が相次ぐ。和歌山や三重県などで原因不明の神経症が発生し、その後全国に広がる。キノホルムが原因であるスモン病であると厚生省が認めるのは1970(昭和45)年。厚生省が、1935(昭和10)年には薬害が報告されていながら、赤痢などに対する安価な薬として使用を拡大させてきた結果、1976(昭和51)年には患者1万1,007人、死亡者570人以上の被害をもたらした。1971(昭和46)年から裁判が始まり、和解で補償を受けた被害者は6,470人、和解額は約1,430億円。経済性優先の被害が、弱い人々にしわ寄せとして押し寄せてくる(川上武編集、戦後病人史、335~340頁)。子供の間で、プロレスごっこが流行する。

(3) 食 料

1月1日、奄美大島諸島の未就学児童に、ユニセフ寄贈のミルク給食が始まる。1月、農林省は、食糧増産6ヵ年計画を作成した。3月31日、水産省はサンマの年間漁獲量が7,000万貫(26万2,500t)を突破し、史上最高と発表した。3月、学校給食の粉乳による集団中毒がおきる。東京都内では1日まで330人、4月までは1,629人の患者がでる。5月1日、東京の日本橋の高島屋で「お好み食堂」が開設された。5月7日、農林省が、米の供出割当制を廃止し、予約買い付け制に移行した。事前売渡し申込み制となる(7月27日、予約開始)。5月31日、重光外相がアメリカ大使と日米余剰農産物買付協定に調印した。6月25日発行。アメリカで余っている小麦が、大量に日本に輸出されることになる。日本での小麦農業の切り捨てである。7月9日、閣議は、生産者米価1万160円と決定した。7月2日、米価審議会は、石当たり250円の奨励金追加並びに消費者米価据え置きが適当と答申。7月、強化米の源泉混入販売許可により、ポリライスが脚光を浴びる。7月、ビールの出荷量が1945(昭和20)年来の最高を記録した。夏、協同乳業が初めてのバーアイス「ホームランバー」を発売する。以後ロングランの売れ行き。8月、関西主婦連が、大阪で100匁(375g)120円だった牛肉を80円で販売する運動を開始した。9月、食堂の米飯自由販売が始まる。秋、米の生産が史上最高の1,239万tに達する。総需要量1,128万t、自給率110%だから、米の自給が確立する。ヤミ米価(1升106円)が配給米を下回り、

米不足時代が終わる。代用食としてのサツマイモの生産量 718 万 t。以後減少する。農業生産力は 1950 (昭和 25) 年にはほぼ戦前水準にまで回復し、本年に米の自給が確立した (農文教文化部編, 戦後日本農業の変貌, 88 頁)。

この年, 食生活でも「もはや戦後ではない」という状態に改善された。エンゲル係数は 44.5%。50%を割った。1 人 1 年間の米, 果物, 砂糖の消費量は戦前水準を下回っているが, 牛乳・乳製品, 肉類, 鶏卵などの消費量は, 戦前をかなり上まわっている。1935 (昭和 10) 年と 1946 (昭和 21) 年と 1955 (昭和 30) 年の 20 年間を比較してみると, 米が 126.3 kg, 92.7 kg, 110.7 kg, 果物が 22.3 kg, 6.9 kg, 12.3 kg, 砂糖が 13.3 kg, 0.6 kg, 12.3 kg, 牛乳・乳製品が 3.2 kg, 1.6 kg, 12.1 kg, 肉類が 2.0 kg, 0.9 kg, 3.2 kg, 鶏卵が 2.3 kg, 0.4 kg, 3.7 kg である (山口貴久男, 戦後にみる食の文化史, 6 頁)。栄養はまだ不十分だが, 改善に向っている。米は豊作である。米の作付け面積は 322 万 2,200 ha, 生産量 (玄米) 1,238 万 5,000 t, 10 a 当たり収量 396 kg。前年の数値を比較してみよう。米の作付け面積は 305 万 2,000 ha, 生産量 (玄米) 911 万 3,000 t, 10 a 当たり収量 308 kg。昭和 30 年代の豊作の原因は, 次の改良にある。肥料の増投, 増収品種の普及, 丈夫な苗を作る技術の普及, 冷害を避けることのできる稲作りの普及, 農薬の普及, 動力耕耘機の普及, 灌漑・排水などの基礎づくりの進行などが貢献している (昭和経済史, 407 頁)。ニシン漁業が衰微する。漁獲量 4.7 万 t。大正期の年平均 59 万 t の 12 分の 1 である。うなぎが大衆食品となる。東京におけるうなぎ重並 350 円。天井並 150 円。トンカツ並 50 円。ラーメン並み 40 円。もり・かけそば 30~35 円。ブロイラーの大規模飼育が始まる。鶏卵の値段を追ってみよう。1 kg 当たり地卵の中玉の東京における平均小売価格である。1950 (昭和 25) 年 232 円, 1955 (昭和 30) 年 231 円, 1960 (昭和 35) 年 223 円, 1965 (昭和 40) 年 217 円, 1970 (昭和 45) 年 190 円, 1975 (昭和 50) 年 367 円, 1980 (昭和 55) 年 382 円である。卵 1 個は約 60 g。卵は, 戦後の価格上昇が最も少なかったもののひとつである (中川博, 食の戦後史, 126 頁)。

(4) 住 宅

4 月 11 日, 第 2 期公営住宅建設 3 ヶ年計画が発表された。全国 15 万 5,000 戸, 東京都 2 万 3,000 戸の建設が始まる。4 月 26 日, 東京の代官山に東急アパートが完成した。わが国初の外人向け高級賃貸アパートである。4 月, 大和ハウスがパイプハウスを発売した。7 月 17 日, 東京都営住宅の公募方式が, 落選者の優遇制から居住年限順制に変わった。7 月 25 日, 日本住宅公団が発足した。来年から入居が始まる。鳩山一郎は, 前年度 1 月の総選挙の際, 「住宅確保」を公約の目玉として戦い, 勝利し, 内閣を成立させた。所信表明演説でも 10 年間で住宅難を解消すると宣言した。公団は 10 年間に鉄筋コンクリート製の 30 万戸を建設することになっていた。8 月 1 日, 建設省が住宅不足を 272 万戸と推定した。8 月 8 日, 東京都が住宅建設 3 ヶ年計画に,

小家族向け8坪(26.4平方メートル)住宅, 6坪母子住宅などを加える。9月, 防火建設帯構造のための国庫補助と公庫融資が始まる。10月1日, 日本水道協会の調べによると, 水道普及率37.7%(上水道31.1%, 簡易水道3.5%, 専用水道3.1%)で, 都市では60%, 農村では9%であった。12月3日, 東急不動産が, 川崎市新丸子に社宅向け1棟分譲アパートを着工した。10月, 国勢調査で平均世帯人員が4.97人と判明する。35年間ほとんど変わらない。

この年の住宅建設10ヵ年計画では, 住宅不足272万戸の解消を図るために, 毎年25万戸の住宅供給を目指した。1961(昭和36)年の新住宅建設5ヵ年計画では, 1世帯1住宅の実現と老朽過密居住の解消を目指した。1966(昭和41)年の第1期住宅建設5ヵ年計画では, 同じ1世帯1住宅の実現が目指され, 最終年度までに670万戸の新築住宅の建設を目指した。量的拡大だけで, 広さの追求はまだであった。1971(昭和46)年の第2期住宅建設5ヵ年計画まで, 住宅規模はかなり低く抑えられていた。「小世帯(2人または3人世帯)については, 9畳以上, 一般世帯(4人以上)については12畳以上の居住水準を確保する」というささやかなものであった(袖井孝子, 日本の住まい変わる家族, 56頁)。

(5) ファッション

1月, 日本デザイナー協会が設立された。翌年日本デザイン文化協会と改称される。2月, クリスチャン・ディオールが, 胸元を大胆に開けた「Aライン」, 8月「Yライン」を発表し, 大丸とパターン契約をした。アルファベットラインが全盛を迎えていた。2月, 女性にフロントフォルム(前垂れ)の髪型が流行した。男性は長髪から短髪へ移行する。4月, 丹頂(現在のマダム)が女性用化粧品の製造を廃止し, 男性整髪料専門になる。夏, 海水浴場でビキニスタイルが登場した。大胆な露出度が, ビキニ環礁の核実験のように効果絶大なところから命名された。露出度を抑えたビキニが流行していく。9月, キスミー化粧品が, 落ちない口紅「スーパー口紅」を200円で発売した。10月, アメリカ映画『エデンの東』の影響で, 若い女性にポニーテールの髪型が流行した。12月, 鴨居羊子が, 「スキャンティ」(極端に短いパンティで「希少な」という意味)を発売して話題となる。マスコミでは, スキャンダルなパンティと評判になる。ウィークリー・パンティ(7色パンティ)も発売となる。「下着の色は白に限る」といった宗教的戒律や清浄観からの解放をとおして, 自分の性器を自らの統制下に置き, 女性の自立を進めた。下着による身体の自己主張と女性自身の自立が始まる(「モノと女」の戦後史, 75頁)。12月, 日本エクスランがアクリル繊維の生産を始める。

この年から, ティーンの若い女性に「落下傘スタイル」(ペチコートでギャザやフレアをふくらましたスカートのこと)が流行した。蚊帳の余りで作られたものもあった。国産の第1号は, 7月のワコールである。素材はトリコット。ディオールの「Aライン」が, 短絡したものと見な

されている。アメリカのティーンズ・ファッション（例えば、1953（昭和28）年公開の『雨に唄えば』のデビー・レイノルズのファッション）の真似だともいわれている。足を長く見せるため、足下はハイヒールである。しかしまだハイヒールの踵は太かった（アクロス編集室編、ストリートファッション1945-1995, 69頁）。ロングスカートが流行した1957（昭和32）年まで続く。戦争疎開をしていた世代が10代になり、独自の文化として、それらのスタイルを生み出したのである。1957（昭和32）年カリブソスタイル, 1958（昭和33）年サックドレス等も、このティーン主導のファッション文化である。ジャネルスーツが人気となる。スカートの長さが、膝が隠れるぐらいのものが美しいと評判になる。ラテックス・ゴムを使ったソフトガーターが登場した。パーマの桃割れなどの新型の日本髪が流行った。マンボスタイル, ポロシャツが流行。「M+W（男+女）時代」つまり、男性的ファッションの女性, 女性的ファッションの男性が増えた。オードリー・ヘップバーン主演の『ローマの休日』（1954（昭和29）年）と『麗しのサブリナ』で、ヘップバーンスタイル（別名子鹿スタイル）は、「少年＝中性」を身上としている。その影響もある。

(6) 文化・レジャー

2月1日、国鉄が一般周遊券を発売する。周遊券のはしりである。2月15日、初の人間国宝（重要無形文化財保持者）が指定された。歌舞伎の七世坂東三津五郎ら30人である。3月12日、カルチャーセンターの第1号「産経学園」が、約150の講座を開設してスタートした。3月15日、富士箱根伊豆国立公園が誕生した。3月22日、宝塚歌劇団の天津乙女以下20人が、ハワイ公演に出発した。宝塚、戦後初の海外公演である。5月5日、東京・日本橋の高島屋屋上に、観覧車、豆汽車、コーヒーカップなどのプレイランドがオープンした。5月28日、文部省が青少年の野外活動を奨励した。7月2日、第3回サンパウロ・ビエンナーレ国際美術展に棟方志功が入賞した。7月9日、東京の後楽園遊園地が開園した。軌道1,500m, 最高時速55kmのウェーブコースターを設置し、ジェットコースターと命名した。11月3日、千葉県船橋市に、わが国初のヘルスセンター「船橋ヘルスセンター」がオープンした。熱海や箱根より、東京から近いとして人気を博す。12月、日本ボディビル協会が発足した。この年ボディビルが流行した。作家の三島由紀夫もこの年からボディビルを開始し、やせ型から逆三角形に変身し、流行に拍車をかけた。

この年プラモデルブームにわく。自動車、飛行機、軍艦など100種類以上が出回る。部品は、簡単なもので7～8個、複雑なもので150個であった。危険なおもちゃの追放運動がおこった。セルロイドのキューピーが、可燃性であるとして製造禁止になった。北米産のミドリガメがペットとして輸入され始める。この年頃から大都市に深夜喫茶が増え始めた。若者の間で布団のない旅館として使われた。

(7) 音楽・テレビ・ラジオ・映画

2月、大物新人歌手・島倉千代子が『この世の花』でデビューした。40万枚のレコードを売り上げた。9月には『りんどう峠』をリリースし、ヒットさせる。第1位が『この世の花』である。ベストテンのなかに美空ひばりの『娘船頭さん』、宮城まり子の『ガード下の靴みがき』、菅原都々子『月がとっても青いから』と『木浦の涙』、美空ひばりの『すてきなランデブー』、中村メイコ『田舎のバス』、コロムビア・ローズ『渡り鳥いつ帰る』、高田浩吉『白鷺三味線』が入っている。初代三人娘の美空ひばり、雪村いづみ、江利チエミが東宝の『ジャンケン娘』で共演する。そのうち美空ひばりの『すてきなランデブー』が他の2人を抜いて大ヒットをする。歌謡界におけるひばり人気の強さを示した。その後江利チエミはインパクトの強いジャズ色、雪村いづみはあか抜けしたポピュラーソング色を打ち出していく。3人3様の色分けをしていく。春日八郎の『別れの一本杉』は、当時の田舎から都会へ集団就職する若者の別離の気持ちを歌っている。以上がベストテンである。

NHKの「BSあなたが選ぶ時代の歌」にリストアップされたのが、『別れの一本杉』、『この世の花』、ライチャス・ブラザーズの『アンチェインド・メロディ』、エト邦枝の『カスバの女』、『月がとっても青いから』、『田舎のバス』、ビル・ヘイリーと彼のコメッツの『ロック・アラウンド・ザ・クロック』、ボブ・キャロルの『慕情』、雪村いづみの『チャチャチャは素晴らしい』である(歌のタイトルと歌手名が、「ベストテン」と同一の場合は、歌手名を省略)。

美空ひばりの人気の秘密は、当時の日本人の生き方にあった。美空ひばりは、1946(昭和21)年12歳の時『悲しい口笛』のヒットで、デビューする。若干12歳の小娘が、ひたむきに歌う姿は、まさに戦後日本人の姿そのものであった。敗戦により全てを失い、手ぶらの子供(日本人)が背伸びして、体を資本にして、大人(戦勝国)と商売(貿易)をして、生きていかなければならない姿なのであった(村瀬学、なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、29頁)。

テレビは、4月1日に、民放2番目のテレビ局・ラジオ東京テレビが開局した。久松保夫主演の素人探偵ドラマの『日真名氏飛び出す』(ラジオ東京テレビ・後のTBS)、NHKテレビで放送された「どうもどうも」の高橋圭三司会の『私の秘密』は、家族でみる人気番組であった。

映画は、レジャーの代表的なものであった。1月5日、東京の帝劇でわが国初のシネラマ『これがシネラマだ』が上映された。「シネスコでもなければ、立体映画でもない」として「シネラマ」となった。3月、アメリカのアカデミー賞で、衣笠貞之監督、長谷川一夫・京マチ子主演『地獄門』が、最優秀外国語映画賞と色彩映画衣装デザイン賞を受賞した(カンヌ映画グランプリもとる)。5月、映倫が成人向け映画を指定した。この年の指定映画は、洋画14本、邦画5本であった。萩原遼監督、中村錦之助・東千代之介主演『紅孔雀』も人気を博す。東映の正月2本

だて上映でヒット。配収は2億3,000万円。秋以降、日本映画の2本だて上映が増加した。本年の映画製作本数は400本以上。代表的映画は次のとおり。成瀬巳喜男監督、高峰秀子主演『浮雲』。今井正監督、小林桂樹主演『ここに泉あり』、久松静児監督、森繁久彌主演『警察日記』、豊田四郎監督、森繁久彌・淡島千景主演『夫婦善哉』、木下恵介監督、有田紀子・田口晋二主演『野菊のごとき君なりき』、黒澤明監督、三船敏郎主演『生きものの記録』。外国映画は、アメリカのジェームズ・ディーン主演『エデンの東』、グレン・フォード主演『暴力教室』（校内暴力の映像のすさまじさに、上映禁止運動がおこる）が、ヒットした。

(8) 本・雑誌・新聞・漫画

3月15日、平凡社が『世界大百科事典』を発売。1959（昭和34）年6月30日まで順次刊行。全32巻。3月24日、悪書追放の世論が高まり、マスコミ倫理懇談会が発足した。3月30日、出版団体連合会は、自粛運動の促進、出版物取締立法化反対のための特別対策委員会を設立した。4月28日、警視庁は警官500人を動員して、ワイセツ書販売容疑で40人を検挙、雑誌37誌を押収した。5月、「見ない、買わない、作らない」の3ない運動がおきる。5月25日、新村出編『広辞苑』（岩波書店）が刊行される。収録語20万2,320。戦後、日本語をやめフランス語や英語を国語にしろとの発言があるなかで、30年にわたり、「日本語の豊かさに誇りをもとう」と、情熱を燃やしてきた成果である。6月、雑誌『文学界』に石原慎太郎の「太陽の季節」が掲載され、一大センセーションを引きおこす。文藝春秋の第1回文学界新人賞をとる。第34回芥川賞まで取る。この小説に出てくるような戦後のドライな若者像を「太陽族」と呼ぶようになる。単行本で出版されるのは翌年3月である。『文藝春秋』第76巻第3号の「読者アンケート 思い出に残る芥川作品結果発表」での第1位は、この作品である。

この年の売上げの第1位は『はだか随筆』（1954（昭和29）年10月刊行）64万部である。お堅い一橋大学教授で理学博士の佐藤弘人が、肩の凝らない艶話やユーモラスな下ネタ話を、やはり堅い経済書を出す出版社・中央経済社から出したという点が受けた。戦後のベストセラーとしては、『日米会話手帳』に次ぐ大部数であった。神武景気で盛り場などが増加するなか、そこでの話題に最適との、サラリーマン読者などの評判が売上げを伸ばした。第2位が、マルクス・レーニン主義普及会編『経済学教科書』、第3位が望月衛著『慾望』、第4位が渡辺一夫著『うらなり抄』、第5位が岡倉古志朗著『財閥』である。正木ひろし『裁判官』、福田蘭堂『うわばみ行脚』、井上靖『あすなる物語』、石川達三『不安の倫理』もベストテンに入る。また遠山茂樹・今井清一・藤原彰著『昭和史』も売れた。戦後10年を過ぎ、高度成長期に進みつつあった時期に、改めて日本の過去を顧みて、その歴史をとらえ直そうという歴史ブームを引きおこした。「なぜ私たち国民が戦争に巻き込まれ、押し流されたか、なぜ国民の力がこれを防ぐことができなかった

か」という観点から、昭和の全貌を明らかにしようとしている。

第33回芥川賞は遠藤周作の『白い人』、第34回芥川賞は石原慎太郎の『太陽の季節』。第33回直木賞は該当作品無し、第34回直木賞は新田次郎の『強力伝』と邸永漢の『香港』である。

探偵小説ブームがおこる。江戸川乱歩が戦後初の作品「化人幻戯」(『宝石』)、「獣男」(『面白倶楽部』)を連載する。『長編探偵小説全集』(講談社)の配本開始。大型企画が相次いだ。『広辞苑』のほかに『大漢和辞典』(大修館)、『世界大百科事典』(平凡社)なども刊行される。

この年創刊の雑誌。『新論』(新論社)。『若い女性』(講談社。1925(昭和元)年から1958(昭和33)年まで、大日本雄弁会講談社と改名)。『銀座百店』(タウン誌)。『モーターマガジン』(モーターマガジン社)。『大衆小説』(双葉社)。『高校コース』(学習研究社)。『りぼん』(講談社)。『ぼくら』(講談社)。新聞の『サンケイスポーツ』(産経新聞社)、『西日本スポーツ』(西日本新聞)も創刊された。創復刊誌48誌、休廃刊誌33誌。貸本漫画の出版が盛んになる。本年から1959(昭和34)年がピークである。「街の図書館」としての役割を果たした。最盛期、都内だけで3,000軒、全国で1万3,000軒といわれている。

(9) まとめ

政治的には、自由民主党による安定的政治がおこなわれ、経済の安定・成長をもたらした年である。日本は、GATTに正式加盟し、国際経済社会に乗り出していく。この戦後経済最良の年に、未曾有の神武景気が本格化した。生産性本部が設立され、産業の近代化が進められた。初めての計画「経済自立5ヵ年計画」が決められ、造船、鉄鋼、石油化学、自動車、化繊などの産業の合理化が進められた。産業の米である鉄の生産は順調に伸びている。綿繊維産業と石炭産業は衰退していくが、代わりに化繊産業と石油産業が興隆していく。コンビナートが次々に建設されていく。原子力発電の道筋をつけ、原子力エネルギーの確保に乗り出した。自動車産業では、国産化の動きが活発である。大量生産効果で、値下げ競争がおきる。しかしまだまだ乗用車は高嶺の花。小型三輪トラックが、1960(昭和35)年まで、価格や性能面で、四輪車よりすぐれているので、生産の主力であった。さらに安い二輪車産業には、ヤマハも参入し、売上げを伸ばしていく。雑誌『モーターマガジン』も創刊され、二輪車でのモータリゼーションは、自動車よりいち早く進む。二輪車生産台数26万台で、世界第4位。トランジスタラジオも発売され、人気を博し、輸出の花形になっていく。米も豊作で、自給を確保した。春闘も始まり、賃上げも進む。消費も伸びている。年勤労世帯の家計をみると、1955(昭和30)年から1960(昭和35)年まで、実収入は年率7.0%増え、家計の消費支出も年率6.4%増えている(昭和40年度国民生活白書、58頁)。電気釜が登場。女性をだらしなくするだけだという偏見もあったが、台所革命をおこし、2年後には、半数の家庭に備えられる。月賦方式が広まっていく。これらのなかで、消費の豊かさは確

実に進んでいる。

女性の生き方に社会的制限が付きはじめた。2人っ子革命がおき、主婦のあり方にかんする論争がさかんにおこなわれた。職場に保育所をつくり、主婦の就業を支援する面と、主婦を子育てのために家庭に閉じこめる面とが合体したシステムが完成した。仕事をしていても、結婚あるいは子供が生まれるとその仕事を辞める。子供を育てる期間は仕事をせずに、子育てが終わったらパートとして仕事に就く、というシステムができあがりつつあったのだ。女性の生き甲斐が子育てに強制され、仕事の生き甲斐はパート、内職という実りのない仕事で実現できない。よい子に育てるためには、2人以上子供をもてないとして、中絶も増えていく。女性の豊かさは限定されていく。またスモン病の患者が多数報告されるようになった。森永砒素ミルク事件もおきる。経済効率優先の被害者として、幼児、女性や病人、生活苦での長欠児童が苦しんでいる。ものの豊かさを実現していくにつれ、弱者に軋轢や犠牲を押しつけることになる。

食料の豊かさは改善されている。エンゲル係数は、本年の46.9%から、毎年減少していく。米も豊作である。今までの強制買付でなく、米の供出量の決定そのものを生産者の自主申告にする「事前売渡し申込み制度」に変えた。サンマは豊漁、ビールの出荷量も最高、牛乳、卵、肉類などの洋風食品の消費量も増えている。食生活では、栄養も改善されつつあり、戦前と比べても豊かになっている。食料にかんしてはもはや戦後ではない。

住宅にかんしては、まだ戦後の貧しい状態にある。戦後建てられた住宅が応急的簡易住宅で、すでに立て直しの時期に達していたことと、急速な都市化（東京都の人口がこの年800万を超え、毎年30万人ずつ増えていく）と核家族化が、大量の住宅需要を生んだのである。272万戸の住宅が不足している。日本住宅公団が誕生し、来年から入居が始まる。耐火構造でない木造アパートが、都市部で次々と建てられていく。住居規模は、「4人以上で12畳以上の確保をめざす」という狭さである。豊かさはない。

ファッション界ではクリスチャン・ディオール旋風がまだ吹いている。映画の影響で、ポニーテールの髪型や落下傘スタイルが流行する。戦争疎開をしていた世代が10代になり、都会に出てきて就職し、自由になり、独自の文化として落下傘スタイルなどを作り出していくのである。この年に創刊された『若い女性』が、この層の女性をターゲットとして、ファッションや生き方を引っ張っていく。若者の間で、ファッションのユニセックス化がすすみ、女性が男性ファッションを、男性が女性のファッションをとということがおきた。男性化粧品の売上げも増加している。化繊の改善で、洋服の色彩が華やかになる。色彩豊かな下着が、女性の自立を促す。10代の若者、とくに若い女性が、自由にファッションを自分のものにして、豊かなファッション生活を実現していく。消費支出の重点は、1954（昭和29）年から1956（昭和31）年までは被服におかれ、消費支出構造でみると被服費だけ急増している（昭和40年度国民生活白書、56頁）。ファッション

に豊かさを求めている。

レジャーをする余裕ができた時代である。映画がよく見られていた。お好み食堂も開かれたデパートの屋上に遊園地ができ、1日遊べるようになった。後楽園遊園地のジェットコースターでストレスを発散した。船橋ヘルスセンターで汗を流した。ボディビルで肉体を改造し、文化センターで知的好奇心を満たした。プラモデルにも凝る。周遊券で旅行もする。

歌謡界では島倉千代子がデビューし、泣き節で人気を博する。美空ひばりの人気は続いている。彼女は、戦後日本の象徴であった。1946(昭和21)年、12歳でデビューし、ひたむきにうたう姿は、敗戦ですべてを失った日本人がひたむきに働いてきた姿と重なるものである。ひばりの歌を聴き、豊かな元気をもらった。『別れの一本杉』を口ずさみながら、望郷の念に涙を絞った。

邦画では、2本だてになり、楽しみも倍増えた。『地獄門』が、アカデミー賞部門の賞を取り、人気は高まっている。『エデンの東』でのディーンは若者のアイドルとなり、ファッションや生き方などに影響を及ぼした。『暴力教室』は、悪い影響を与えると非難された。

『世界大百科事典』を狭くて何も無い家に順次揃えていくことで、知的好奇心を満たした。全32巻を揃えると寝る場所にも困る家でも、子供の教育と知的満足を優先した。『広辞苑』は、日本語のすばらしさを再確認させ、日本人の自信をつけさせた。小説の『太陽の季節』は、ドライな若者像を描いて、文化的に大きな影響を及ぼした。大人は若者を不道德だと非難し、若者は感性に忠実に生きる若者のいることを確認した。この年に最も売れたのは『はだか随筆』である。好景気で盛り場に行く機会が増えたサラリーマンに話題を提供した。仲間との話題を盛り上げ、コミュニケーションをスムーズにし、仕事を進めやすくするために、読むのである。子供は、貸本屋で夢中になり本やマンガを読んでいる。昭和の歴史の読みなおしのブームもおきている。

豊かさの影の部分も大きくなっている。アメリカの余剰産物である小麦や大豆を購入するために、日本産の小麦と大豆の切り捨て政策がおこなわれるようになった。学校給食で食中毒がおきる。森永砒素ミルク事件がおきる。スモン病などの公害も拡大している。経費節減が、大惨事を引きおこしたのである。本年頃から、結核、肺炎に代わり、脳卒中、心臓病、がんなど成人病が、死亡原因のトップを占めるようになる。食料難による栄養不足からくる病気でなく、逆の栄養の偏りからくる病気が多くなってきた。また文化も乱れている。確かに悪書も増えたが、過剰反応で、当時の人気作品『鉄腕アトム』、『赤胴鈴之助』など、人気作品まで悪書として批判されているような悪書追放運動もおきる。映倫が成人映画を指定する。この悪書追放運動には様々な要素が絡み合っている。子供雑誌における漫画の増加、戦後の混乱期につながる青少年犯罪の実態、政治体制の保守化や取締りの法制化、倫理や性風俗の急変、時代や文化の変わり目のなかで揺れ動く母たちの戸惑い、それらがこの運動に集約されている(竹内オサム、戦後マンガ50年史、64頁)。外では、押し屋が必要なほど、交通機関は混雑している。列車が増えすぎて、国鉄の指定券販売

が大混乱するので、マースという新システムを導入し、混雑改善しようとしている。

3. 1956（昭和31）年

(1) 政治・経済

前年の輸出に支えられた「数量景気」（輸出景気）は、本年度には、民間設備投資の未曾有の増加と、「三種の神器」の登場による旺盛な消費に支えられた「神武景気」（投資景気）に変わる。まさに新生日本の高度成長時代の幕開けの年である。この年頃から、産業構造の重化学工業化とエネルギー革命の進展、産業連関の緊密化、加工工程の多層化と大量生産・生産性向上が進んだ。それを支えたのが、消費革命における耐久消費財の急増である。それがさらに大量生産、低価格化、新製品創造を生みだし、新たな消費拡大につながり、経済の拡大をもたらしたのである。しかし早すぎる経済拡大にたいして、夏ごろに注意信号が現れた。機械受注残高の累積、オーバーローンの再現、もの・資源・人が逼迫して生産の隘路（まず鉄鋼、電力、輸送力が隘路としてあらわれ、さらに石炭、機械工業の生産力、熟練工の不足などでも現われた）が生じたこと、物価の騰貴、国際収支の赤字などがおきた（経済白書で読む戦後日本経済の歩み、62頁、67頁）。

本年の後半になるとアメリカと東南アジアとの相互防衛援助計画による新特需が発生する。東南アジアにおけるアメリカ軍のためのトラック30万台の生産・修理、防衛庁への1万4,000台の供与などが、1962（昭和37）年9月まで続いた。アメリカの厳しい検査を通過するため、自動車の性能・品質の向上がいちだんと進む。また東南アジア諸国に、日本車の信頼感を植え付けるなど、日本自動車メーカーに多くの成果をもたらした（日本自動車産業史、152頁）。

本年度の主な経済指数は次のとおり。年末現在日銀発行残高8,632億円。経済成長率実質7.5%、名目12.5%。鉱工業生産指数219.1。製造工業生産指数231.3（1934（昭和9）～1936（昭和11）年平均＝100）。財政投融资実質3,268億円。米生産額1,089万t。民間最終消費支出実質8.9%、名目10.2%。民間企業設備投資名目53.4%。輸出・名目22.5%。消費者物価0.4%。船舶建造高175万総tで世界最高。以後各年首位を持続。四輪車新規登録台数10万台を突破し、11万5,111台。四輪車生産台数11万1,066台。三輪車生産台数10万5,409台。二輪車生産台数33万2,760台。

1月9日、山一証券など4大証券会社は大蔵省と協議して、公社債市場の再開を決定した（4月2日に東京・大阪両証券取引所が債券売買市場を、戦後初めて再開した）。1月24日、トヨタ自動車は、全国的な複数販売店制度を導入した。トヨタ内部でも販売の競争をして、売上げを伸ばそうという戦略である。

2月18日、東京の池袋で、西武、東武、三越などデパート・ラッシュがおこる。2月、トヨタ

自動車は、高性能工作機械 42 台の輸入代金として、世界銀行から 235 万ドルの借款契約を結ぶ。自動車メーカーとして初の外債借款である。1959（昭和 34）年 3 月に日産自動車も同様の目的で 330 万ドルの資金を導入する。

3 月、鐘淵化学が、「カネカロン」の工業生産を開始し、アクリル肌着の第 1 号「カネカロン・メリヤス肌着」を発売した。1947（昭和 32）年三菱レイヨン「ボンネル」、旭化成「カシミロン」、日本エクスラン「エクスラン」など、化学繊維が相次いで工業化される。3 月、鹿児島駅から大阪駅までの、九州初の集団就職列車が走る。

4 月 5 日、日本繊維品輸出組合は、アメリカ・カナダ向け絹スカーフとハンカチーフの輸出数量の自主規制方針を決定した。4 月 16 日、日本道路公団が発足した。4 月 19 日、十条製紙が年間賃金協定に調印した。4 月 26 日、首都圏整備法が公布された。東京駅から半径 70 km が首都圏と定められ、東京の拡張が始まる。1957（昭和 32）年 12 月、首都圏整備委員会は、東京駅から半径 100 km 以内を首都圏とすることを決定する。4 月、シチズンは、国産初のパラショック耐震時計を発表した（6 月 10 日の時の記念日に、大阪のそごうデパートの屋上から製品を投下し、耐震機能を実証した）。

5 月 9 日、日比賠償協定が調印された。20 年間に賠償協定で 5 億 5,000 万ドルを支払い、経済開発借款（2 億 5,000 万ドル）をする。以後、東南アジア各国と賠償・経済協力協定を締結していく。後の経済進出の足がかりとなる。5 月 12 日、農業改良資金助成法が公布された。5 月 22 日、中小企業振興資金助成法が公布された。下請け企業の保護を図るためである。5 月 23 日、百貨店法が公布され、百貨店の床面積制限など事業活動の調整がおこなわれた。5 月 25 日、戦後初の政府保証社債が発行される。第 1 回は日航社債である。5 月 31 日、日産自動車が定期昇給協定に調印した。賃金協定のはじまりである。昭和 20 年代の激しい労働争議で経営側も多くの損失を被り、その反省から、長期雇用制、年功賃金制がつくられてきたのである。

6 月 11 日、工業揚水法が公布され、地盤沈下防止のため揚水が規制された。7 月、戦後賠償のうち、自動車供与第 1 号としてトヨタ自動車の「ランドクルーザー」など 22 台がビルマへ輸出された。

8 月 8 日、アメリカ NBC 社呉造船所で、世界最大のタンカー「ユニバース・リーダー号」が進水した。8 万 3,900 t。タンカーの大型化が進む。8 月、富士写真フイルムが、国産初のコンピュータを完成し、「フジック（FUSIC）」と命名した。AI（人工知能）という言葉が初めて使われる。9 月 22 日、トヨタ自動車が、国民車の試作第 1 号を発売した。翌年 7 月「コロナ」と命名して発売する。超ロングセラー車の登場である。

10 月 6 日、富士山麓鉄道（現在の富士急）は、東京の新宿一河口湖、山中湖間に直通バスの運行を開始した。10 月 15 日、佐久間ダムが完成した。10 月 19 日、日ソ共同宣言がモスクワで

発表になる。日ソ国交の回復である。10月29日、中東動乱で東証ダウが高騰した。10月、ワトキンス調査団の勧告書が提出された。名神高速道路建設費融資のための調査のために、世界銀行からワトキンス調査団が来日し、5ヶ月の調査後、「日本の道路は信じがたいほど悪い。工業国として、これほど道路網をなおざりにしてきた国は日本の他にない」と批評した。国道でさえ9割が舗装されていない状態であった。かれは、GNPの2%を道路整備に充当すること、東京―神戸間に高速道路を建設することなど、およそ38項目の調査結果と勧告からなる報告書を提出した。この勧告により、高速道路時代の幕が開かれようとしている。

11月1日、中東動乱で、東証ダウ514円10銭に急騰する。新高値。以後上昇続く。マネービル時代の到来である。この動乱を契機とする、国際商品や海上運賃の上昇にともなう輸入原材料の上昇により、卸売物価が生産財を中心に上昇する。1956（昭和31）年初来の上昇率をみると、生産財は12.4%、消費財は3.5%上昇している（昭和40年度国民生活白書、82頁）。11月19日、国鉄の滋賀・米原から京都間の電化により、東海道線の全線電化が完成した。

12月18日、日本の国連加盟が全会一致で認められる。12月20日、NHKがカラーテレビの東京実験局を開局した。12月23日、石橋湛山内閣が成立した。自民党大会での総裁公選での第1回投票でトップに立った岸信介を、石井光次郎と2・3位連合を組み、決選投票において7票差で破り、新総裁に就任したのである。政治権力が派閥力学と金で動くようになったのである。

この年、ワトキンス調査団の勧告により、高速道路時代の幕が開かれようとしている。そしてこの年の『経済白書』（7月17日）のなかで、「もはや戦後ではない」という有名な表現が使われ、日本人を勇気づけた。戦後復興の過程を終え、近代化が進むなかで、拡大する輸出、技術革新を体系化した活発な民間投資、旺盛な消費需要に支えられて高度成長の時代へと入っていく。消費生活を謳歌しだす年でもある。新しい家電製品が次々と登場した。東京芝浦電気（現在の東芝）は、脱水装置付洗濯機「VF-3型」（43万円）を発売する。スイッチ1つで洗濯と脱水の切り替えが可能な1槽式で、全自動洗濯機の先駆的商品であった。東京芝浦電気の「自動ホップアップ型トースター」（5,200円）は、パンが焼き上がると自動的に飛び出す製品である。前年度売り出された電気釜も、売上げを伸ばしている。携帯用電気毛布、電気フライパン、スリッパ型電気足温器、集塵用紙袋付き電気掃除機、ジェット式深井戸ポンプなども売り出された。これらの家電により、「オートメ婦人」が憧れの対象になり、女性が家事から解放されだした。民間設備投資の未曾有の増加、「三種の神器」の普及による旺盛な消費に支えられた神武景気（投資景気）が始まる年である。景気を支える資金調達も拡大している。この年、世銀は、トヨタ自動車と八幡製鉄のための借款を成立させた。以後対日融資は毎年拡大していく。1957（昭和32）年愛知用水公団700万ドル、1959（昭和34）年と1961（昭和36）年道路公団各4,000万ドル、1961（昭和36）年国鉄8,000万ドル等、1965（昭和40）年までに7億6,000万ドルに達した。外資は、

技術提携や特許料、技術革新を取り入れるための機械設備やノウハウの購入資金として必要であった(昭和経済史, 421頁)。西友ストア, 三菱製紙, カネカロンなどが設立された。

(2) 社 会

1月1日, 新潟の弥彦神社の初詣で, 参詣者が福もち拾いに殺到し, 124人が圧死する大事故がおきる。3月16日, インドネシアのモロタイ島から元日本兵・岸啓七(37歳)ら9人が帰国した。山中に潜伏していたが, 「米軍は撤退」との情報で下山し, 初めて敗戦を知る。4月1日, 産休法が施行された。4月15日, 東京の芝公会堂で, 第1回働く婦人の中央集会が開催される。総評・婦人協議会主催。4月20日, 衆議院本会議で, 新教育委員会法案を可決した。教育委員が, これまでの公選制から任命制になり, 同時に勤務評定制度が導入され, それに法的強制力が与えられた。校長が完全な管理職となり, 文部省と日教組の対立が鮮明になる。5月18日には日教組が新教育委員会法に反対し, 全国一斉早退をする。以後争議が多発する。5月1日, 熊本県水俣市の新日本窒素(現在のチッソ)付属病院は, 原因不明の中樞神経疾患多発を保健所に報告した。水俣病という公害が, 社会に公認されていくことになる。5月, 無認可保育所を守る会が発足した。6月, 京都市に夜間保育所「だん王保育園」が開設された。7月10日, 文部大臣清瀬一郎が, 記者会見で「男女共学は弊害があるので考慮すべき段階」と発言した。8月7日, この頃都内に喫茶店等の深夜営業が急増(約8,000軒)したため, 東京都が取締条例を公布した。9月13日, 第1回老人大会が開かれ, 養老年金制度確立などを決議した。9月, 内閣官房が, 「家族制度復活への希望が多い」という世論調査結果を発表した。10月15日, 国鉄参宮線の三重県の六軒駅構内で脱線衝突事故がおきる。修学旅行生など40人が死亡した。10月28日, 大阪のシンボルである通天閣が開業した。戦火で焼けた通天閣を建てたのは, 地元通天閣の店主たちであった。かれらは, 役所に交渉し土地を確保し, 日本一の設計者・内藤多伸を口説き落とし, あざ笑う街の人々を説得し, 資金を集め, 作りあげた。焼け跡から立ち上がった庶民が, 行政や専門家たちを巻き込み, 大阪のシンボルを作りあげたのである。103mの高さは, 当時最高であった。開業以来5ヶ月で75万人の人々が登った。年間100万人以上の人々が登ってきたが, 高度成長のツケのスマッグが展望を妨げ, 1969(昭和44)年には60万人, 1975(昭和50)年には20万人を割る。最近では, 漫画『あぶさん』, 『ジャリン子チエ』, 映画の『ビリケン』や『どついたるねん』, 連続テレビドラマの『ふたりっ子』などの舞台になり, レトロブームも重なり, 1997(平成9)年には80万人以上の人々が来場した(暮らしの手帖, 342号, 2004年早春号, 36頁)。11月8日, 第1次南極観測隊が, 宗谷で出航する。翌年1月南極に到達。12月26日, ソ連から最後の集団帰国者1,025人を乗せた興安丸が, 舞鶴港に入港した。

この年, 高校生の教師に対する集団暴行事件が続発した。北海道の冷害で, 凶作農家や不漁漁

村に欠食児童が多くでたり、1,200人の女性が人身売買される。

(3) 食 料

2月15日、ユニセフ寄贈の脱脂粉乳の、妊産婦や就学前児童に対する配給を開始した。2月、第2次日米余剰産物協定に調印する。アメリカから小麦45万tを購入する。11月には第3次協定に調印し、45万tを購入。2月、厚生省は、「黄変米は再精再検して食用に充当する」と発表した。3月21日、ソ連が、北洋のサケ・マスの漁獲制限措置を発表した。3月30日、学校給食法が改正され、中学校への適用と、準要保護児童にたいする給食費補助が規定された。4月1日、インスタント・コーヒーの輸入が初めて許可された。上期11万ドルを予定。4月、食糧庁が外米の消費規制を緩和した。事実上の廃止措置である。4月、協和乳業が、わが国初のテトラパック入り牛乳を発売した。夏、缶詰が生産過剰気味で、3個95円の缶詰が店頭に並ぶ。6月12日、閣議は、生産者米価1万70円と決定する。前年を90円下回る。6月9日に米価審議会が不適当と答申したにもかかわらずである。6月8日消費者米価は閣議で据え置かれる。6月、東京で牛乳1円値上げ。1合14円になる。主婦連は牛乳値上げ反対大会を開く。8月、東京で豚の挽肉に馬肉が混入されていることが分かり、問題となる。8月、東京都に清浄野菜販売の第1号店が誕生した。寄生虫の感染予防のため、有機肥料を使わない野菜の店を増やそうというものである。9月、ウイスキーの量り売りが盛んになる。9月、厚生省が、台所用洗剤で野菜や食器類を洗浄するなど、食品衛生の向上を全国都道府県知事に通達した。10月1日、米の新配給制度が実施される。東京都の希望配給は10kg845円である。10月15日、秋田県が、県産の品質向上のため「リンゴ検査条例」を制定した。

この年、米は豊作であった。米の作付け面積は324万3,000ha、生産量(玄米)1,089万9,000t、10a当たり収量348kg。国や農協の農業技術普及制度も貢献している。福井県農業試験場で、水稻の新品種「コシヒカリ」の育成に成功した。女性の間で洋酒ブームがおきる。1953(昭和28)年の1級ウイスキー(720ml)730円、ホテルでのスコッチの水割り1杯200円であった。女性の飲酒にかんする全国調査の結果、都会の女性の70%が飲酒に賛成、全国では50%の女性が賛成であった。都内のデパートなどで、女性向けのカクテル教室も開かれた。女性のバーテンダーも養成され、人気を博した。女性の間にも飲酒を楽しむ風潮が浸透していった。大西洋のマグロ操業が成功した。

(4) 住 宅

1月、東京の四谷に、わが国初の分譲マンション「信販コーポラス」が完成した。1戸400万~700万円。2月3日、東京の都営住宅の公募に「住宅困窮状況申請制度」を採用した。どのく

らい住宅に困っているかを応募者が申告する制度である。3月9日、閣議で母子世帯への住宅補修金貸付を決定した。3月19日、日本住宅公団が入居者を初募集した。千葉の稲毛団地（普通分譲住宅240戸）と大阪の金岡団地（賃貸住宅675戸）、北九州の曙団地（240戸）などである。5月1日に入居を開始した。8月には、東京の三鷹の牟礼団地（200戸）、名古屋の志賀団地（432戸）などの入居も開始した。合計2,877戸である。2DKや3DKで、ドアにシリンダー鍵、浴槽、ステンレスの流し台（1957（昭和32）年7月の、東京・晴海団地から使用）、水洗トイレも備えられていて話題になる。4月8日、全国労働金庫協会が、労働者住宅1万戸の建設方針を決定した。6月、東京都が、第3種木造都営住宅（都費のみによる低家賃住宅）の建設に着手する。8月2日、住宅公団が、大阪市城東区の関目第一団地に初めて洋式トイレを採用した。「冷たくて非常識」と不評であった。11月、東京の世田谷区祖師谷で、軽量鉄骨と組立鉄筋コンクリート造りの都営住宅154戸の建設が着工された。12月、初の高層アパートである東京の晴海団地が完成した。5階建て（1部10階）670戸であった。12月、東京の台東区入谷に、初の店舗付き都営住宅の建設が始まる。5階建て50戸。

この年から日本住宅公団の入居が始まる。家賃の5.5倍以上の所得（家賃は2DKで約5,100円ほど。平均1万1,200円。1㎡当たり302円。当時の銀行員の大卒男子の初任給が1万9,000円）、既婚という条件にもかかわらず、倍率は高かった。「宝くじに当たるよりも難しい」といわれていた。住宅公団は、住宅生活に革命を及ぼした。初めて2DKや3DKの「DK」表示が使われた。「ステンレス輝くキッチンセット」のコピーが評判となり、ステンレスの台所が文化生活のシンボルとなる。ダイニングキッチンでテーブルと椅子で食事をするのが、食生活の洋風化を進めた。残業や早朝出勤をする都会生活者にとって、テーブルと椅子の食事は便利であった。それも当初は夫婦の寝室兼居間と子供部屋という2部屋にダイニングキッチンがついた2DKが標準だった。1960年代になると3LDKが普及してくる。少しでも効率的に住宅スペースを利用するため、ダイニングキッチンのある住まいから床の間は追放された。父親は床の間を背にして座り、母親は下座で台所と食卓を忙しく行き来する風景がなくなった。男子厨房に入らずという考え方を根本から覆した。父親の影は薄くなり、母親の地位は確固たるものとなった。専業主婦が、家族が団欒するダイニングキッチンで女王さまとなったが、社会的にはそこに幽閉されたともいえる。自立空間とはいえない。玄関ドアにつけられたシリンダー鍵は、昼間、団地にいるのは主婦と子供だけなので、防犯のために団地が独自に開発したものである。鍵ひとつで、隣と遮断されるので、近所づき合いの交流がとりづらくなり、空間的にも社会的にも幽閉されていく。「団地族」、「団地マダム」という憧れの称号を作りだした半面、「カギっ子」、「白壁ノイローゼ」、「団地っ子」などの問題を生む。そして団地にベビーブームがおき、ニューファミリーを作りあげていく（日本の住まい変わる家族、56頁。「モノと女」の戦後史、207頁）。

(5) ファッション

2月、クリスチャン・ディオールがストレートなシルエットの「アローライン」、8月、その変形「マグネットライン」を発表した。10月、静岡市の赤堀末一がビニールサンダルの製造を開始する。

この年頃から、男性のファッションが多様化した。男性のコールドパーマが登場した。人気のアメリカ俳優トニー・カーチスをまねた「カーチスタらし」（特に短くカットした髪をコールドパーマで柔らかくし、それを少しだけ額に垂らす髪型）を希望するお客が多かった。銀座有名理髪店での男性客の3分の1を占めたほどである。『太陽の季節』をまねた若者が、この年から1958（昭和33）年頃まで出現した。男性は、サングラス、アロハ（なかにはパイルのポロシャツやネックレスも）で、髪型は、電気パーマやコールドパーマをかけて髪を垂らしていたアプレ族やマンボスタイルにたいし、慎太郎をまねて刈り上げてから前髪をたらす慎太郎カットが特徴。裕次郎のように足が長く見えるように、ズボンを細くし、マンボズボン以来の裾つめがエスカレートした。女の子は、マンボスタイル風や、なかには柄物のショートパンツで街を歩き、髪はヘップバーンカットよりやや長めのルリ子刈り（本年の映画『緑はるかに』での浅丘ルリ子の髪型）も多かった。落下傘スタイルにポニーテールも、本年は太陽族のファッションと呼ばれていた。当時はポニーテールのリボンさえ禁止する学校があった。それらは、健康的なビーチ・ファッションを微妙に着崩したスタイルである。ファッションの中心が、この夏だけは、銀座から、湘南にかわった（ストリートファッション 1945-1995, 52頁）。文化人の間にベレー帽が流行する。化学繊維が相次いで工業化され、新製品がつくられてくる。アセテートやトリコットの婦人下着が発売される。ビニール製の婦人防寒靴が開発される。後にブーツへと発展するものである。ファッションにかんする数値を示しておく。全国の理容師18万人、理容所8,013軒、美容師2万人、美容所5,735軒である。ミシンの普及率が、都市で75%になる。女性のおしゃれの要求は、まだ洋裁、ミシンで満たすしかなかった。1人当たり衣類消費が5.6kgで、戦前最高の5.3kgを超えた。被服消費額は伸びている。

(6) 文化・レジャー

1月1日、新潟県村上市の高橋喜代次という男性が、午前0時からマラソンを始める。後に元旦マラソンとして全国に広まる。1月31日、イタリアのコルチナダンペッツォで開催の第7回冬期オリンピック・スキー男子回転で、猪谷千春が第2位に入賞した。オリンピック冬季大会で日本初のメダルである。2月14日、東京・神田の共立講堂で、ボディビルの第1回ミスターニッポン・コンテストが開かれた。3月31日、長崎市平和公園が完成した。4月、国民宿舎の建設が

始まる。翌年7月鳥取県米子市に第1号がオープンした。5月9日、日本登山隊がヒマラヤのマナスルの登頂に成功した。日本人初の8,000 m以上の高峰の征服である。隊長・楨有恒編の『マナスル登頂記』、映画『標高8125米マナスルに立つ』も評判を呼び、日本人に感動を与えた。5月17日、石原裕次郎が、日活映画『太陽の季節』でデビューした。太陽族映画（『太陽の季節』、裕次郎主演の『狂った果実』、北原三枝主演の『逆光線』、川口浩主演の『処刑の部屋』など）は不良と規定され、上映拒否運動がおきた。赤線廃止が原因と見られる性犯罪の増加が、太陽族と結びつけられたのである。しかし太陽族という新しい風俗現象が、若者文化として興隆してきたのである。若者は太陽族のエピゴーネンと化し、男は慎太郎刈りとアロハシャツ、女はルリ子刈りとショートパンツで街をねりあるいた。経済的に恵まれた若者の内部で、若者文化が生まれてきたのである。戦後派（アプレゲール—略してアプレ）としてしか呼ばれなかった若者たちに、ようやく日本語名がつけられ、その存在が明確になった。大人でも子供でもない、10代の若者文化の誕生である。10代後半は「青春の終わり」でなく、「やっと自分の思いが表現できるようになった時」となった。しかし貧乏からの脱出に忙しい大人たちは、若者たちの「自分の感性どおりに生きたい」という思いを理解できなかった。彼らを不良と評した。

アメリカでは、若者文化の興隆がもう少し早かった。エルヴィス・プレスリーが、1953（昭和28）年19歳で歌手デビューをはたし、『MY HAPPINESS』という下卑たロカビリーを感性にしたがって歌い、フランソワーズ・サガンは1954（昭和29）年19歳で大人びている少女の持つ「大人への無感動」を、小説『悲しみよこんにちは』で感性豊かに書いていた。前年公開の『エデンの東』のなかでジェームズ・ディーンは、若者の思いを代表する「永遠の青春スター」としてデビューする。アメリカで数年前に爆発的に興隆してきた若者文化が、日本でも形をもって形成されたのである（橋本治、二十世紀、268頁）。また太陽族という、マイカーやヨットを乗り回し、贅沢に遊びまわる若者の姿からは、単に贅沢を支持する気持ちだけでなく、社会制度を消費パワーで転倒するという快感も読みとれた。だから前年の砂川基地闘争で戦った学生の多くが『太陽の季節』という本を持っていた。若者の思いを代表する日本人として裕次郎が、若者のヒーローとなっていく。かれは、1956（昭和31）年の『太陽の季節』で注目を浴び、2ヶ月後『狂った果実』で、1億5千万円の配当収入をもたらすヒット作の主演となった。かれの、「映画なんて別にいつやめてもいいさ」というドライさと素人くさい演技、実感に忠実に行動する主体性が、若者に受けた。若者自身にも、何が若者らしきなのか、まだわからぬ時に、スクリーンのなかに、自分の思いをためらいもなく実行している同類がいることを発見し、若者文化の実在のキャラクターとなっていくのである（岩間夏樹、若者文化の光芒、34頁）。しかし翌年には太陽族は話題にならなくなった。そこで1958（昭和33）年『嵐を呼ぶ男』で「正義の味方」路線に転向し、スターの道をのぼり詰めている。11月16日、大阪に梅田コマスタジアムが開場した（12月8日、東京

に新宿コマスタジアムが開場した)。11月22日、第16回オリンピックが、オーストラリアのメルボルンで開幕した。日本は、体操の個人・鉄棒の小野喬など4種目で金メダルを獲得した。12月、競馬の第1回中山グランプリが開催された。翌年から有馬記念と改称される。

この年、札幌市で喫茶店やバーにレコード音楽を提供する初の有線放送会社が登場した。施設費4,000円、聴取料金月1,500～3,300円であった。日本仮設興業協同組合が設立され、24のサーカス団が加盟した。フランスのシャンソン歌手デデ・モンマルトが来日した。戦後シャンソンブームの火付け役となる。1989(平成元)年に死亡するまで滞日していた。デラックス、エレガント、ドライ、キングサイズ、シスターボーイ、チャームスクール、ロックンロール、ホッピング、マンボ、ペア・スタイル、マネービルなど、多くの外来語が定着する。

(7) 音楽・テレビ・ラジオ・映画

この年大当たりしたのが三橋美智也である。『明星』の歌謡スター人気投票で、春日八郎に大差を付けて堂々の1位である。大ヒットの『リンゴ村から』に続いて、さらに『男涙の子守歌』、『哀愁列車』と立て続けにヒットを飛ばした。生まれ故郷を捨て、都会に出て働く若者の心象風景が、民謡で培った美声と独特の節回りで歌われていた。ベストテンのなかに、曾根史郎『若いお巡りさん』、島倉千代子『東京の人よさようなら』、雪村いづみ『エデンの東』、東宝の二枚目スター山田真二の『哀愁の街に霧が降る』、鈴木三重子『愛ちゃんはお嫁に』(結婚式用ソングとして『ここに幸あり』とともに歌われた)、石原裕次郎『狂った果実』、ベギー葉山『ケ・セラ・セラ』、小坂一也『ハート・ブレイク・ホテル』、美空ひばり『怒濤の男』である。3人娘の人氣が続いている。女性歌手の人氣投票では歌謡曲の部では美空ひばり、軽音楽の部では江利チエミ、雪村いづみの順である。人氣の映画スターもレコード・デビューをしている。山田真二、石原裕次郎の他に、山本富士子もレコードをリリースしている。エルビス・プレスリーの『ハート・ブレイク・ホテル』で、ロックンロール・ブームが決定的になる。前年のアメリカ映画『暴力教室』に流れるビル・ヘイリーと彼のコメッツの『ロック・アラウンド・ザ・クロック』がブームの発端であった。

NHKの「BSあなたが選ぶ時代の歌」にリストアップされたのが、エルビス・プレスリー／小坂一也の『ハート・ブレイク・ホテル』と『ハウンド・ドッグ』、大津美子の『ここに幸あり』、コロムビア・ローズの『どうせひろった恋だもの』、鈴木三重子の『愛ちゃんはお嫁に』、『若いお巡りさん』、ダークダックスの『ともしび』、鶴田浩二の『好きだった』、ヴィクター・ヤング・オーケストラの『エデンの東』、『ケ・セラ・セラ』、『リンゴ村から』の11曲である。

石原裕次郎は歌の舞台でも、若者のヒーローであった。かれは、「叫ぶぜ」とか「叩きゃ」とか「吹きやがる」とか「飛んじゃえ」とかというような、街のアウトローたちの使う会話体をふん

だんに取り込むことで、歌唱力がないにもかかわらず、若者を引きつける妙なリアリティをもった存在だった。村瀬学氏は、そのリアリティは、街のはずれである夜霧の漂う波止場に集約できると指摘する。裕次郎は、波止場という境界線上にとどまり続ける男なのである（なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、33頁）。つまり大人の建前の世界にも、子供の純真な本音の世界にも住めない、それらの境界線上にある若者の立場を歌ったのである。そこに若者たちは、リアリティを感じるのである。

4月14日、NHKテレビの指人形劇『チロリン村とくるみの木』の放送開始（1964（昭和39）年4月3日まで、812回）。4月28日、ラジオ東京テレビ（現在のTBS）で初の外国テレビ映画『カウボーイGメン』を放送した。テレビ放映初期においては、番組製作が間に合わず、番組の穴埋めに旧作の劇場映画が放映されていた。しかし、テレビの普及にともない、危機感を抱いた邦画5社（松竹、東映、東宝、大映、日活）は、本年10月1日、劇映画のテレビ提供を打ち切り、専属タレントのテレビ出演を制限する。1958（昭和33）年9月以降は、邦画作品はすべてテレビから消える。そこでテレビ側は、その代用として欧米からテレビフィルムを買い付ける。1961（昭和36）年には、1週間に15本の割合で外国ものの新シリーズが放映されていた。これだけ外国番組が氾濫した理由は、欧米のものをありがたがる日本人の気風、国産の番組の制作能力の低さと、外国番組の安さがある。当時、日本のテレビ番組は、30分のドラマ作りで40～60万円、テレビ映画で70万円の制作費がかかった。外国のフィルムは、1本10万円の権利料で買った。これに日本語制作費を含めても、15～16万円ですむ。国産に比べて、4分の1の金額であった。1965（昭和40）年から、外国番組は急減しはじめる。この年に『ロビン・フッドの冒険』、『ジャングル・ジム』、『地方検事』、『スーパーマン』、『シスコ・キッド』、『名犬リンチンチン』、『ハイウェイ・パトロール』、『口笛を吹く男』など、本年だけで11本の外国テレビ映画が放映される。特に1958（昭和33）年『パパは何でも知っている』、1959（昭和34）年『うちのママは世界一』、1961（昭和36）年『パパ大好き』、1966（昭和41）年『奥様は魔女』などのアメリカ製ホームドラマが、テレビをつうじて茶の間に入ってきたことは重大な出来事である。画面に映るアメリカ中産階級の家は、様々な日用品、家電、食品を豊かに消費していた。その豊かさに驚き、その消費生活を実現することを夢・目標として、これからの日本人は、がむしゃらに働いていくことになる（松原隆一郎、消費資本主義のゆくえ、88頁）。アメリカのホームドラマは、このような「物質的豊かさ」のほかに「平等な男女関係」のモデルも日本人に提供した。そこには、安定、ほのぼの、健全、建設的、清潔、明るさなどのキーワードによって、核家族の理想像が描かれていた。離婚も反抗も、深刻な病気、社会問題、戦争の影もない理想的家族であった（戦後経験を生きる、195頁）。その家族を子供の頃からテレビで見続けてきた日本人は、やがて結婚し、子供をつくり、そのような理想的家族を作りだした。ニューファミリーという家族である。8月19日、日本テ

テレビが、午前6時30分からの早朝放送を開始した。画面に時刻を表示するようになった。12月1日、大阪テレビと中部ニッポン放送(テレビ)が開局する。テレビ局は4局になる。テレビに料理番組が初登場した。この年、ラジオでは『少年探偵団』が人気であった。探偵小説ブームを再度巻き起こした。ちまたには「なりきり少年探偵団」があふれた。子供達に、友情や団結を信じて生きる勇気を教えた。

映画では、市川崑監督、安井昌二・三国連太郎主演『ビルマの豎琴』(ベニス映画祭でサン・ジョルジュ賞を受賞)、溝口健二監督、若尾文子・京マチ子主演『赤戦地帯』が人気を博した。アカデミー賞で、内田吐夢監督、中村錦之助主演『宮本武蔵』が外国語映画賞を受賞。ベルリン映画祭で、豊田四郎監督、池部良・山口淑子主演『白夫人の妖恋』が審査特別賞、小麦の紀元を求めた学術調査の記録映画である『カラコルム』が記録映画銀熊賞をそれぞれ受賞。洋画では、ジェームズ・ディーン主演の『理由なき反抗』がヒットした。この年、映画館の新築ブームが続く。東京では敗戦時の4倍の452館になる。全国館数7,000以上、観客動員数10億1,270万人であった。1958(昭和33)年をさかいにして、観客動員数が減少していく。特にテレビの普及率が30%を超える1961(昭和36)年以後は、急激に減少する。1987(昭和62)年9月の館数2,053、観客動員数1億4,400万人である。

(8) 本・雑誌・新聞・漫画

1月15日、大阪読売新聞が、朝夕刊14頁だてを実施。増ページ競争の口火を切る(7月には、朝日、毎日、読売の3紙の平均建て頁は14頁余となる)。1月、横山隆一の「フクちゃん」が『毎日新聞』に連載開始。2月19日、従来の新聞社系にたいし、出版社による初の週刊誌『週刊新潮』(新潮社)が創刊された。週刊誌ブームが始まる。旺文社『学生週報』、東西芸能出版(現在の徳間書店)『週刊アサヒ芸能』が、この年に創刊された。翌年創刊は、河出書房(後に主婦と生活社)『週刊女性』である。1958(昭和33)年創刊は、双葉社『週刊大衆』、集英社『週刊明星』、実話出版『週刊実話』、光文社『週刊女性自身』である。1959(昭和34)年創刊は、朝日新聞社『朝日ジャーナル』、講談社『週刊少年マガジン』、小学館『週刊少年サンデー』、講談社『週刊現代』、文藝春秋『週刊文春』、平凡出版『週刊平凡』、時事通信社『週刊時事』、中央公論社『週刊コウロン』である。1959(昭和34)年頃の週刊誌の定価が30円であったので、この週刊誌ブームを「30円文化時代」と呼んだ。週単位でおびただしい話題を流す週刊誌と、茶の間に進出してきたテレビやラジオから流れ出す洪水のような情報は、市民社会を均質化し、都会と田舎といった地域的違いをなくしていった。さらに特権階級に占有されていた知識・情報を大衆に拡散した。大宅壮一は、マスメディアの視聴率稼ぎのための低俗番組の氾濫にたいして、「1億総白痴」と評し、電波メディアの普及で発言の機会の増大した大衆を「1億総評論家」と揶揄

した(塩澤実信, 定本ベストセラー昭和史, 139頁)。3月、『主婦の友』が3月号からB5版となる。婦人雑誌の大型化が始まる。4月, 貸本漫画雑誌『影』(大阪の日の丸文庫)が創刊される。劇画ブームの火付け役になる。この年貸本漫画のブームがおこる。5月27日, 『読売新聞』で「日曜クイズ」の連載が始まる。賞金が話題となる。新聞や週刊誌のクイズ・ブームが始まる。7月, 横山光輝の「鉄人28号」が『少年』で連載開始。

この年のベストセラーの第1が石原慎太郎の『太陽の季節』である。ボクシング, ヨット, マイカー, 女狩りにうつつを抜かす戦後世代の奔放な生態にたいする, 若者世代の共感と, 旧世代の反感が絡み合い, 27万部のベストセラーとなった。この頃から芥川賞, 直木賞が文壇内部の話題から, 社会的トピックスとなり, 受賞作品がベストセラーの動きを示すようになる。『太陽の季節』は, 出版企業を, 文学性から商業性へと目覚めさせる画期的作品でもあった。第2位が三笠宮崇仁『帝王と墓と民衆』, 第3位が加藤正明『異性ノイローゼ』, 第4位がH・グリーン『あなたは煙草がやめられる』, 第5位がV・フランク『夜と霧』である。悲惨なアウシュビッツ強制収容所での体験が克明に描かれ, 話題になった。第6位が梅棹忠夫『モゴール族探検記』, 第7位が中里介山『大菩薩峠』, 第9位が槇有恒編『マナスル登頂記』, 第10位が杉浦明平『細胞生活』と続いた。

第35回芥川賞は近藤啓太郎の『海人舟』, 第36回芥川賞は該当作無し。第35回直木賞は南条範夫の『燈台鬼』と今官一の『壁の花』, 第36回直木賞は今東光の『お吟さま』と, 穂積鶯の『勝鳥』である。

長編小説がブーム。谷崎潤一郎『鍵』, 三島由紀夫『金閣寺』, 西野辰吉『秩父困民党』, 井伏鱒二『漂民宇三郎』, 野上弥生子『迷路』などである。探偵・科学小説もブーム。『世界推理小説全集』(東京創元社), 『探偵小説文庫』(新潮社), 『ルパン全集』(鱒書房), 『少年少女科学冒険全集』(講談社)などである。

この年創刊の雑誌。『洋酒天国』(PR誌。壽屋, 現在のサントリー)。『エラリー・クイーンズ・ミステリーマガジン』(早川書房)。『近代経営』(ダイヤモンド社)。『エレクトロニクス』(オーム社)。『たのしい一年生』(講談社)。創復刊誌81誌, 休廃刊誌113誌。新聞の『東京中日新聞』(中日新聞社)が創刊された。

(9) まとめ

国連に加盟し, 政治的にも国際社会に復帰し, 経済が「もはや戦後ではない」と宣言された年である。新生日本の高度成長時代の開幕する年である。9.3%の経済成長である。世銀などから外資の融資も進み, 外国の技術革新を積極的に導入した。産業構造の重化学工業化, エネルギー革命の進展, 産業連関の緊密化, 加工工程の多層化と生産性向上が進んだ。造船は, 電気溶接工

法や、ブロック建造方式、ガス切断などの新技術を駆使して、低価格と納期の短縮を実現し、輸出ブームをおこし、この年船舶建造は世界1位になった。自動車、二輪車業界は成長している。化繊産業は発展を続けている。時計も新製品を作りだしている。家電製品が次々と作り出されてくる。それが大量生産、低価格化、新製品創造をもたらし、消費を拡大した。労働者不足の状態のなかから、長期雇用制、年功賃金制の協定が結ばれていく。労働者の所得も増大し、消費水準も拡大している。テレビにアメリカのホームドラマが放映され、アメリカ人の中産家庭の豊かな生活が、そのままブラウン管をつうじて茶の間に入り込み、日本人の夢となる。様々な家電に囲まれ、洋風の家具や食事が、豊かさの象徴となる。三種の神器の普及率も上昇している。ダイニングキッチンで椅子とテーブルの食事、ステンレスの流し台などを備えた、憧れの的である団地生活が始まる。食事、ファッションも洋風になっていく。デパート・ラッシュがおきている。米は2年続けての豊作である。就職列車に乗り、労働者が農村から大都市に集まっている。都市化に対応するため、首都の整備も始まり、首都圏が充実・拡大している。道路公団が設立され、交通網の整備も進む。株も上昇している。人々は、マネービルにはしる。カラーテレビも国産コンピュータも動き出した。本格的に神武景気（投資景気）が始まる年である。豊かさが内容をもって拡大している。

しかし人々の意識では戦争は終わっていない。インドネシアから元日本兵が帰国する。ソ連から、戦犯としてシベリアで強制労働を強いられていた元日本兵が舞鶴港に入港する。『ビルマの豎琴』が評判になる。長崎に平和公園が完成する。原爆病での死亡者が増加している。しかし人々は新しい日本に向かおうとしている。冬と夏のオリンピックでは、日本の期待を背負って金メダルを獲得する。マナスルに日本人として初登頂する。その映画やドキュメントが人気になる。「科学のオリンピック」といわれた南極観測のために、小学生を初めとした10万人以上の募金と1,000社以上の協力のもとに「宗谷」を改造し、第1次南極観測隊隊員53名が11月8日、晴海埠頭を出航し、南極に向かった。朝日新聞社の1億円を除いても4,153万1,144円の寄付を集め、南極観測隊フィーバーをおこした庶民が、役人や企業を動かし、日本の底力を世界に示すことになる。1958（昭和33）年帰国した観測隊の結果は、世界を驚かせた。集めた石は南極が地球最古の大陸だということを証明した。オーロラ発生の謎の解明データも集めた。世界に日本人の底力を知らしめた（NHK「プロジェクトX」製作班編、プロジェクトX 挑戦者たち7 未来への総力戦、226頁）。大阪では、庶民のど根性が、通天閣を作りあげた。人々は元気ががんばっている。国際社会に対応するため、赤線は廃止された。しかしトルコ風呂、ソーブランドとして生き残る。そういうところへ、北海道の冷害で人身売買された女性などが売られていった。戦争中の苦しみを引きずりながら、あるいは断ち切るように、日本は明るく、豊かな夢を実現しようとしている。

高度成長のツケである公害が、初めて公認された。水俣病である。水俣市では、1951（昭和

26) 年頃から、アサリや牡蠣の空き殻が増え、魚が海面に浮き、猫が狂い死に、海鳥やカラスが空から落ちるなどの異変が続いていた。本年4月に、5歳の少女が新日本窒素付属病院で受診し、その奇病を病院が保健所に報告したことから水俣病が公認されていくことになる。その奇病は本年、熊本大学医学部の研究班により、会社の排水にあることがほぼ確実であると突き止められた。それらの研究を総合しながら厚生省食品衛生調査会も調査し、1959(昭和34)年11月12日、水俣病の主因は、会社の排水に含まれる有機排水化合物であるという有機水銀説が発表された。1953(昭和28)~1961(昭和36)年患者87人、うち36人死亡。しかし公害を隠そうという動きは強かった。新日本窒素は、1958(昭和33)年工場排水の排水口を百間港から水俣川に変更し、かえって有機水銀の汚染を不知火海全域に拡大し、10万人を超える人々に公害を拡散した。1959(昭和34)年秋に、漁民が、水俣川への排水停止、浄化装置の設置、漁業補償を要求するが、会社は拒否し、衝突事故がおきる。政府も無視する。厚生省の発表の翌日の閣議で、厚生大臣から報告があると、通産大臣池田勇人は、「水俣病の原因が企業の公害であると断定するのは早計である」との異例の答申をする。時の政府は、農業を近代化し、その余った農民を工業の労働者に振り当てることで、工業の近代化を押しすすめようとしていた(戦後日本病人史、286~293頁。見田宗介、現代社会の理論、56頁)。農業近代化のためには、窒素工場の肥料が必要であったのである。1960(昭和35)年、池田勇人が首相に指名される。農業の近代化がすすめられ、9年後にやっと排水が止められる。経済政策的意図のもとに、公害が拡大していったのである。水俣病は、住民の間でも隠されていた。その奇病は、1941(昭和19)年頃から知られており、当時は伝染病あるいは遺伝、たたりであるとして、原因もわからない、恥ずかしい病気として隠されていた。また水俣市は、新日本窒素の城下町であった。会社関係の人がほとんどであった。工場の元工場長が市長を務め、市議会は会社のために、浜の埋め立てを決議した。公害の主因が判明しても、病人や漁業関係者以外は、会社側に立った。病人の迫害、その子供へのいじめ、就職や結婚への差別までおきている。当時の人々の意識には、公害のない、皆が安心して生活できる真の豊かさ意識よりも、会社があり、仕事があり、給料をもらうという豊かな生活ができれば、一部の人々の苦しみや公害など無視すべきだという意識が強かったのである。

米は今年も豊作であった。米の新配給制度が実施された。東京都の希望配給は、10kg 845円である。外米の規制はなくなった。食の洋風化が進んでいる。テトラパック入りの牛乳が売りだされた。インスタントコーヒーも輸入されるようになった。女性の間で、カクテルなどの洋酒ブームがおきる。食の安全もすすむ。台所洗剤も普及する。寄生虫のいない洗浄野菜も売り出される。馬肉の混じらないように問題化する。リンゴの検査もされるようになった。給食が、中学校にまで配給されるようになった。食は、豊かに、多様化している。しかし1958(昭和33)年の白書で、4人に1人が栄養不足であると指摘される。

この年に入居を開始した団地が、住宅生活に革命をおこした。台所と別にダイニングルームを作る予算(1戸当たり75万、床面積13坪、公務員住宅よりも2割安い予算)などない住宅公団は、4畳半のスペースに流し台、ガス台、調理台をすえ、余ったスペースに椅子とテーブルを置く空間を作りあげた。それを和製英語のダイニングキッチンと呼ぶことで、家族団らんのかたまりを生み出した(NHK「プロジェクトX」製作班編、プロジェクトX 挑戦者たち 1 執念の逆転劇、278頁)。またそこにはステンレス製のキッチンセットが輝いている。冬期でも4時間の日照がある。鉄筋コンクリート製の住宅のドアにはシリンダー鍵がつけられている。まさに憧れの洋風の文化住宅である。それが日本人の生活に革命を及ぼした。食生活の洋風化、夫の権威の凋落と主婦の権威の確立である。それがニューファミリーという新しい家族像を作りだしていく。この団地に入居するには宝くじに当たる以上の幸運に恵まれなければならない。住宅には新しく団地生活という、豊かな夢ができた。だが全体的にまだ住宅は不足し、狭く、貧弱な状態の住宅生活である。

ファッション界では、若者が自己主張をしている。太陽族のスタイルが大流行した。男性は、慎太郎カットにアロハシャツ、サングラスのスタイルであった。女性は、ルリ子刈りにマンボズボンかショートパンツのスタイルであった。若者が、豊かな独自の生き方を模索しているのである。男性のファッションもこの年から多様化しだした。ベレー帽やカーチスたらしが流行った。化繊が相次いで工業化・量産化され、洋服や下着で使われる。ビニールサンダルや、ブーツも作られている。ミシンの普及率が、都会で75%になる。様々なファッションを、自分で洋裁している時代である。映画やスターの影響であるが、作る楽しみ、着る楽しみを味わう、豊かなファッション生活である。1人当たり衣類消費が戦前最高を超え、5.6kgになった。映画館の新築ブームが続いている。その映画の中から、若者文化が、石原裕次郎という実在のキャラクターを得ることで、興隆しようとしている。かれの、ドライさと素人くささ、そして何よりもためらいもなく自分の実感に忠実に行動する主体性に、世の若者は、自分たちの行動目標をみたのである。若者たちは、最初はためらいがちに太陽族のファッションで裕次郎をまねはじめた。大人たちは、太陽族は不良と規定するだけで、若者文化を認めない。しかし若者たちは確実に、行動・生活でも若者文化を展開していくことになる。大人でも子供でもない存在としての若者が、自己主張をしだしたのである。

音楽でも裕次郎は存在感を示した。歌唱力はないが、その妙なリアリティが若者に受けたのである。三橋美智也は、田舎から都会に出て働く若者の哀愁を歌いあげている。三人娘の人気は続いている。映画の影響力は強く、映画俳優が、歌手としてデビューし、ファッションや文化・生き方までに影響を及ぼしている。

この年のテレビ面で重要な出来事は、アメリカのテレビ映画が放映されるようになったことである。特にアメリカの中産階級を舞台にしたホーム・ドラマが放映されるようになると、モノに

囲まれる、アメリカ人家庭の豊かさが、ブラウン管をつうじて全国の茶の間に直接入り込むようになった。人々は、アメリカ人のように様々な家電に囲まれ、洋風の食事と生活をするに憧れた。そしてそのような「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」が日本人の夢となった。三種の神器の普及率が向上する。テーブル、椅子、ベッドやカーテンが売れる。食事が洋風化する。多くの外来語も定着する。アメリカのホームドラマは、このような「物質的豊かさ」のほかに「平等な男女関係」のモデルも提供した。それが、ニューファミリーという新しい家族像をつくりあげていく。テレビ番組をつうじて、アメリカ的豊かさに憧れ、目標として頑張ろうとする時代が始まった。ラジオの『少年探偵団』は、探偵(小説)ブームを引きおこし、少年・少女に勇気を与えた。

『太陽の季節』がベストセラーになる。『文藝春秋』の「読者アンケート 思い出に残る芥川賞結果発表」でダントツの1位・891票がこの作品である(文藝春秋、第76巻第3号、362頁)。この本の影響力は、今にも及んでいるのである。その一方で週刊誌の創刊ラッシュが始まる。ますます忙しくなる社会のなかで、例えば電車の乗車時間など、ちょっとした時間に、1週間分の情報を効率よく取り入れることができる週刊誌は歓迎された。婦人向け月刊誌も負けずと大型化する。新聞も増ページ競争を始める。週刊誌や新聞のクイズブームが始まる。さらにラジオ、テレビも情報を送り出す。情報・知識があふれ出し、一億評論家となる。またマスメディアが視聴率稼ぎで低俗番組を流すので、一億総白痴化となっていると、マスメディアで憂いを表明する評論家もでてきた。漫画では劇画という新しい分野が注目を浴びる。貸本屋が街の図書館の役目をはたす。

4. 1957(昭和32)年

(1) 政治・経済

この年の3月から実施された金融引き締め政策への転換により、6月の景気の山を前後して、生産と物価が急落した。輸入も減少して国際収支は早期に回復した。急速な景気後退にもかかわらず、過去2年間続いた好景気により経営基盤が強化され、最終需要の強さもあり、社会的影響は少なかった。石橋内閣の予算は1,000億円施策、1,000億円減税の積極財政であった。

本年度の主な経済指数は次のとおり。経済成長率実質9.9%、名目15.1%。年末現在日銀券発行残高8,371億円。本年度産米1,146万t。財政投融资実績3,968億円。民間最終消費支出実質8.1%、名目12.0%。民間企業設備投資名目39.1%。輸出・名目13.2%。消費者物価0.4%。本年下半年から1958(昭和33)年下半年まで、なべ底景気に入る。国際収支5億3,300万ドルの赤字。四輪車生産台数18万1,977台。三輪車生産台数11万4,937台。二輪車生産台数41万64台。

1月16日、政府は、対米綿製品輸出自主規制措置を発表した。年間限度1億9,650万m²。1月22日、帝国人造絹糸(現在の帝人)と東洋レーヨン(現在の東レ)が、イギリスのICI社と

技術提携し、ポリエステル繊維の生産を開始する。名称を「テトロン」と決定した。技術提携により、化繊の量産化が進む。1月17日、総評は、2,000円賃上げと全国最低賃金制（18歳8,000円）を目標に、春闘本部を設置した。1月30日、群馬県相馬ヶ原射撃場で、薬莖拾いの農婦が、アメリカ人兵士ジラードに射殺される。11月に前橋地方裁判所で懲役3年執行猶予4年との判決が下されたが、12月、ジラードは離日した。日本の政治力の弱さを見せつけられた事件である。以後にもアメリカ人兵の日本人に対する殺害、暴行が頻発するが、犯人は刑に服することなく帰国してしまう。

2月1日、トヨタは、業界初の定価販売制度を採用し、府県別価格を設定し公表した。また自動車と小型トラックの全車種値下げをした。各社これに追随し、業界の値下げ競争は激化した。2月25日、病気のために辞任した石橋湛山に代わり、岸信介の内閣が成立した。2月、三菱鉱業が山形県の油戸炭鉱を閉山した。大手石炭会社の閉山第1号である。この年の国内石炭生産は5,500万tで、これ以後下落する。炭労ストもおこり、燃料不足で東京都内の公衆浴場が日曜日の朝湯を廃止したり、営業時間を短縮するなど、経済全体にも影響を及ぼす。

3月18日、名古屋地下街が開業した。12月11日、東京の渋谷地下街、同月の大阪初の地下街・難波地下センター開業と、地下街時代が始まる。3月20日、日本銀行は、公定歩合を1厘引き上げ2銭1厘とする。5月8日さらに2厘上げる。3月29日、1,000億円の減税を含む、大幅な税制改正がおこなわれた。

4月5日、厚生省が、国民皆保険方針を決定し、推進本部を設置した。翌年12月27日国民健康保険法が公布さる。皆保険の基礎が確立した。当時およそ3,000万人が医療保険を受けられず、医療費の負担で貧困にあえいでいた。4月5日、政府が閣議で、国産車愛用を決定した。4月16日、国土開発縦貫自動車道建設法が公布された。3,730kmの建設計画が決まる。後の「国土開発幹線自動車道建設法」である。4月、有楽町に「そごう百貨店」開店。4月、東京通信工業（現在のソニー）が、世界最小のトランジスタラジオ「TR-63型ポケットブルラジオ」1万3,800円を発売した。アメリカで大人気となり、輸出が間に合わず、日本航空機をチャーターして大量輸出した。初の飛行機チャーター便である。

5月1日、ダイハツ工業が、300kg積みの軽三輪トラック「ミゼット」を発売する。軽三輪自動車時代の幕開けである。5月1日、東京の日本橋の白木屋（現在の阪急デパート）が、デパートで初の自動車販売を開始した。5月16日、駐車場法公布。5月18日、株価大暴落。ダウ521円56銭。5月20日、岸首相は、戦後初のアジア訪問に出発する。東南アジア6ヵ国を歴訪し、6月4日帰国。5月、民生ディーゼル（現在の日産ディーゼル）が、国産初の空気バネ式バスを完成する。5月、東京の渋谷職安の調べでは、臨時雇いの給与は、女中が8時間で250円、店員が10時間で300～350円であった（交通費別）。

6月1日、富士精密（現在の日産自動車）が小型乗用車「プリンススカイライン」（1,484 cc）を発売する。スタンダードで93万円である。6月1日、合成ゴム製造事業特別措置法公布される。合成ゴム企業の設定と育成のためである（12月9日には、資本金25億円（40%政府出資）の「日本合成ゴム製造」を設立した。1960（昭和35）年4月に四日市工場が生産を開始した）。6月4日、日本鉄鋼使節団はブラジル政府とミナス製鉄所建設契約を結ぶ。合併で設立することになる。6月6日、東京の電話が50万台を突破した（8月24日には東京の公衆電話が1万台になる）。6月19日、政府は国際収支改善緊急対策を発表した。6月27日、IMFは、1億2,500万ドルの対日借款供与を承認した。6月、トヨタ自動車は、トランスファーマシンを設置した。8月23日、日産も設置。それは、多数の専用工作機械を加工順序にそって直線に配列し、次々に送られてくる資材・部品などの工作物の穴あけなど数種の加工作業を高速かつ連続的に施し、かつフィードバック機構を備えた連続的加工制御装置を取り入れた新しい生産方式であった。この欧米の最先端技術を、3年間という短期間で開発し、導入することで、自動車生産体制のオートメーション化は急速に進んだ（日本自動車産業史、153頁）。6月27日、立川基地拡張のため砂川町で強制測量をおこなう（7月8日にも強制測量がおこなわれ、反対派と警官隊が衝突する。学生の一部は基地内に入る。9月22日、警視庁は、23人を刑事特別法違反で検挙した）。

7月1日、トヨタ自動車は、小型乗用車「コロナ」（995 cc）を発売する。64万8,500円。1959（昭和34）年8月に発売になる「ダットサンブルーバード」と、首位の座を巡って、「BC戦争」と称された激しい競り合いがおこなわれた。それが小型乗用車の質を高め、自動車産業を興隆させていった。7月19日、経済企画庁は、前年度のバス輸送量が国鉄の輸送量を超え、陸運交通機関のトップになったことを発表した。

8月25日、トヨタ自動車は、アメリカに「トヨペットクラウンデラックス」の初サンプルを輸出した。国産車の対米輸出第1号である。翌年5月には、日産自動車が「ダットサン」466台、6月にはトヨタ自動車が「トヨペットクラウン」30台、9月には富士精密が「プリンススカイライン」2台を輸出した。しかし高速道路網の発達したアメリカでは、日本車のパワー不足・高速安定性などの欠点は覆いがたく、しかも販売網づくりの難しさも加わり、長い雌伏の期間を過ごさねばならなかった。1960（昭和35）年になるとやっと942台、1964（昭和39）年には1万1,592台を輸出し、アメリカ市場での基礎を少しずつ築き上げていき、昭和40年代の繁栄をもたらす（日本自動車産業史、174頁）。8月27日、茨城県東海村の原子力研究所の原子炉が臨界実験に成功する。日本初の「原子の火」が灯る。

9月17日、八幡製鉄は、酸素上吹転炉の操業を開始した。続いて各企業も新炉を導入し、鉄鋼業界は、生産量、品質、価格とも世界1の座を占めるに至る。9月23日、「主婦の店ダイエー」千林駅前店が開店する。翌年12月2日には神戸三宮店が開店する。以後スーパーマーケットが

増加する。価格破壊により、流通支配権をメーカーから奪取するという、中内功の戦略を消費者は支持していった(昭和経済史, 418頁)。9月、郵政省は、小包配達に軽三輪車の使用を開始する。

10月1日、日本が、国連総会で安全保障理事会の非常任理事国に選任された。10月、マーケティング協会設立。10月、東京の八重洲の大丸で、「奥様、お嬢様の3時間の百貨店づとめ」というキャッチフレーズでパートタイムを募集した。「パートタイマー」という言葉が使われた初めである。11月、東京瓦斯がガス自動炊飯器を発売する。

12月6日、東京で日ソ通商条約を調印。12月16日、東京湾の夢の島のゴミ埋め立てが始まる(1967(昭和42)年まで)。12月17日、閣議は、1958(昭和33)~1962(昭和37)年の「新長期経済計画」を決定。経済成長率6.5%(実績10.1%)をめざす。目標は極大成長、生活水準の向上、完全雇用に置き、産業基盤強化、重化学工業化、輸出拡大、貯蓄増強を重点政策課題に定めた。

この年、日本石油化学川崎事業所に、IPA(イソプロピルアルコール)アセトン第1プラントが完成した。わが国初の石油化学プラントで、コンビナートの初めでもある。トヨタ自動車の車種「クラウンデラックス」が人気を博す。「デラックス」が人気になり、チョコレート、化粧品、牛乳などに名前が付けられる。この年発売された主な電化製品は、やぐら式電気こたつ(サーモスタット付き)3,000円、電気毛布(発熱布取りはずし式)1万3,000円、平型電気あんか1,500円。その他、電気ポット、背の高さが調節できるお座敷扇風機、リレー式電気計算機(カシオ)、ルームクーラー、電気大工道具、硬質ホーローの電気冷蔵庫(従来はビニール板)。電気釜の販売数が100万台を突破した。地方の中卒者を都会で就職させようという労働省の政策により、集団就職が活発化する。厚生省によると、働く女性の数が全労働者の3分の1を突破し、全国で560万人になった。この年から、証券投資信託が急膨張する。山下・日興証券の始めた「オープン型」投資がきっかけである。1955(昭和30)年末に600億円足らずだった残存元本額が、1957(昭和32)年末に1,370億円、公社債投信の発足した1961(昭和36)年は1兆円を超え、1964(昭和39)年末には1兆3,700億円に達した(昭和経済史, 451頁)。高度成長を株式市場の活況が支えたのである。株の値上がり企業が企業の増資を生み、設備投資を拡大し、高度成長を可能にした。新聞広告費が510億円。テレビ広告(60億円)が雑誌広告(50億円)を抜く。阪急百貨店、日本コカコーラ、カシオ計算機が設立された。

(2) 社 会

1月13日、美空ひばりが国際劇場で、人気をねたむ女性に塩素をかけられる。同じような事件が続発する。4月1日、東京都が、し尿処理にバキュームカーを採用した。東京やその周辺都市の人口が増え、大量くみ取りが必要になったからである。し尿は、し尿投棄船(東京19隻、川崎2隻、横浜17隻、横須賀3隻)で東京湾沖に捨てられていた。しかし昭和40年代に海水汚

染が問題化すると、1976（昭和51）年4月海洋汚染防止法が公布され、し尿処理できる下水道設備の完備へと行政の方向も変わっていく。4月10日、大阪府は、盲児施設「平和寮」を開設した（6月1日、聾唖児施設「高津学園法然寮」が開設した）。4月、児童福祉施設のなかに精神薄弱児通園施設が追加された。5月25日に東京の北児童学園、新潟の明星園が開設した。この年に、東京都新宿区に国立聴力言語障害センター（1979（昭和54）年に国立身体障害者リハビリテーションセンターに統合）が開設した。前年の冬から6月頃まで、A東京57型流感が全国で流行する。患者は学童だけで100万人、学童死者561人、都内だけで休校2,588校にもものぼった。国民の40～60%がかかった。7月3日、「数寄屋橋ショッピングセンター」が開店した。8月から数寄屋橋の解体が始まる。銀座の古き象徴がまたひとつ消えていく。7月25日、九州西北部に記録的豪雨（「諫早豪雨」）が襲う。崖崩れや河川の氾濫で、死者・行方不明992人。10月、五千円札（聖徳太子）が発行される。10月、公営国民宿舎が鳥取県大山で開業する。11月6日、伝染病予防調査会は、ソーク・ワクチンの国内生産や小児マヒの法定伝染病指定を決める。毎年2,000人から4,000人の患者が報告されていた。1961（昭和36）年からのソーク・ワクチンの定期予防接種と、同年夏からの経口生ワクチンの定期予防接種の全国児童に対する一斉投与により、患者数は急減する。12月11日、初の百円硬貨（鳳凰のデザイン）が発行になる。

この年、ポリバケツが初登場した。それ以後プラスチック製品が家庭内に氾濫することになる。15ℓで1,200円（積水化学工業）と高価にもかかわらず、文明の香りがすると、花嫁の支度品にもなる最新生活グッズであった。その後、東京都が清掃車を用いたゴミ回収方式を採用する時、このポリバケツを使用した。以後急速に普及することとなる。プラスチック全盛時代のはじまりである。政府の、石油化学産業育成の成果である。人口自然増加率は8.9（1,000人につき）。死亡順位は、男性は①中枢神経の血管損傷18.3%、②悪性新生物11.3%、③心臓疾患8.6%、女性は①中枢神経の血管損傷18.4%、②老衰12.6%、③悪性新生物10.6%である。いずれも成人病（高血圧やがん）などが上位を占め、結核（1950（昭和25）年まで死因の1位）や肺炎が減少した。第1次医療技術革新の成果である。医療革新のために、医療品生産額が1,000億円を突破した。医薬品等の総生産額（最終製品）は、1,497億円（医薬品1,345億円、医療機器151億円）で、前年比251億円増である（厚生白書昭和33年度版、123頁）。1950年代の第2次医療技術革新の時代になると、臨床検査の種類と検査料の増大がおき、医療費はさらに急増することとなる。例えば1967（昭和42）年の医薬品の総生産額（最終製品）は、5,634億円。前年比563億円増、11%増である（厚生白書昭和43年度版、183頁。戦後日本病人史、90頁）。

(3) 食 料

1月17日、明治製菓が、天然オレンジジュースの200g缶を全国一斉に発売した。青森県も

この年、100%リンゴジュースを発売した。1月24日、中国産エビが東京に初めて輸入される。4月1日、寶酒造が500 ml 入りの中ビン「タカラビール」100円を発売する。各社それに追随する。5月8日、東京コカコーラが民間向けに初のレギュラーサイズ190 ml を発売する。アメリカ軍関係者しか飲めなかった、憧れの魔法の飲み物を日本人も飲めるようになった。成分の配合は企業秘密なので、麻薬の成分も入っているのではないかとの噂も立ち、飛ぶように売れた。コーラの輸入制限の撤廃は、1961(昭和36)年である。5月、盲学校や聾学校で学校給食が始まる。6月15日、食品添加物の規制が強化される。1955(昭和30)年6月におきた森永粉ミルク中毒事件がきっかけである(12月に粉ミルク砒素中毒患者が1万858人、死者79人と発表になり、さらに規制が強化された)。6月15日、水道法が制定され、水の消毒が義務づけられる。7月5日、閣議は、生産者米価石当たり1万322円50銭と決定する(7月1日、米価審議会は、生産者米価の決定は生産費および所得補償方式によると答申した。9月14日に消費者米価10kg当たり850円と決定した)。7月、主婦連が、不良ジュースの追放運動を展開する。8月、国産ポップコーンの販売が始まる。秋に東京の晴海で開かれた第2回国際見本市で紹介されている、大人気となり、年内に都内30ヵ所で販売された。1袋30g30円である。8月、星崎電機が、ジュースの噴水が見える自動販売機を開発した。10円噴水ジュースとして爆発的な人気を博する。1963(昭和38)年の冷夏までブームが続く。10月、森永乳業が、100円バターを発売する。10月、徳用米制度が発足する。

この年、米の作付け面積323万9,000ha、生産額1,146万4,000t、10a当たり収量364kg。農村で動力噴霧器や動力撒粉機が普及した。動力耕耘機も普及している。1955(昭和30)年には8万8,000台が使用されていたが、1960(昭和35)年には51万台に急増する。農家10戸に1台の所有である。機械化体系による農業の近代化がすすめられていく(戦後日本農業の変貌, 107頁)。学校給食のパンの2個配給が開始された。コーヒー牛乳(ガラスビン入り180cc)が関西地方で売り出される。国民1人当たりの年間平均の食肉消費量は4.3kgである。内訳は、牛肉1.2kg、豚肉1.2kg、ハム・ソーセージ400g、鶏肉300g、鯨肉1.2kgである。鯨肉は、戦後の学校給食(鯨カツなどの料理)をつうじて全国に普及した。1955(昭和30)年頃から、塩サケに代わり魚肉ソーセージに使われるようになる。日本人の栄養水準を高めたのが、この鯨肉であった。捕鯨は、1945(昭和20)年からおこなわれていた。1955(昭和30)~56(昭和31)年漁期にイギリスを抜いて、世界第2位の捕鯨国になる。さらに1959(昭和34)~1960(昭和35)年漁期には、捕鯨王国ノルウェーを抜いて世界1位になる。以後成長を続けたが、1988(昭和63)年商業捕鯨をすべて中止した(食の戦後史, 115~124頁)。この年から「バイキング料理」が始まる。帝国ホテルのレストランの名前である「バイキング」が混同されて、広まった。帝国ホテルの宿泊料シングル1,800円のところ、バイキングは昼1,200円、夜1,500円であった。

(4) 住 宅

1月、閣議は、水道行政の取扱いを、上水道は厚生省、下水道は建設省、終末処理は厚生省、工業用水道は建設省と決定した。2月27日、住宅公団東京支所が、東京の大島、千葉の八千代台の両団地入居者募集に際し、3回以上の落選者の優遇を決定した。3月29日、東京の三田に東急アパートが完成した。高級マンションの代名詞となる。3月、千葉県柏市に住宅公団の光ヶ丘団地が完成した。この時から「ニュータウン」という呼び名が用いられるようになる。3月、不二サッシがアメリカからアルミサッシの技術を導入した。翌年、ビル用アルミサッシを開発する。4月1日、住宅金融公庫が、中高層耐火建築や災害復興住宅などへの貸付を開始する。4月、建設省が、住宅建設5ヵ年計画を発表した。毎年約50万戸を建設し、233万戸の不足を解消するという内容である。5月15日、建設省が都心部の建ぺい率を緩和して、敷地面積を $30\text{m}^2 \times 6/10$ にした。6月1日、大阪府枚方市の中宮第一住宅団地に、住宅公団初の分譲小学校「明倫小学校」が開校した。7月、福岡市に住宅公団初の平家建て分譲住宅104戸が完成した。9月15日、神戸市切戸町に、住宅公団初のゲタばきアパート（1階が店舗、2階以上が住宅）が完成した。11月10日、住宅公団が、横浜の磯子に初の市街地住宅54戸を完成した。11月、東京都は、低所得者のために一部の第2種都営住宅の家賃を1,000～1,500円にした。差額は都費の持ち出しである。この年、団地サイズがなくなり、公団住宅の部屋が縦横とも15cm広くなる。

(5) ファッション

3月8日、美容師の団体である日本ヘアデザイン協会が設立される。8月10日、同協会で秋冬ニューヘアラインの「桔梗」を発表する。以後毎年、秋冬、春夏のニューヘアラインを発表する。4月、ジョージ岡がアメリカのニューヨーク国際ファッション・コンクールにおいて「大納言」で1位になる。国際的に日本ファッションの実力が認められていく。4月、全国に7,000校の洋裁学校があるなかで、東京の代々木の文化服装学院が開業いらい初めて23人の男子学生を入学させる。以来、デザイナーとして、1961（昭和36）年卒業の高田賢三（世界のケンゾーとして知られる）、ニコルの松田光弘、1969（昭和44）年卒業のワイズの山本耀司などを送り出す。5月、鴨居羊子が、大阪のスバル座で下着ショーを開く。この年も下着ブームである。新しいファッションのための下着がもてはやされるようになったのである。6月、男性のモデルグループ「SOS（ソサエティ・オブ・スタイル）」が誕生した。6月、日本油脂が、液体洗剤「ニッサンセブン」を発売する。7月には花王が、わが国初のナイロン専用洗剤「ピンクエマール」を、12月には国産初の青色蛍光剤配合洗剤「ブルーワンダフル」を発売する。各種の洗剤が登場する。化繊繊維の急増と、電気洗濯機の普及により、今までの洗濯石鹸でなく、すぐ解けて、洗い落ちの

よい洗剤が求められるようになったからである。8月、ウテナ化粧品が「ウテナ男性クリーム」を発売した。8月、クリスチャン・ディオールが「スピンドル（シャトル）ライン」を発表した（かれは10月に死亡し、イヴ・サンローランが後継者になる）。10月、YKKがズボン専用ファスナーを発売した。11月、吉田工業は、黒部工場を完成し、ファスナーの近代の一貫生産を開始した。

この年、ジーナ・ロロブリジータやソフィア・ローレンなどイタリア女優の衣装デザインを手がけたフォンタナ3姉妹発表の、イタリアンモードが流行した。『バナナボート』を歌う浜村美智子（足が長く、奔放な行動で男裕次郎といわれていた）のカリブソスタイルが、春から夏にかけて、瞬間風速的に流行した。七分のマンボズボンやタイトスカートに長い髪である。結ぶ、編む、束ねるが常識だった長髪に、「荒い髪型」のままで街にでる市民権を与えた。髪の色を一般のハイティーンもするようになった。茶髪のはしりである。化粧は、オークル系にアイシャドウを濃くしてアイラインを入れ、口紅は薄くするがまゆずみで輪郭を描いた唇にする。「ラテンばい」、「東洋ばい」スタイルである。1955（昭和30）年のマンボスタイル、1956（昭和31）年の太陽族スタイル、本年のカリブソスタイルと、サマーシーズン限定の東洋ファッションブームであった（ストリートファッション1945-1995、48頁）。ミシン生産高は、大量生産の方式が整い世界第1位。ミシンの普及率も高まっている。家庭用ミシンの生産量は1969（昭和44）年をピークに急減した。当時はミシンの販路拡大のために、各メーカーから派遣された人が夜店などで街頭販売をおこなっていた。ミシン、自転車、洋服（注文服）はどれも2万円で、「値段がいっしょ」といわれていた。高級な、憧れの品であった。しかし少し無理すれば手にはいる品になっていた。ミシン、三面鏡、洋服筆筒は、嫁入り道具の三種の神器といわれていた。鏡台、和筆筒、和裁道具は、忘れられようとしている。しかし復古調の日本髪や和服ブームもおきている。和服は訪問着として女性の必需品であった。戦前・戦後に失われたり、売り払った和服を買い戻す余裕がでてきたのである。化繊の着物が、化繊の特徴である鮮やかな色彩、丸洗いができること、価格が安いことなどで、注目を集める。この年ワコールがブラジャーのカップサイズを初めて導入し、ブラジャーの売上げが増大した。しかしデータも不十分で、技術的にも未熟であった。ワコールは、1961（昭和36）年6月に立体製図法にもとづく「バルフラワーブラ」を販売した。1964（昭和39）年製品研究部をつくり、着心地のよい下着づくりの研究を進めた。昭和30年代は、洋装下着の発展と近代化の過程であった。当時の業界の平均売上げ伸び率は、前年比130%が最低ラインで、1973（昭和48）年のオイルショックまでこの勢いは続いた（小泉和子、洋装の時代、134頁）。

(6) 文化・レジャー

1月29日、南極観測隊がオングル群島に上陸し、「昭和基地」を建設し、越冬に入る。日本に与えられた観測場所は、欧米が7回挑戦しても到達できなかった南極屈指の難所であり（プリン

スハラルド海岸は「インアクセサブル」とよばれていた),そこに、老朽船を改造した「宗谷」で奇跡的に到達し、なおかつすぐさま基地建設・越冬をおこない、翌年に世界を驚かせる観測成果をあげた。日本の底力を世界に示し、自信を失っていた日本人に勇気を与えた(NHK「プロジェクトX」製作班編、プロジェクトX 挑戦者たち 7 未来への総力戦, 198頁)。2月、内閣官房調査が青少年の愛国心や防衛意識の形成を強調した。3月7日、スウェーデンのストックホルムでの第24回世界卓球選手権大会で、日本が5種目に優勝。3月13日、チャタレー裁判最高裁判決で、上告棄却、訳者と出版社の有罪が決定する。文学者多数が、思想の自由を侵害するものだと、判決を批判する。4月5日には文芸家協会が抗議の声明を出す。4月6日、岸信介首相が、東京の後樂園のプロ野球パ・リーグ公式開幕戦で始球式をおこなう。日本プロ野球史上初めてである。7月16日、東京都世田谷の砧ゴルフ場全コースに、世界初の夜間照明設備が完成した。7月24日、升田幸三が、大山名人(連続5期)に勝ち、将棋第6期名人に就任した。王将戦と九段戦にも勝ち、初の三大タイトルを独占した。天才独特の、破天荒な差し手と爛漫な行動に人気が集まった。7月30日、文部省が、小・中学校に「道徳」の時間をもうけるように通達した。これにより「道徳教育」にかんする議論が盛んになる。8月9日、総評が、道徳教育反対などを文相に申し入れる。8月、東京の高円寺に阿波踊りが登場した。商店街が夏枯れの客寄せに始めたもので、以後毎年おこなわれることになる。1985(昭和60)年埼玉県南越谷のように、真似をする他の商店街もあらわれる。日本三大阿波踊りとして有名になる。9月20日、糸川英夫らは、秋田の道川海岸で国産ロケット1号機「カッパー4C型」の発射テストに成功する。10月24日、川越市の霞ヶ関カントリー倶楽部で開かれた第5回カナダ・カップで、中村寅吉が優勝した。ゴルフブームの火付け役を果たした。10月、ビニール製のクリスマスツリーが登場し、大流行になる。11月3日、ソ連は、犬1頭を乗せた人工衛星「スプートニク2号」(重さ508kg)を打ち上げる。10月4日の「スプートニク1号」の打ち上げに続いての成功である。アメリカは、翌年1月31日に「エクプローラ1号」の打ち上げに成功した。11月、日本自然保護協会が発足した。

この年、中・高生の「理由なき自殺」が相次ぎ、問題化した。ドライブ・クラブが全国で400社を超え、ドライブ・ブームに沸く。サイクリング、登山、北海道旅行もブーム。

(7) 音楽・テレビ・ラジオ・映画

ベストテンは以下のとおりである。浪曲界から歌謡界に転向した三波春夫の初のヒット『チャンチキおけさ』と『船方さんよ』、『雪の渡り鳥』がよく売れた。石原裕次郎の『俺は待ってるぜ』と『錆びたナイフ』は映画とともにヒットし、裕次郎は名実ともに昭和の大スターとして君臨することになる。若山彰の『喜びも悲しみも幾歳月』は美しい映像の映画とともにヒットした。その他に、島倉千代子の『東京だよおっ母さん』、美空ひばりの『港町十三番地』と『長崎の蝶々』

さん』、三橋美智也の『おいら炭鉱夫』がよく売れた。この年の大ヒットソングは、『チャンチキおけさ』と『東京だよおっ母さん』である。高度成長につれ、地方から出稼ぎにきた人々の郷愁を歌ったのである。

NHKの「BS あなたが選ぶ時代の歌」にリストアップされたのが、青木光一の『柿の木坂の家』、『錆びたナイフ』、春日八郎の『あん時やどしゃ降り』、小坂一也の『青春サイクリング』、コロムビア・ローズの『東京のバスガール』、『東京だよおっ母さん』、パット・ブーンの『砂に書いたラブ・レター』、浜村美智子の『バナナポート』、藤島恒夫の『お月さん今晚は』、三浦洗一の『踊子』、『港町十三番地』、『チャンチキおけさ』、『喜びも悲しみも幾歳月』の13曲である。

女装の男性・丸山明宏（三輪明宏）が、ジルベール・ベコーの曲に自分で訳詞した『メケ・メケ』が話題を集める。

村瀬学氏は、本年の歌謡曲について次のように語っている。『喜びも悲しみも幾歳月』は、永遠の夫婦愛を歌っている。しかしそれだけではない、舞台となっている灯台や岬は、都会と対極にある自然や神と出会う場所であり、そこでしか純愛が成立しないことを歌っているのである。田舎を捨て都会に出てきた人々が、都会の暮らしに疑問を呈していることが、その歌の人気の大きな部分である（なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、48頁）。『チャンチキおけさ』で歌われる「月」は、田舎から都会に出てきて仕事をしながら、わびしい路地裏の屋台ではる苦い酒を飲み、チャンチキチャンチキと小皿を叩きながらおけさ節を歌う、夢やぶれた人々を、じっと見つめ、盛り上げ、再起させようという暖かな存在である。そこにヒットの根元がある（なぜ「丘」を歌う歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、58頁）。『東京だよおっ母さん』は、1939（昭和14）年の『九段の母』と同じ「参拝する母」である。しかし『九段の母』の母は、気丈夫にも1人で杖をついて九段までやってくる。『東京だよおっ母さん』と前年にヒットした三橋美智也の『東京見物』の母は、手を引いてもらわなければ息子の墓参りもできないほど老いた母の姿が歌われている。高度成長のなか、田舎に残した母と、都会に出てきた私とすでに死んでいる兄というように、バラバラに暮らしている姿を歌っている。そして母は、「兄を弔う母」つまり戦前のマイナスの遺産（兄）を弔う存在である。そしてその母を連れ回す私は、「もはや戦後ではない」を実現するために、戦前を振り返る暇もなく、身を粉にして働いてきたのである。しかし田舎に残してきた母が東京に出てきて、今まで弔ってきたものを、弔う存在である母とともに、弔うのである。田舎と都会、戦前と戦後を乗り越えた今の私を歌っているのである。まさに今の日本人の姿を歌っているのである（なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、80頁）。

1月7日、ラジオ東京（現在のTBS）が『赤胴鈴之助』の放送を開始した。翌年10月にはラジオ東京テレビでも放送が始まり、子供たちの間に「赤ザヤの刀」の玩具が流行した。2月4日、文化放送で、『オヤカマ氏とオイソガ氏』の放送が開始。1965（昭和40）年5月3日の3,000回

まで続く。3月1日、テレビの放送時間が、午後11時までには延長される。4月1日、北海道放送テレビ開局。テレビ局5局になる。4月25日、NHK テレビは『アイ・ラブ・ルーシー』(1960(昭和35)年4月30日まで)放映開始。6月15日、日本テレビはプロレスのレギュラー番組『プロレス・ファイトメンアワー』を放送開始。6月、日本テレビは、『ヒッチコック劇場』を放映開始。7月28日、ラジオ東京テレビ(現在のTBS)は、『時事放談』を開始した。『文藝春秋』1996年2月号の「読者5500人大アンケート史上テレビ番組ベスト100」の第8位199票である。政治・経済を語る硬派の番組だが、しだいに「ばかもん談議」に人気が出てきて、約30年続いた。10月7日、NHK テレビが午前7時から8時の早朝放送を開始した。10月22日、郵政省が、テレビ放送43局に予備免許を交付した。NHK7局、民放34社36局が、1959(昭和34)年3月までに順次開局した。11月3日、ラジオ東京テレビ(現在のTBS)が『名犬ラッシー』放映開始。11月4日、NHK テレビの『今日の料理』放送開始。江川トミ講師が人気。12月24日、NHKの超短波FM放送東京実験局が開局した。わが国初のFM放送である。12月28日、NHKテレビに続いて日本テレビがカラーテレビの実験局を開局した。

映画は、木下恵介監督、佐田啓二・高峰秀子主演『喜びも悲しみも幾歳月』、蔵原惟繕監督、石原裕次郎・北原三枝主演『俺は待ってるぜ』がヒット。渡辺邦男監督、嵐寛寿郎主演『明治天皇と日露戦争』(明治天皇を実名で登場させた最初の映画。7億円の興行収入をあげる)、川島雄三監督、フランキー堺主演『幕末太陽伝』も観客を集めた。この年から、天然色の大型映画が盛んになる。例えば最初のワイドスクリーン(シネマスコープ)映画は、松田定次監督、大友柳太朗主演『鳳城の花嫁』。8月、東映が、動画スタジオを設置した。翌年にアニメ映画『白蛇伝』を発表する。この年、テレビ会社に映画各会社が参加する。テレビの普及率が増加し、映画がおされ始め、共存共栄を図ろうとする。外国映画で、アメリカのパート・ランカスター主演『OK牧場の決闘』とオードリー・ヘップバーン主演『昼下がりの情事』とアレック・ギネス主演『戦場にかける橋』(アカデミー賞受賞)、イタリアのアンソニー・クイン主演『道』がヒット。

(8) 本・雑誌

2月、松本清張の「点と線」が雑誌『旅』に連載開始される。推理小説ブームがおきる。3月、初の女性週刊誌『週刊女性』が河出書房から創刊された。8月、主婦と生活社から再刊。翌年には『女性自身』(光文社)、1962(昭和37)年には『美しい女性』が創刊。これらは、女性ヤング層全体をターゲットにしているのではなく、戦後急増した女性事務員(ビジネスガールと呼ばれていた)に照準を合わせていた。都会に出て就職した若い女性向けの雑誌である。1964(昭和39)年になりやっと若い男性向け雑誌『平凡パンチ』が創刊される。12月27日、石森延男『コタンの口笛』(東都書房)が刊行された。現代児童文学の開祖といわれている。12月、辰巳ヨシ

ヒロは、『街』掲載の自作「幽霊タクシー」を劇画と名付ける。劇画のはじめ。

本の売上げ第1位が、新人の原田康子書いた『挽歌』で、70万部という画期的売上げをあげた。北海道の釧路を背景に異国的な叙情で、不貞の妻を持つ男をいたぶりながら自虐的に愛するという、これまでの日本女性とは異質な、小悪魔的女性を描き、注目を浴びた。異国風のムード広告が使われた。五社平之助監督により映画化され、「挽歌ブーム」、「挽歌スタイル」を生み出した。第4位が三島由紀夫の『美德のよろめき』である。肉体関係を持たない浮気なら、妻の美德は傷つかないとして、男と交際を始める、倦怠期に入った有閑夫人を描いたものである。経済的に余裕ができ、その余裕をもてあましている主婦に広く読まれた。「よろめき」が流行語にもなる。第2位が深沢七朗の『栖山節考』である。昔の伝説にある、老人を山に捨てるという残酷なテーマが、神武景気にのり、若者が農村を捨て都会に移り住み、農村に老人を置き去りにする今の姿を映し出しているとして、人々の心をうった。前年のベストセラー『太陽の季節』が欲望のままに突っ走る若い世代を描きだしたのに反し、年寄りの自己犠牲的生き様が描かれている。30万部に迫る売上げであった(定本ベストセラー昭和史、145頁)。第3位が谷崎潤一郎『鍵』、第5位が桑原武夫『一日一言』、第6位が田宮虎彦・千代『愛のかたみ』、第7位が佐藤弘人『いろ艶筆』、第8位が中島健蔵の『昭和時代』、第9位が辻豊・土崎一の『ロンドン東京五万キロ』、第10位が山崎豊子の『暖簾』である。

第37回芥川賞は菊村到の『硫黄島』、第38回芥川賞は開高健の『裸の王様』。第37回直木賞は江崎誠致の『ルソンの谷間』、第38回直木賞は該当作無しである。

この年創刊の雑誌。『ビジネス』(東洋経済新報社)。『経済セミナー』(日本評論新社)。『新領土』(蒼樹社)。『実存主義』(理想社)。『服装』(同志社)。『太陽』(平凡社)。10月、学習研究社が『1年の科学』、『2年の科学』など学年別科学雑誌を創刊した。『婦人倶楽部』と『婦人生活』が『主婦の友』に続いて大判化。『婦人朝日』はA5版に小型化。創復刊誌80誌、休廃刊誌92誌。

(9) まとめ

安全保障理事会の非常任理事国に選出され、国際舞台で活躍していくことになる。しかしジラード事件では、日本の主権が制限され、政治力の貧弱さが露呈した。その政権を岸信介が担っていくことになる。景気は、1,000億円の施策と減税にもかかわらず、下期からなべ底不況に入る。炭鉱の閉山第1号がでる。石炭と木綿産業は衰退している。自動車産業は、生産の合理化で、値下げ競争がおきる。「プリンススカイライン」や「コロナ」の名車を作りあげた。アメリカへの輸出も試験的に始まる。「ミゼット」により軽三輪車時代が始まる。郵政省も小包の配達に使う。二輪車は世界第2位の生産台数4万1,064台である。鉄鋼産業も技術革新と生産の合理化で、興隆している。石油化学コンビナートが初めて建てられ、次々と建てられていくこととなる。化繊、

合成ゴム、プラスチックなどの石油製品が、さらに普及していくことになる。世界最小のトランジスタラジオも輸出を伸ばそうとしている。これらの産業を支える資金は、IMF 借款供与や、証券投信により市場から直接調達するようになりだした。豊富な資金で、技術革新をなすとげ、安く・良いものをつくるので消費も伸びる。消費の場所として、次々と地下街が開業している。数寄屋橋を取り壊し、ショッピングセンターにしてしまう。ダイエー第1号店が誕生し、スーパーマーケットが増加してくる。働く女性が全労働者の3分の1を占める。「パートタイマー」という言葉も定着していく。安く働くパートが、コストを切り下げ、製品価格を安くして、それがさらに売上げを伸ばす。経営基盤は強化されているので、不況の影響は少なくすんだ。不況になっても、技術革新により新製品が次々と生まれ、人々はものに囲まれる豊かさを実現していく。文化的なポリバケツが、花嫁道具のひとつになる。ビニール製のクリスマス・ツリーも売れる。

第1次医療革命の成果で、結核や肺炎の死亡率が低下する。その代わりに、成人病のがん、高血圧の死亡率が上昇し、さらに医療費も急増する。食事の洋風化もその一因である。しかし小児マヒや流感が流行し、多くの死者を出している。精神薄弱児、盲児などの身体障害者にたいする医療体制も少しずつではあるが前進している。盲学校や聾学校での給食が、やっと開始された。しかし病気は次々と襲う。障害者も含めた、健康で豊かな生活に向け、前進するだけである。それはまだ実現できていない。また都市化の進行につれ、急増するゴミとし尿の処理問題も浮上してきた。1950（昭和25）年からの5年間で、ゴミは2倍、し尿は7割も増加し、その勢いは衰えていない。海洋投棄や埋め立ては限界に達している。衛生的で豊かな生活はまだである。

米は、機械化による農業の近代化により、今年も豊作である。徳用米制度も生まれた。しかし食事が洋風化していく。コカコーラも飲めるようになった。ジュースがブームになっている。ポップコーンに人気が集まった。動物蛋白質と脂肪の摂取量は少し増えている。前年度の森永粉ミルク中毒事件の影響で、食品添加物の規制が強化された。安全で、健康な食料こそ、豊かさの基礎である。

住宅はまだ230万戸も不足している。団地やアパートは次々と建てられていく。しかしそれ以上の人口が都市部に集中している。アルミサッシが使われ、高層耐火建設も少し増加する。建ぺい率の緩和もされ、敷地面積も少し拡大した。しかし住宅生活の豊かさはまだまだない。「ニュータウン」という新しい、より魅力的呼び名もつけられた団地内部での問題もおきている。団地に新しく移り住んできたいわゆる団地族と、昔から住んでいる地元住民とのディスコミュニケーションである。さらに団地内部でも問題がおきている。公営住宅、公団・公社の賃貸住宅、分譲住宅などに住む様々な階層の人々が団地のなかに住み分けているのだが、かれらの所得階層の差が、住宅、住区、住棟という目に見える形であらわされ、各階層間のディスコミュニケーションと葛藤を生み出した（消費資本主義のゆくえ、112頁）。憧れの団地族のなかに、カギっ子、白壁ノイロー

ぜ、団地っ子、保育所不足などの問題もおきている。団地に住めない人は、貧弱な民間木造賃貸アパートで、「起きて半畳寝て1畳」という劣悪な住宅環境に我慢しなければならなかった。

ファッション界にあたらしい傾向が生まれた。7,000校ある洋裁学校に男子学生が入学したのである。後に世界的デザイナーとして活躍する。デザイナーが男の仕事にもなる。しかし洋裁は、嫁の必要技術である。ミシンは嫁入り道具になる。下着ブームも続いている。新しいファッションのために、新しい下着がもてはやされるのである。下着の売上げは急増している。カリブソスタイルの流行とともに、茶髪もはやる。洋風化の一方で和服類の消費が急増した。男性もおしゃれに凝る。男性のモデルグループも生まれる。男性ファッションも多彩になってきたのである。男性用クリーム化粧品も売り出された。人口5万人以上の都市世帯における「被服費の内容別にみた消費の伸び率」をみると、和服類27.4%、洋服類15.5%、シャツ・下着類8.5%である(昭和40年度国民生活白書、58頁)。そして被服の消費量の前年比減は、戦後初めてである。食料以外の他の項目は増加している。その原因として、この年の後半からの不況の影響もある。しかしファッション生活では、最低必要なものの消費が満たされたので、ファッションに美しさ、楽しさ、ムードなどの多様な要素を選別して選ぶスタイルを確立しようとしていることが、大きな要因であろう。ファッションの豊かさも多様化し、選ぶ時代に入った。

南極観測隊が、南極の昭和基地に日の丸を掲げる。ストックホルムの世界大会で、卓球が5種目に優勝する。日本人に勇気を与えた。カナダ・カップで、中村寅吉が優勝する。ゴルフブームを引きおこす。ソ連が人工衛星を打ち上げるなか、日本でもロケット第1号が発射した。東京に阿波踊りをもってきて、商売を盛り上げようという、庶民のたくましさがある。ドライブ、サイクリング、登山、旅行もブームになる。道徳の時間がもうけられる。愛国心や防衛意識が強調される。文化を豊かに高めようとしている一方で、中・高校生の間で理由なき自殺が相次いでいる。前年度から、高校生の教師に対する集団暴行事件が続発している。中・高校は荒れている。社会の急激な変化に対応できない青年の、戸惑いと、焦りのあらわれである。豊かさへの急激な接近が、社会を激変させているなかで、弱者である中・高校生が、それに対応できず、荒れている。

この年ヒットした歌謡曲や映画の多くに、田舎から都会に出てきて働く人々の哀愁を歌いあげた曲がある。東京で働き、物質的に豊かな生活をしているが、心は、田舎に残してきた母親や恋人を思っている。都市化の進行の裏に、地方の過疎化がある。物質的豊かさの獲得のためには、心の豊かさを犠牲にしなければならないのか。小説でも『楢山節考』が田舎に残してきた、年老いた親の姿を映し出す。ベストセラーの『挽歌』が、これまでの日本女性と異質の奔放な女性を描き、注目を浴びた。『美德のよろめき』は「よろめき」という言葉を流行らせた。週刊誌では『週刊女性』が創刊され、翌年にも『女性自身』が創刊される。女性が元気で、豊かさを追求していつている。

5. 1958（昭和33）年

(1) 政治・経済

この年の上半期は「なべ底景気」と呼ばれた時期であったが、秋には急速な回復を示し、物価の安定、国際収支の均衡、雇用の改善も実現した。6月から「岩戸景気」と呼ばれることとなる急激な拡大を始める。その回復をもたらしたものは、4つある。①鉄鋼や石油化学などの分野での技術革新と消費革命（「消費革命」は、本年度の『経済白書』で初めて使われた）、②戦後の新しい経済機構や制度の働き、③金融における企業と銀行の密接な関係、④景気にたいする需要要因変動の時間的ずれ（製造業の設備投資は減少したが、新産業、基礎産業、公共投資などが増加した）、である（経済白書で読む戦後日本経済の歩み、71頁）。

本年度の主な経済指数。経済成長率実質5.5%。名目6.2%。年末現在日銀券発行残高8,910億円。本年度国際収支実質5億7,800万ドルの黒字。財政投融資実績4,252億円。民間最終消費支出実質8.0%、名目7.2%。民間企業設備投資名目-3.0%。輸出・名目-0.6%。消費者物価-0.4%。本年度産米1,199万3,000t。四輪車生産台数18万8,303台。三輪車生産台数9万8,877台。二輪車の生産台数50万1,332台。前年比22.3%増、モペット（原付一種）急増。4万9,006台。

1月1日、欧州経済共同体(EEC)が発足した。1月20日、インドネシアと平和条約・賠償協定などを結ぶ。経済開発借款にかんする公文書を交換する。賠償は12年間に2億2,308万ドル。

2月4日、日印通商協定および日印円借款協定を結ぶ（4月8日に発効。日本輸出入銀行が180億円を貸し付ける）。2月5日、アラビア石油設立。資本金100億円。中東で、日本自前の石油油田開発に乗り出す。2月24日、いすゞ自動車は、鶴見製造所に日本初のエンジン組立ライン（パワー・アンド・フリーコンベアライン）を稼働させる。2月26日、日中鉄鋼協定が成立。日本側は各種鋼材、中国側は石炭と鉄鉱石の輸出。

3月3日、富士重工は、軽四輪乗用車「スバル360」を発表した。発売は5月1日。空冷2気筒350cc、16馬力、定価42万5,000円。ゼロ戦などの戦闘機を作り上げてきた技術で、極限の軽量性と軽くて柔らかいサスペンション、そしてなによりも安くて（クラウンの半値）高性能の車を開発したのである。自動車を金持ちの道具から、家族4人でも乗れる「下駄履きの庶民の足」にしたいという技術者の執念の成果である。人気上がるにつれ「マイカー」という言葉が生まれ、「てんとう虫」というニックネームも付けられた。翌年5,000台、1960（昭和35）年1万2,700台を生産。1967（昭和42）年まで12年にわたりモデルチェンジをせず、総計39万台を売るロングセラーとなった。三種の神器の次の憧れの的として浮上したのがマイカーであり、その夢を実現したのが「スバル360」であった。翌年発売された「ブルーバード」とともに、マイカー

時代の幕開けを予感させる車であった（プロジェクトX9 熱き心、炎のごとく、121頁）。3月5日、第4次日中民間貿易協定を北京で結ぶ。3月6日、通産省は、鉄鋼業界に4品種の操業短縮を勧告すると決定した。平均30%、3～6月まで。鉄鋼業界では初めて。3月9日、世界初の海底トンネル関門国道トンネルが開通した。全長3,461m、着工以来21年目の完成である。3月21日、炭労は、賃上げで重点無期限ストに入る（6月18日妥結）。3月24日、全日本農民組合連合会が結成。農民組織が統一され、自民党との連帯が強くなる。3月28日、閣議は、電力問題懇談会の答申にもとづき電力広域運営方式の4月1日実施を決定した。

4月15日、いすゞ自動車が、貸切り用豪華バス「サロンカー」を発売した。エアーサスペンション、冷暖房、デラックス回転椅子付きである。4月26日、日本貿易振興会法が公布された（7月25日、日本貿易振興会（JETRO）が設立される。資本金の20億円は全額政府出費）。4月、4大証券会社に続き、玉塚、山叶、角丸、日本勧業、大阪商事の5証券会社が割引興業債券の直接取扱いをはじめ（9月3日には、大蔵省が、日本勧業、岡三、玉塚の3社に投資信託業務を許可する）。

5月2日、長崎の切手展で、一青年が中国国旗を引きずり下ろす。5月9日に北京放送は、岸政府が中国を侮辱したとの抗議声明を放送した。翌日から日中貿易全面停止になる。5月22日、第28回衆議院総選挙。自民287、社会166。自民の絶対多数は維持され、政策の安定が進む（6月12日に第2次岸内閣成立）。5月、三井石油化学がポリエチレンの生産を開始した。

6月9日、運輸省は、神風タクシー対策を強化した。6月16日、トヨタ自動車は、APA（在日米軍調達本部）から特需4,621台の落札をする。総額50億円余の大規模受注である。6月18日、日銀は、公定歩合を2厘下げ、2銭1厘とする。戦後最初の引き下げである（9月5日にはさらに1厘下げた）。

7月18日、無期限ストの「王子製紙争議」が始まった。以後、苫小牧など各支部で第2組合が結成され、衝突事故が多発する。12月9日に中労委の斡旋で妥結するまで続く。

8月6日、テレビで5秒スポットCMが始まる。8月15日、総評は、和歌山で勤評反対・民主教育を守る国民大会を開催した。8月16日にはデモ隊と警察が衝突。8月24日、日教組は、「9月15日全国統一行動、10割半日休暇」を決定する。8月27日、総評は、傘下の労働者の子弟の登校拒否を指示する。世論は賛否両論で沸騰する（9月4日、小林日教組委員長が逮捕された）。8月22日、国会で、次期主力戦闘機「グラマン」決定にかんする疑惑が追及された。グラマン疑惑で、政治が揺れる。8月、本田技研は「スーパーカブC100」（50cc）を発売する。

9月5日、国鉄は、真岡線の栃木・折本駅など3駅で、鉄道業務を地元通運業者に委託した。民間委託の最初である。採算の合わない路線の切り捨てが始まろうとしている。しかしドル箱路線には資金を投入する。9月、ミノルタカメラが1眼レフ「[ミノルタSR-2]」（3万1,500円）、10

月には超高速 1/2,000 秒シャッター付き「ミノルタ V-2」(2万 3,000 円)を発売する。

10月6日、富士精密(現在の日産自動車)は、国産初の普通乗用車を発表した。翌年2月に販売。10月7日に東証出来高が1億株を超える。株式ブーム。10月、国鉄は、特急「あさかぜ」(東京―大阪)を全車両寝台車にする。初のブルートレインである。

11月1日には国鉄東海道線の、東京―神戸間に新特急「こだま」を登場させた。東京―大阪間6時間50分。経済の発展につれ、3大都市である東京と名古屋、大阪間を行き来する人々が増大したのである。11月5日、警職法改悪反対闘争が、国会抜打ち会期延長で激化する。総評、全労、中立系労組、文化人、学生、主婦等が、統一闘争を開始した。11月15日、東京電力は、新東京火力発電所の操業を開始した。総出力48万 2,000 kw。

12月1日、初の一万円札が発券された。図柄は聖徳太子の肖像である。1984(昭和59)年11月1日、福沢諭吉の肖像入り一万円札にかわるまで続く。12月25日、公共用水域水質保全法と工場排水規制法が公布された。12月、主婦の店2号店が、神戸の三宮にオープンした。前年に大阪の私鉄駅前に1号店をオープンさせたのに引き続いての、ダイエーのチェーン店化の開始である。スーパーマーケット=安売り時代の幕開けである。それは、「安かろう、悪かろう」への伝統的規範と、「安いことだけにつられることははずかしい」という伝統的美意識を破壊した。都市化が進み、新興住宅街が次々と生まれていくなかで、「駅前にスーパーがある」が、新しい生活スタイルとして定着していく。

この年、鈴木自動車は5月に「スズモペット SM 型」、本田技研が8月に「スーパーカブ C 100」5万 5,000 円を売り出す。原付第1種(50 cc 以下)である。モペット・ブームがおきた。簡便性と経済性で、通勤、通学、商用、レジャーと幅広く使われた。本年4万 9,006 台、翌年43万 4,590 台、1960(昭和35)年90万 4,707 台、1961(昭和36)年113万 4,535 台と生産額を伸ばす。しかし1961(昭和36)年11月から、免許が必要になり、2人乗り・速度・積載量などの規制がつけられたため、昭和30年代後半には60万台近くまで生産が落ち込む。軽自動車に需要が移行してしまったのだ。だが保有台数は確実に増大している。本年29万 8,720 台、翌年41万 6,706 台、1960(昭和35)年67万 1,134 台、1961(昭和36)年141万 269 台、1962(昭和37)年208万 6,716 台である(日本自動車産業史、169頁)。大学卒の初任給は1万 2,000~1万 3,000 円。勤労者世帯の実収入は月に3万 4,000 円であった。モペットは買いやすい価格であった。この年の、企業の広告費が1,000 億円を突破し1,065 億円。1967(昭和42)年には4,595 億円、1989(昭和64)年には5兆 715 億円。国民所得の伸び率よりも高い率で増加している。この年、1951(昭和26)年頃から広がってきた月賦販売は急速に普及した。月賦販売ストアー・緑屋などの売上げもこの年初めて30 億円を突破する。この頃よく売れた衣類は、セーターが1位で2,400 円、2位がカーディガンで1,500 円、3位が靴下300 円の順であった。1960(昭和35)年には丸井が

「クレジット」という言葉を初めて使用し、貧乏くさい買い物法でなく、上手な買い物法というイメージを若い世代に定着させることになる。電化製品は、煙がでずに魚が焼ける「フィッシュ・グリル」、電気座布団、遠心式脱水機をついた2槽式洗濯機、鍵つき冷蔵庫、ポータブル式テープレコーダー、家庭用換気扇、スチームアイロン、FMラジオ受信機などが売り出された。丸大食品、イトーヨーカ堂などが創立された。

(2) 社 会

1月、26日、和歌山一小松島間就航の南海フェリー「南海丸」が沈没し、167人が死亡した。3月1日、東京の世田谷保健所は、未熟児の母親に保育器の無料貸出しを始める。3月1日、国立精神薄弱児施設および国立聾啞者更生指導所の設置が決まる(6月5日、に埼玉県所沢市に精薄児施設「秩父学園」が開設)。3月3日、フジテレビで『テレビ結婚式』の放送が開始された。司会と仲人役は、名調子の徳川夢声。3月10日、三菱銀行が「愛妻預金」の取扱いを開始した。3月12日、北極圏でおこなわれたソ連の核実験の影響で、全国に放射能雨が降る。東京で1万4,900カウント、大阪で2万400カウントを検出した。3月11日、文部省は、全国の都道府県教委に、越境入学をさせないよう通達。3月18日、文部省が、小・中学校に道徳の実施要項を通達した(4月から週1時間実施することになった。8月28日には道徳の学習指導要領を告示した)。3月24日、初のフィルター付きたばこ「ホープ」40円が新発売された。物足りなさがあるが健康によいと、健康ブームで売上げを伸ばす。3月30日、東京の明治神宮外苑に国立競技場が完成した。総工費30億円(5月24日、そこで第3回アジア競技大会が開催された)。4月1日、売春防止法が実施された。全国約3万9,000軒の業者と従業員12万人が消える。しかし特殊浴場(後のトルコ風呂、ソープランド)として生き延びる業者が目立った。4月11日、最高裁は、内縁関係を不当に破棄した被告に、損害賠償と婚姻費用の分担を命じた。内縁を婚姻に準ずる関係と認められ、女性の地位が少し上がる。4月、ニッポン放送が交通ニュースを開始する。5月1日、文部省は、すし詰め教室を解消するために、公立小・中学校の学級定員を50人とした。団塊世代が次々と学校に入り出し、限界に達しようとしている。

5月1日、東京駅、上野駅、新橋駅など9ヵ所に公衆電話サービスステーションが設置された。東京で計20ヵ所になった。東京の電話総数は50万台、100万台を超えるのは1963(昭和38)年。5月10日、大都市でノー・クラクション運動が始まる。東京では警笛の使用回数が約20分に1回。5月30日、B・C級戦犯18人が、東京の巣鴨拘置所を仮出所した。巣鴨プリズンが閉鎖された。6月1日、国鉄は、東京・品川一京都間で修学旅行電車の運転を開始した。6月9日、厚生省が人口動態を発表した。9,176万7千人。出生率は、人口1,000人に対し18.0で、世界でも最低水準に下がった。以後減少し続ける。6月10日、本州製紙江戸川工場の廃水放流に抗議

する千葉県と東京都の漁民 700 人が、工場に乱入し、警官隊と衝突し、100 余人が負傷した。6 月 14 日、日仏合同日本海溝学術調査のフランス潜水艇「バチスカーフ号」が、宮城県の女川沖で初潜水する。6 月 20 日に最深 3,000 m に達する。7 月 13 日、中国引き揚げ最終船「白山丸」が 579 人を乗せ舞鶴港に到着した。

7 月 31 日、小・中学校の学習指導要領が改定された。教師が自ら教育内容をつくる時の参考資料であった学習指導要領が、法的拘束力をもつ文章になった。教科書検定制度が強化されたのである。考古学的記述に国家的観点が強調されていく。8 月 1 日、がん学界、日本医師会、財界などが参加して日本対ガン協会が発足した。胃がんや子宮がんの検診をおこなう。9 月 1 日には、千葉県が全国に先駆けて県費負担によるがん診療を開始した。8 月 4 日、京大登山隊が、ヒマラヤのチョゴリザ (7,654 m) に初登頂した。8 月 21 日、厚生省は、全国に小児マヒ防疫対策を指示する。小児マヒ患者が 2,000 人を超す。8 月 21 日、小松川高校女生徒が、絞殺死体で発見された (9 月 1 日、犯人の朝鮮人生徒 (18 歳) が逮捕された。劇場型犯罪のはじめである)。8 月、東京の荻窪に 24 時間通話可能な赤電話が登場した。夜間でも店頭に出すようになったのである。8 月、東京都豊島区に戦災孤児のための施設「アフターケア・センター」が開設された。後、青少年福祉センターと改称。

9 月 26 日、狩野川台風が、近畿以北に大被害をもたらした。死者・行方不明 1,189 人、全壊流出 1,044 戸。9 月、大学教授夫人親子の長男殺害、姉妹による怠け者の父親殺害など、親が子を、子が親を殺す肉親殺しが続出した。9 月、大阪で、老人の保護と福祉をたかめる国民会議が開かれる。老人福祉法が公布されるのは 1963 (昭和 38) 年、福祉 6 法のうち最後にやっと公布される。11 月 27 日、東京都葛飾区の青戸団地に、保育所が開設。公団住宅保育所のはじまりである。12 月 1 日、警視庁は、パトカーを全署に配備した。12 月 12 日、文部省は、教科書用図書検定基準を告示。12 月 23 日、東京タワーが完成する。高さは 333 m、塔ではエッフェル塔をぬき世界第 1 位。地震や台風の脅威にさらされる日本で、わずか 15 ヶ月の突貫工事で完成した鉄塔に、世界も注目した。東京の新名所となる。12 月、道路交通法が改正され、路上駐車規制強化、全国主要幹線道路の速度規制の統一がおこなわれた。

この年、都会で神風タクシーが横行した。車が渋滞するなか、速度オーバー、信じられないような追い越し・急旋回といった「かみわざ」で、他の車をくぐり抜けていくタクシーを「神風タクシー」と呼んだ。『週刊新潮』の 1956 (昭和 31) 年 3 月 4 日号に、東京にきた外国人がタクシーの運転に驚いてそう呼んだ、というのが最初だと記されている。事故も多発し、社会問題化した。原因は、運転手の固定給の少なさやノルマ制などの労働条件にあった。ノルマ制の禁止、1 日あたりの走行距離を 350 km に制限するなどの規制をつけると、徐々に減少してきた。8 ミリ映写機が人気。家事代行サービス業のはしりである「オムツ・サービス会社」(貸おむつ)が登場し

た。家事の外部化が始まろうとしている。成人病である、脳血管疾患、がんなどの悪性新生物(1981(昭和56)年以降死因順位の第1位)、心疾患が、死因の上位3位までを占める。食生活と衛生状態の改善が、結核などの病気を後退させた。しかし高度成長経済のなかで、生活と労働が激変し、ストレスを高めることで、成人病をはじめとした新たな疾患や健康問題に向きあうことになる(戦後日本病人史, 91頁)。

(3) 食 料

1月7日、閣議で第4次アメリカ余剰農産物の受入れ辞退を決定。小麦の輸入量は、翌年まで減少するが、1960(昭和35)年から急増する。国内小麦生産の安楽死政策は続く(戦後日本農業の変貌, 48頁)。1月15日、東京都の学校給食に牛乳が加えられる。アメリカでは家畜の飼料である脱脂粉乳の牛乳でなく、父母の望んだ本物の牛乳である。1月16日、大阪市に、他の大都市に先駆けて食肉中央卸売市場が開設された(9月30日には名古屋市食肉中央卸売市場、翌年9月19日には福岡市食肉中央卸売市場が開設される)。1月、東京飲料(現在の東京コカコーラボトリング)が、「ファンタ」オレンジとグレープを発売した。2月、渡辺製菓が、無果汁の「粉末ジュースの元」を発売する。粉末ブームに火をつけた。3月8日、厚生省が『栄養白書』を発表した。4人に1人が栄養不足であり、もっと動物性蛋白質を摂取するべきだと警告した。動物性蛋白質の摂取量は、1961(昭和36)年から急増するが、それまでは微増にすぎない。先進国の5分の1の14gを、1人1日摂取しているにすぎない(昭和40年度国民生活白書, 42頁)。4月、武田薬品は、果汁飲料「ブラッシー」を米販店ルートで発売する。4月、コンフリーが初めて輸入された。超高栄養野菜として爆発的ブームをおこした。健康食ブームのはしりである。7月1日、東京都は30%節水をはじめ。7月4日、閣議で生産者米価を1石当たり1万323円と決定した。7月、酪農審議会は、牛乳過剰対策として、学校給食生乳30万石(10億円)供給などを決定する。8月25日、日清食品が、初のインスタントラーメン「チキンラーメン」を発売した。1袋85g, 35円。爆発的人気で売れた。生産量1,300万食。以後エスビー食品、明星食品などが参入した。1961(昭和36)年には東洋水産が「タヌキソバ」、サンヨー食品が「長崎タンメン」を発表した。9月、朝日麦酒が、わが国初の缶ビール(ブリキ缶)を発売した。「グラスがなくとも、どこでも気軽にビールが楽しめる」という新しいスタイルを打ち出し、賛否両論を巻きおこした。2004(平成16)年7月今度はペットボトル入りビールを売り出した)。8月22日、閣議は、乳業者に生産者乳価引下げ停止を勧奨、消費者乳価引下げ、集団消費の普及と拡大を図るなどの乳価対策を決定した。12月、100円パイン缶が登場した。12月、キューピーが「フレンチドレッシング」を発売した。市販ドレッシングの最初である。

この年、米の作付け面積325万3,000ha、本年度産米1,199万3,000t。1955(昭和30)年に次

ぐ豊作。10 a 当たり収量は 379 kg。サンマの漁獲量 57.6 万 t, 史上最高。価格は前年比 40% もの下落。1 kg 当たり 20 円。リンゴの新新種「フジ」がつくられた。米軍向けだったレタス, セロリ, カリフラワーなどの西洋野菜が日本の家庭にも広がる。国鉄上越線の横川駅の「釜めし」が売り出される。1961 (昭和 36) 年には爆発的な売れ行きで, 年商 150 億円と駅弁日本 1 になる。アメリカン・ドラッグ社が, 脱臭剤「キムコ」を発売する。商品名は, アメリカの電話帳から採った 6 つの名前から, 日本女性名に類似したものを選んだ。

(4) 住 宅

2 月 12 日, 東京の武蔵野緑町団地ほか 2 団地に, 住宅公団初の 1 DK 住宅を完成した。3 月, 東急不動産が初の 2 階建の建売り住宅を販売した。6 月 10 日, 東急不動産が, 中軽井沢に別荘地販売を開始した。初の本格的別荘分譲である。7 月 20 日, 『週刊朝日』の「新しき庶民ダンチ族」という記事に「団地族」という言葉が登場した。以後, 流行語になる。団地はまだ, 最先端の施設の整った憧れの住まいであった。この年で団地族は 100 万人を超した。7 月, 厚生省が, 6 大都市のスラム街 8 ヶ所に共同浴場の建設を決定した。大人 5 円, 子供 3 円である (東京の公衆浴場では大人 16 円)。10 月, 伊奈製陶 (現在のイナックス) がポリバスを発売した。11 月, 阪急不動産がオールスチール製組立てハウスを発売した。

(5) ファッション

4 月, フランスのデザイナーのピエール・カルダンが来日した。以後, 彼をまねて, 日本のデザイン界は立体裁断に変わる。4 月, イタリアの女性デザイナーのブランビラーが来日した。三越と伊勢丹が, イタリアン・ファッションを導入する。4 月, サック・ドレスが登場し, 秋まで爆発的人气。ディオールの H ラインの影響を受けている。サック・ドレスは, 1954 (昭和 29) 年にディオールが作りだしたドレスだが, 当時は全く売れなかった。1920 年代の復古調的モードであり, 太った印象を与えた (ブリュノ・デュ・ロゼル, 西村愛子訳, 20 世紀モード史, 354 頁)。男性からは, 「南京袋スタイル」, 「妊婦スタイル」, 「ねまきスタイル」, 「昔のアップパップと同じスタイル」と, 評判が悪かった。しかし女性には好評だった。ウエストの締め付けがない。価格が比較的安い。シルエットが単純なため, ウエストを軽くしめるベルトをかえたり, アクセサリーや帽子と手袋の組み合わせをかえたりして, バリエーションを楽しめた。サック・ドレスは既製服がそのままティーンに受け入れられた最初のファッションであるといわれている。洋裁で作るのでもオートクチュールでもない既製服に, 初めてカッコいい服が登場したことを意味する。これにより 1959 (昭和 34) 年から 1960 (昭和 35) 年にかけて 10 代路線が敷かれるひとつのきっかけができた。高島屋は「ジュネス・ショップ」, 伊勢丹は「ティーンエイジャー・ショップ」

と「セブンティーン・センター」、西武は「グリーンエイジャーズ・ショップ」、三越は「ジュニア・サロン」などのコーナーを開いていく。こうしてティーンズファッションは、洋裁時代から既製服時代に移行した。ティーンズの発言と消費行動がともに飛躍的に高まる1960年代は、このサック・ドレスから幕が開いたのである（ストリートファッション1945-1995, 70頁）。女性のハイヒールの踵が細くなるのはこの頃からである。女性がハイヒールの歩き方になれてきたこと、アスファルト道路が増え、歩きやすくなったことが原因である。4月、フランスのマギー・ルフが、「ベビードール」を発表する。4月、厚木編織（現在の厚木ナイロン）がシームレス・タイツの本格的生産を開始した。8月、シームレス・ストッキングを発売する。1足400円である。厚木ナイロンは1953（昭和28）年にシームレス・ストッキングを開発し、売り出している。しかし全く売れなかった。当時は、後ろにシームラインという筋のある「フルファッション・ストッキング」が主流であった。このシームラインが少しでも曲がっていれば、どんなにステキな洋服を着ていても失格であった。30分ごとにシームラインを気にしなければならなかった。シームレスは気苦労なしに着れる、便利品だったが、当時は反対意見が多かった。「なにか物足りない」、
「足が太く見える」、
「素足のように見える」との意見。東京でも「よそいき用」にストッキング1足をもてるようになるのは1953（昭和28）年頃であるので、ストッキングをはいても他人にわからなければ、高い金（スーツ1着分の値段）を出しておしゃれしている意味がなかったのである。本年売り出されたシームレス・ストッキングの値段は1足400円。当時の厚地ナイロン工業の女性従業員の年収が13万円であるから、1足が1日分の給料に相当する。まだ売れない。1961（昭和36）年再発売されると、飛ぶように売れた。1965（昭和40）年にはストッキングの95%を占めるようになる。あらゆるメディアを使っての大宣伝戦の効果により、女性の美意識を変化させたこと、さらに、年収も増大して1足120円という1時間分の給料でもおつりがくるほどの消耗品になったことが、爆発的売上げの理由である（『モノと女』の戦後史, 44~47頁）。5月、女性が男性用のシャツを着ることが流行する。女性がデパートの紙袋を持って歩くことも流行する。8月、花王石鹼（現在の花王）が、洗剤「ワンダフルK」を発売する。粉180gで50円、液体350ccで100円。

この年、ディオールの後任デザイナーに選ばれたイブ・サンローランが、「トランペーズ・ライン」を発表する。ピンク系口紅が発売された。口紅は赤いものという常識が破られた。ビニロン、ナイロンに続いてアクリル繊維の生産が開始された。テトロン、カミロン、ボンネル、アセテートなどの繊維も量産体制に入った。これらの化繊は、染色性に優れ、各種の美しい色に染めることができ、しかも保温性に優れている。ネグリジェや7色パンティなど、下着のカラー化が進んだ。耐熱性があり、乾きの早いポリエステルも生産されるようになった。襷が消えずアイロン不要の特性が、忙しい現代生活に歓迎された。ジャクリーヌ・ササー主演の『三月生まれ』

の影響でササール・コート（トレンチコート）が流行し、『芽ばえ』ではササール・タイツが話題になった。映画『悲しみよこんにちは』の影響でセシル・カットが流行。今年も茶色に染めた髪やアクセサリーがブーム。

ロカビリーは大流行であったが、リーゼントにウエスタンシャツとマンボズボンというロカビリー・ファッションはさほど流行しなかった。リーゼントは、1947（昭和22）年頃に流行したアプレゲールの髪型で、古くさいというイメージがあったからであろう。だが地方ではかなり流行したし、小林旭は長くリーゼントであった。この頃登場してきたカミナリ族のファッションもあった。後に車に代わり「カーキチ族」と呼ばれ、1972（昭和47）年からは警察用語の「暴走族」と呼ばれるようになる。ナイロン製の長く、白いマフラーを首に巻き、革ジャン、ヘルメット、ゴーグル、ジーンズ、ハンチョーカ（半長靴）を身につけることが、きまりだった。白いマフラーは、特攻隊風をイメージさせるとともに、当時の人気番組『月光仮面』のオマージュであった。革ジャンは、闇市で活躍していたやくざの服装であった。ノーヘルが普通の時なのにヘルメットをかぶった。大人のひんしゅくを買うための、生意気なファッションであった。不良の先輩格「太陽族」へのシンパシーでもある。ヘルメットの下は慎太郎刈りで、裕次郎の影響で白いトレーナー、というパターンもよく見られたという。かれらが、マフラーをはずした単車に乗り、轟音を響かせながら、町中で危険走行を繰り返したのである。本年の夏には、湘南海岸に数千台のオートバイが群がり、マスコミをにぎわした。翌年には、夜間照明の整った、神宮外苑、銀座の首都高で、毎土曜日の夜、カミナリ族の祭りがくり広げられた。1962（昭和37）年頃まで衆目を集める。その時期は、モータリゼーションの入り口の期間であった。マイカー時代の到来が1960年代後半。1950年代末のこの時代は、富裕層以外は自動車を持っていなかった。二輪車が四輪自動車に先立ち、普及した。翌年、国内外のレースで連戦連勝する、国産初の本格的ロード・スポーツバイク「ヤマハ YDS 1」（2サイクル、250 cc、18万5,000円）が発売され、本田技研が、世界 GP レース・マン島レースでメーカー・チーム賞を受賞する。その年、四輪自動車はまだ31万8,758台の保有なのに二輪車保有台数が200万台を突破し、交通事故数も1万人を突破する。二輪に限った交通事故死者数は、前年比61.2%増である。しかし2人乗りオートバイの価格は、17万から30万円。安いモペットでは様にならなかった。まだ高価であるので、自営業者の子弟が、自分の家の営業車を乗り回すことが多かった（ストリートファッション1945-1995、63頁）。移動手段と独特のファッション（固有のスタイル）の獲得が、「族」確立には必要である。そして若者が自由にお金を使える豊かな社会の実現も必要である。

(6) 文化・レジャー

1月、子供たちの間にロケット遊び「オネストジョンごっこ」が流行する。紙雷管をほぐし、

鉛筆や万年筆のキャップに入れて飛ばすものである。事故も多発した。この月東京だけで8件の事故。2月3日、若乃花が第45代横綱になる。栃若時代の到来である。2月8日、東京の日劇で第1回ウェスタン・カーニバルが開かれた。1週間で4万5,000人を動員する爆発的ロカビリー・ブームがおこる。ロカビリーは、ロックンロールとヒルビリー（カントリーアンドウエスタンの一種）を混合したもの、といわれている。その熱狂は、たぶんに仕掛けられたものであった。若い歌手たちは、舞台上で体をよじり、転げ回って熱唱する。観客の若い女性は、テープを投げ、泣き叫び、舞台に駆け上がってスターに抱擁し、気絶する熱狂ぶりである。しかし歌手に抱きついたり、下着を投げるなど過激な行動をとった親衛隊の一部は、サクラやホステスさんたちで、ティーンたちがおこした、自発的ブームではなかった。ブームを仕掛けたのは、ナベプロの創始者・渡辺美佐だといわれている。芸能界は、それ以後ナベプロの支配下に入る。ロカビリー・ブームは、1960年代には下火になる（ストリートファッション1945-1995, 59頁）。

2月14日、メリーチョコレートが、東京・新宿の伊勢丹でバレンタイン用チョコレートを初めて販売した。1枚170～200円。この時は3枚しか売れなかったが、昭和30年代後半になると倍々ゲームで売上げが伸び、1985（昭和60）年には170億円の市場へと膨れあがる。2月24日、ラジオ東京テレビ（現在のTBS）で、テレビ映画第1号『月光仮面』の放送が開始された。月光仮面は、子供たちのスーパースターになる。白いマントと白い仮面が人気になる。白いマント、それが買えなければ風呂敷を首に巻き、白い仮面を付け、屋根から飛び降りたりする子供たちが増え、社会問題になる（5月には川内憲範作・桑田次郎絵の「月光仮面」が『少年クラブ』で連載開始される。12月には極東ノートが『月光仮面』のキャラクターノートを発売し、ヒット商品となる）。4月、公営ユースホテルおよび国立青年の家の設置が始まる（2004（平成16）年現在、公営ユースホテル約350、国立青年の家13）。5月4日、初の国民体育デー。5月5日、東京の多摩動物公園が開園した。5月、エポック社が「野球盤」を発売する。大ヒットする。1,700円。7月6日、大相撲は、この年より6本場所制となり、初の名古屋場所が始まる。昨年5月4日に相撲協会理事長出羽の海が改革問題に悩み、切腹未遂事件をおこす。後任の時津風理事長が、9月場所より茶屋制度を廃止し、1～20号の番号に改めたり、2階東西席を椅子席にするなどの改革を進めた。本年の9月5日には、相撲協会が、力士の数を減らし、行事や年寄りに定年制を設ける。人気の相撲界でも近代化の波が押し寄せている。

7月15日、日本交通公社が、スキー・スケート旅行傷害保険の取扱いを開始した。スポーツ保険の最初である。この頃ゴルフ保険も登場した。スキー、スケート、ゴルフのブームがおきていることを示している。7月、日本ビクターは、電子オルガンの国産第1号「ビクトロン」を発売する（8月1日には、国産初のステレオレコードも発売する）。10月23日、プロ野球・巨人の長嶋茂雄が本塁打王（29本）、打点王（92点）でセリーグ新人王を獲得した。10月21日に巨人

の川上哲治が現役を引退した。この年王貞治が巨人入団契約を結ぶ。新しい巨人時代が始まろうとしている。10月の日本シリーズでは、巨人3連勝の後、西鉄が、稲尾投手の活躍により奇跡の4連勝で優勝する。「神様・仏様・稲尾様」という言葉が流行する。10月、三菱鉛筆が、国産最高級の鉛筆「ユニ」を発売した。1本50円。普通の鉛筆の5倍の価格である。10月、「フラフープ」が大流行した。1本270円、子供用200円。デパートなどで、開店2時間で1,000本も売れる盛況ぶりであった。警視庁は、道路で熱中する子供たちが交通事故にあわないよう、全国の警察に指導した。12月になると体調を崩すとの世評で売れ行きが止まる。11月、東京・日本橋の三越で、第1回日本盆栽名品展が開かれた。12月、マルサン商店が、初の国産プラモデルを発売した。「ノーチラス号」など4点。

この年、中国とソ連との文化交流が盛んになる。3月松山バレー団が訪中。4月淡路人形一座が訪ソ。5月書道代表团訪中。6月歌舞団訪中。8月ソ連で日本工芸美術展。10月北京で光琳展。紙芝居が、貸本屋の漫画におされて低調になる。縁日の金魚すくいに、和紙の他に「もなか」が登場した。セルロイド製一辺倒であった筆箱に、チャック式のビニール製が登場した。

(7) 音楽、テレビ、映画・新聞

フランク永井の当たり年であった。『有楽町で逢いましょう』が大ヒットすると、大映で映画になるという、逆転現象がおきた。また日劇の「ウェスタン・カーニバル」がきっかけで、ロカビリー・ブームがおきた。若者の熱狂ぶりに大人たちは、驚くとともに眉をひそめた。平尾昌章の『ダイアナ』と『星はなんでも知っている』、小坂一也の『監獄ロック』がヒットした。ベストテンの残りは次のとおりである。石原裕次郎の『嵐を呼ぶ男』と『明日は明日の風が吹く』、若原一郎の『おーい中村くん』、小林旭の『ダイナマイトが150屯』、雪村いづみの『ピリカ・ピリカ』、村田英雄の『無法松の一生』である。フランク永井はリリースする曲のほとんど、つまり『西銀座駅前』、『羽田発7時50分』、『こいさんのラブコール』、『有楽町0番地』と立て続けにヒットを飛ばした。

NHKの「BSあなたが選ぶ時代の歌」は次の9曲である。『嵐を呼ぶ男』、『ダイナマイトが150屯』、島倉千代子の『からたち日記』、『星はなんでも知っている』、ポール・アンカの『君はわが運命』、『ダイアナ』、松山恵子の『だから云ったじゃないの』、『無法松の一生』、『おーい中村くん』である。

村瀬学氏は、本年度の歌謡曲に関して興味あることを指摘する。『おーい中村君』は、個人の名が歌のなかで初めて呼ばれた特筆すべき歌である。1953（昭和28）年の『君の名は』でやっと、「君の名は」とたずねてくれる人が現れたのである。1953（昭和28）年の『街のサンドイッチマン』のように職業名で呼ばれるのでもない。名前で呼ばれることは、都会での暮らしにはな

かった。1954（昭和29）年の『お富さん』のように、死んだと思われるために変えた名前を呼ばれるのでもない。「おーい中村くん」と実名を呼ばれるのである。都会のなかでは、個人名は喪失する。本年ヒットの『月光仮面』では、どこの誰だか名前は分からないが、月光仮面というあだ名だけ分かる、良い人だと誰もが知っている人物が歌われている（なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、41頁）。ふるさとを捨て、都会にやってきて、周りは見知らぬ人々。名前も呼ばれない。せいぜい職業名だけでしか呼ばれない。みんなに、良い人だと知ってもらいたい。君の名はとたずねてもらいたい。できたら実名で呼んでももらいたい。都会のなかで、大衆という名前を喪失した人の明るい願望が、ヒットの要因である。

この年最大のヒット曲『有楽町で逢いましょう』というムード歌謡は、都会の恋人たちが共有する狭い空間での、2人だけの強い結びつきを歌っている。その曲で歌われている「濡れて来ぬかと気にかかる」あなたは、ただの好きな相手でも結婚した相手でもなく、危うい恋心を抱き、一生懸命に気遣いをしている相手である。前年ヒットした『俺は待ってるぜ』で歌われた、一方的にこちらの意志を押しつける相手でない。いつか終わる恋の相手かもしれないが、今の関係を命をかけて守り通そうという気持ちで、あなたを待っているのである。そしてこのムード歌謡は、1958（昭和33）年の和田弘とマヒナスターズ『泣かないで』と1961（昭和36）年の石原裕次郎と牧村句子の『銀座の恋の物語』へと昇華していく。それらの曲でも、見守ってくれる月も星もない都会の、人工的明かり（ナイトクラブの灯りなど）に照らされて、2人だけの小さな空間を共有する切なさが歌われている。2人は「2人のおさまった関係」つまり結婚生活に入れない。男は、中途半端に、曖昧に2人の関係を甘く歌う。女は、収まらない2人の関係を切なく歌う。すべてを見通す象徴としての月も星もない。2人の舞台は、雨が降っていたり、霧がかかったり、ナイトクラブの灯りの下であったりする。まさに、人々を結びつけるもの（太陽、月、星）のない、各人がバラバラな都会の風景である。そのような都会のなかで、2人だけで、許されぬ恋を真実の恋として受け入れ、2人だけの結びつきを深めていく。都会のなかで、唯一結びついた2人の許されぬ関係を深めたいという、切ない願望が、ヒットの要因である（なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、71～75頁）。

この頃の音楽スポットとして、「ジャズ喫茶」があった。ジャズ喫茶のはしりは、1953（昭和28）年の「テネシー」（銀座）といわれている。そこでは、ジャズばかりがかかっていたわけではない。カントリーアンドウエスタンやハワイアンあるいはマンボが流行すれば、それがかかった。ロカビリーの歌手（平尾昌章、ミッキー・カーチス、山下敬二郎がロカビリー3人男といわれていた）が、ライブを開くこともあった。1960年代のグループサウンズも、ジャズ喫茶から多くでた。「うたごえ喫茶」も音楽スポットであった。共産党の「うたごえ運動」の大衆化したもので、主に新宿を中心としていた。アコーディオンに合わせてロシア民謡や『もずが枯れ木で』

などの愛唱歌を皆で歌っていた。正反対の2つの音楽スポットは、断絶していたのではない。ジャズ喫茶に、落下傘スタイルやマンボスタイルで行き、熱狂した若者が、次の週には地味なワンピーススタイルでうたごえ喫茶に行き、息抜きをすることもあった。左翼とノンポリのティーン文化はさほど違いはなかったのである（ストリートファッション1945-1995, 59頁）。

テレビでは、4月3日、NHK テレビで連続ドラマ『事件記者』（30分2週完結）の放送が開始された。4月7日、初の連続帯ドラマ『バス通り裏』も開始された。10月31日、ラジオ東京テレビで、テレビドラマ『私は貝になりたい』（演出・岡本愛彦、主演・フランキー堺）が放送される。本年のテレビ部門芸術祭賞を受賞した。「私は貝になりたい」という言葉が大流行した。『文藝春秋』の「読者500人大アンケート史上テレビ番組ベスト100」の第5位が285票の『私は貝になりたい』、第6位が230票の『事件記者』、第27位が91票の『バス通り裏』である。1983（昭和58）年の『おしん』が第1位で731票であった。テレビドラマの収穫が多かった年である（文藝春秋、1996年2月号、366頁）。アメリカテレビ映画『ローンレンジャー』も人気。この年のNHKのテレビ受信契約数90万8,710、翌年198万2,379。NHKのラジオ受信契約数が1,481万3,102。テレビ局17局になる（12局増える）。

この年は、『パパは何でも知っている』（日本テレビ、1958（昭和33）～1964（昭和39）年）、『うちのママは世界一』（フジテレビ、1958（昭和33）～1966（昭和41）年）のアメリカ製のホームドラマが放映される。前年放映された『アイ・ラブ・ルーシー』（NHK）、『パパ大好き』（フジテレビ）、翌年放送され始めた『ビーバーちゃん』（日本テレビ）などのテレビ映画は、典型的アメリカの中産階級家庭生活を描き出し、物質的豊かさ、平等な男女関係のモデルを提供した。三種の神器の普及率がさらに高まる。少女漫画をドラマ化した時代劇コメディ『あんみつ姫』（ラジオ東京テレビ）の放映開始。マンガがテレビに進出してくる。

映画は、井上梅次監督、石原裕次郎主演『嵐を呼ぶ男』、豊田四郎監督、森繁久彌・伴淳三郎主演『駅前旅館』、今村昇平監督、長門裕之主演『にあんちゃん』、木下恵介監督、田中絹代主演『榎山節考』、市川崑監督、市川雷蔵主演『炎上』。稲垣浩監督、三船敏郎・高峰秀子主演『無法松の一生』が、ベニス国際映画祭でグラン・プリ受賞。グレゴリー・ペック主演『大いなる西部』、スペンサー・トレイシー主演『老人と海』などが人気。

この年の石原裕次郎の人気はすさまじく、稼ぎまくっている。1961（昭和36）年だけ4本だが、1957（昭和32）年から1960（昭和35）年まで1年9本の映画に出演している。1973（昭和48）年まで、99作品に出演。本年1月15日封切りの『夜の牙』は2億円の配給収入、3月11日封切りの『錆びたナイフ』は2億円の配給収入、4月15日の『陽のあたる坂道』は4億円、4月29日の『明日は明日の風が吹く』は3億2,150万円、8月12日の『風速40米』は3億1,800万円、9月23日の『赤い波止場』は2億7,985万円、10月29日の『嵐の中を突っ走れ』は2億

8,972万円。12月28日の『紅の翼』は3億6,495万円、合計23億7,300万円を稼ぎ出した。現在の金額にすると約10倍の237億円。当時の裕次郎のギャラは、日活専属料300万円(年間)、1本の出演料約150万円であった。しかしこの年の入場者数11億2,745万人がピークで、以後テレビにおされて減少する。

(8) 本・雑誌・新聞

第1位が五味川純平の『人間の条件』である。出版まで数社をたらい回しにされ、1956(昭和31)年8月に三一書房から出版されてもほとんど問題にされなかった本が、本年2月16日号の『週刊朝日』のトップ記事「日本の国民文学の誕生」に取り上げられると、戦時下で人間性を失わずに生きた男の姿に対する共感を呼び、2年半で約240万部を売り上げる本になった。通巻2,000万部を超える超ベストセラーになった。「もはや戦後ではない」といわれても、人々の心には戦争の体験が深く残っていたのである。第2位が井上靖の『氷壁』。第3位が西堀栄三郎の『南極越冬記』。第4位が阿部能成他監修の『少年少女世界文学全集』(9月、全50冊が講談社より、1962(昭和37)年まで順次刊行。創元社の『世界少年少女文学全集』(1953(昭和28)年4月)に次ぐ戦後の代表的な全集である)。第5位が石坂洋次郎の『陽のあたる坂道』。第6位が佐藤弘人の『はだか人生』。第7位が坂本藤良の『経営学入門』。なべ底不況のなか、アメリカの経営技術を具体的に紹介した本(中山伊知郎『新しい経営者・新しい労働者』、山田雄一『繁栄の技術』、畠山芳雄『会社はなぜつぶれるのか』など)のブームを呼んだ。第8位が五味川純平の『自由との契約』。第9位が伊藤整の『氾濫』。第10位が野上丹治・洋子・房雄の『つづり方兄弟』。石川達三の『人間の壁』が、日教組と民主教育のあり方に問題提供して、多くの人の共感を呼んだ。

第39回芥川賞は大江健三郎の『飼育』、第40回芥川賞は該当無し。第39回直木賞は山崎豊子の『花のれん』と榛葉英治の『赤い雪』、第40回直木賞は城山三郎の『総会屋錦城』と多岐川恭の『落ちる』である。

推理小説のブーム。松本清張の『点と線』と『目の壁』と『黒地の絵』、有馬頼義の『四万人の目撃者』、高木彬光の『成吉思汗の秘密』などが好評。

この年創刊の雑誌。『週刊明星』(集英社)。『週刊女性自身』(光文社)。『家庭画報』(世界文化社)。『週刊大衆』(双葉社)。『週刊実話』(実話出版)。『週刊ベースボール』(ベースボールマガジン社)。新聞の『THE YOMIURI』現在の『THE DAILY YOMIURI』(読売新聞社)。創復刊誌78誌、休廃刊誌58誌。

『週刊明星』が問題をおこした。7月24日に、日本新聞協会加盟の新聞、通信、放送各社は、皇太子妃選考につき正式発表(11月27日)まで、自発的に報道管制をすることを決定したにも

かかわらず、『週刊明星』11月23日号で「正田美智子内定」を報道してしまったのである。

(9) まとめ

この年は「政治の時代」のはじまりの年である。4月から「グラマン疑惑」が社会を揺るがし、「勤務評定問題」が全国化し、日教組が反対闘争へ入る。11月から「警職法改悪反対闘争」で、総評、全労、中立系労働組合、文化人、学生、婦人らが統一闘争を組み、反対運動を展開する。それらが、1960（昭和35）年の安保闘争と三池闘争へとせり上がっていくことになる。民主主義的価値観もこの年を境に変わる。統計数理研究所の調査では、「政治家にまかせるか」に賛成が45%、反対が46%とほぼ同数であるが、本年以後反対が増加していく。1988（昭和63）年には反対61%、賛成30%にまで開いていく（田中愛治、戦後50年における政治意識の変容、現代のエスプリ、341号、生活意識の変容、181頁）。しかし経済は秋ごろから改善してくる。岩戸景気が始まろうとしている。JETROも設立された。インドネシア、インド、中国と協定を結び、アメリカ以外でも貿易を拡大していく。「スバル360」という、庶民でも無理すれば手に入る軽四輪車が登場する。マイカー時代の幕開けを予感させる車である。二輪車業界は好調である。モペットブームをおこし、いち早くマイカー時代に入っている。カミナリ族が、それらの二輪車を暴走させる。カメラ、トランジスタラジオ、二輪車の輸出が伸びている。鉄鋼も伸びているが、規制が始まろうとしている。雇用も安定している。消費面では、スーパーマーケットが急増し、安売り時代の幕が開けようとしている。月賦で購入することが受け入れられていく。今までの買い物の美意識を逆転するようになった。このように、経済は好調で、人々の消費意識も合理的に、拡大している。技術革新と合理化により新製品は続々つくられ、性能が高まったのに安くなり、消費革命は進む。ものの豊かさは拡大している。

アジア大会が開かれる。日本海溝に潜ったり、ヒマラヤに初登頂した。世界一の東京タワーを完成させた。日本人は活躍している。しかし社会問題は山積みである。団塊世代が、学校に押し寄せ、すし詰め状態。越境入学の問題もおこす。劇場型犯罪のはじまり、肉親殺害が多発する。老人が立ち上がり、老人福祉を訴える。売春が法律で禁止されたが、隠れて生き残る。東京でも廃水の公害問題がおきる。戦犯を収容していた巣鴨プリズンが閉鎖されたが、戦災孤児は救われていない。問題は深刻になっている。社会的な豊かさはまだまだである。

米は今年も豊作である。サンマも豊漁である。ジュースのブームも続いている。初めてインスタントラーメンがつくられ、爆発的売上げ。新製品が次々とつくられ、忙しい人々、新らし好きの人々に受け入れられていく。食の簡易化が進む。ビールの売上げも伸びている。西洋野菜も食べられるようになり、ドレッシングも売れている。食の洋風化は進んでいる。健康食品コンフリーのブームがおきる。フィルター付きたばこも吸われている。健康にも気をつけている。しかし

『栄養白書』で、4人に1人が栄養不足であると指摘される。肉は、欧米の5分の1しか食べていない。成人病も増えている。栄養十分な、健康で、豊かな食事はまだである。

団地族が100万人を超した。1DKという小家族向け団地もできる。軽井沢で別荘開発が始まる。しかし内閣総理大臣官房広報部室の世論調査でも不満は多い。1955（昭和30）年では食料39%、衣服31%、住宅15%の不満が、1958（昭和33）年では食料17%、衣服22%、住宅29%の不満という数値になっている。建設省の調べでは、住宅不足戸数はなお337万戸にのぼっている。上下水道、建坪、公園、保育所などの生活環境も整っていない。食料やファッションでは少し豊かさが進み、不満も解消されてきたが、住宅生活はほとんど豊かさが進まず、不満が集中した。住宅生活の不満が、衣服、家電などの耐久消費財の購入に向けられているのである（昭和40年度国民生活白書、53頁）。生活の根本の豊かさはない。

ファッションにかんして、清楚なミッチースタイルに憧れ、まねた。男性はマンボズボンで、女性は踵の細くなったハイヒールで、足を長く、細くみせようと頑張った。サック・ドレスは画期的であった。既製服なのに、ベルトやアクセサリで、変化と独自性をもたせられた。既製服がそのまま10代に受け入れられ、デパートがティーンズコーナーを設けるようになったのである。若者のファッション界では、洋裁時代から既製服時代に早くも入ったのである。ピンク系口紅も売り出された。大人が躊躇する、カラー下着も多様化している。カミナリ族のファッションもきまっている。若者がファッションの中心となり、豊かな消費生活をエンジョイしている。左翼のうたごえ喫茶に行く時は地味なワンピース、ノンポリ文化の象徴であるジャズ喫茶に行く時は太陽族スタイルと、まだスタイルの分断はなかった。しかし全体の被服消費の対前年伸び率額は、7%減少する。2年連続の減少である。たのしく選んで、豊かに消費する時代に入ろうとしている。

若者が、ロカビリーにうつつを抜かし、太陽族、暴走族だと遊び回っている。子供たちの間にも様々なブームがおきる。外では、オネストジョンごっこや月光仮面ごっこで遊び回り、フラフラのまわす回数を競う。家では、野球盤やプラモデルで遊び、親が無理して揃えてくれている『少年少女世界文学全集』を時に読む。大人も楽しんでいる。相撲は、栃若時代を迎えた。長嶋茂雄というスーパースターが活躍しだした。王貞治も入団した。人気の2大スポーツは堅調である。大相撲の柵席の料金は1人1日1,000円。後樂園球場の入場料金は、指定300円、内野180円、外野130円。スキー、スケート、ゴルフというブームが、高所得層を中心におきている（兵庫県三木市の広野ゴルフ倶楽部でのビジター（非会員）のグリーン・フィーの土・日・祭日の料金が3,500円、平日3,000円では、庶民が手の届かない料金である）。8ミリ映写機で家族の姿を記録する。高齢者は、初めての盆栽展を見に行く。経済交流の進展とともに文化交流が、ソ連と中国で盛んである。文化・レジャーは豊かさを増している。

都会の哀愁をうたう歌がヒットしている。個人名を喪失した都会で、「おーい○△くん」と実名で呼ばれたい願望が、ヒット曲『おーい中村くん』を生み出した。各人がバラバラで結びつきが希薄な都会だからこそ、関係のできた相手を気遣い、想い、2人だけを包むムードを守っていかうとするムード歌謡もヒットした。都市化のなかで、人々の心の豊かさは歌謡曲のなかだけで実現する。

テレビ映画は、充実してきた。名作『私は貝になりたい』は、戦犯という重いテーマを描いているにもかかわらず、人々に感動をもたらした。『事件記者』も、毎回人情豊かに事件が解決するさすがしさで、2ヶ月の予定が放送延期になった。『バス通り裏』は、なくなりつつある、下町の人情を描いて人気であった。アメリカのホームドラマも次々と放映され、アメリカ的生活への憧れを高め、生活をアメリカ化していった。テレビでは、廃れゆく日本的な心の豊かさ、進行していくアメリカ的な物の豊かさという矛盾する豊かさがあらわされていた。映画の入場者数はこの年がピークであった。テレビにおされていく。映画入場料は、1957（昭和32）年150円、1960（昭和35）年200円、1966（昭和41）年500円と急増していく。

本の『人間の条件』は、戦時下の、悲惨な生き方を強要された男が、人間味を失わずに生きる姿に感動を生み、ベストセラー第1位。テレビ映画『私は貝になりたい』も多くの人々に感動を生み出した。終戦の影は人々の心に濃く残っている。日本人を沸かせた南極観測隊の隊長・西堀栄三郎が書いた『南極越冬期』は、もう一度日本人を沸かした。社会問題化した日教組と民主教育の問題を扱った『人間の壁』も売れた。人々の心に訴え、心を豊かにしてくれる本が売れている。

6. 1959（昭和34）年

(1) 政治・経済

前年の秋に「なべ底景気」を脱してから、「岩戸景気」と呼ばれ、急速な拡大を続けることとなる。その原因は4つあげることができる。①重化学工業の投資増大による産業構造の高度化と生産設備能力の増加、「投資が投資を呼ぶ」産業連関の緊密化、加工過程の多層化などを特徴とする近代化投資の盛行、それに対応する労働力の豊富な供給、②所得水準の向上と耐久消費財価格の下落によるテレビや冷蔵庫、洗濯機などの旺盛な耐久消費財の需要、③コスト引下げ、技術向上、市場開発努力による輸出競争力の強化、④産業競争力が、原料節約技術の向上や原料の転換、加工度の向上、輸送手段の改善などによる原料費の節約、生産性の向上と賃金コストの低下で強まったこと、である。

経済指数は次のとおり。経済成長率実質10.4%。名目14.2%。年末現在日銀券発行残高1兆294億円。本年度輸出36億1,200万ドル（戦前水準を回復）、輸入39億4,000万ドル、本年度国

際収支・実質 3 億 2,880 万ドルの黒字。対米収支が 1 億 1,300 万ドルの黒字（トランジスタラジオ、鉄鋼や繊維品、軽機械、雑貨などの消費財の輸出が好調）。財政投融资実績 5,621 億円。民間最終消費支出実質 8.2%，名目 12.0%。民間企業設備投資名目 21.5%。輸出・名目 16.7%。消費者物価 1.0%。本年 6 月から 1962（昭和 37）年 10 月まで岩戸景気。二輪車生産額が、スクーターを除いて世界第 2 位の 75 万 5,589 台。花形輸出商品はカメラ、トランジスタラジオ、二輪車の順である。四輪車新規登録数 24 万 726 台。四輪車生産台数 26 万 2,814 台。前年比 39.6%増。三輪車生産台数 15 万 8,042 台。

1 月 14 日、いすゞ自動車が、初の国産外車のバン「ヒルマンエキスプレス」（500 kg 積み）を発売した。81 万 7,000 円。1 月、富士精密（現在の日産自動車）が、国産初の 3 ナンバー車セダン「プリンスグロリア」を発売した。147 万円。1 月、ヤンマーディーゼルが世界最小の農業用空冷ディーゼル・エンジンを開発した。耕耘機の小型・軽量化が進み、年寄りと女性でも使えるようになる。三ちゃん農業を可能にした。1 月 19 日、三井鉱山は、三鉱連に 6,000 人の希望退職企業整備案を提示する（3 月に三池中心に連続スト、4 月 6 日妥結。2 月以降、明治、三菱、住友、古河、杵島、日鉄等でも合理化で争議がおきる）。

2 月 8 日、関西電力の黒部トンネル（10.193 km）が貫通した。先に開通の大町トンネルと直結した。2 月 16 日、百円銀貨と五十円ニッケル貨、十円黄銅貨の新硬貨が発行された（9 月には新 5 円黄銅貨も発行）。2 月 17 日、政府は、ニューヨークでアメリカのファーストポストン社らと外債 3,000 万ドルの発行契約を結ぶ。戦後初の、中・長期債各 1,500 万ドルである。世銀に電力用ダム建設資金 4,000 万ドルの申込みをしたところ、世銀は 1,000 万ドルを融資し、残りを日本政府の外債で調達することを要請したのである。2 月 19 日、日銀は、公定歩合を 1 厘下げ、1 銭 9 厘とする。2 月 20 日、第 2 次道路整備 5 ヶ年計画が閣議決定された。事業規模 1 兆円が、一般道路とともに有料道路にも当てられる。経済成長の出発点である道路網の整備がなされ、モータリゼーションの波を生み出していく。2 月 26 日、住宅公団が、神奈川県相模原市で首都圏初の工業団地を分譲した。

3 月 15 日、東京の地下鉄・丸ノ内線が、池袋―新宿間で開通。3 月、三菱油化が、四日市工場第 1 期工事を完成させた。以後各地に石油化学コンビナートの拡大が始まる。3 月 26 日、簡易生命保険法が改正され、家族保険が創設された。3 月 30 日、東京地方裁判所で伊達秋雄裁判長が、アメリカ軍駐留は違憲であるから、刑事特別法は無効で、砂川事件は無罪との判決を下した（4 月 3 日、検察側は最高裁判所に跳躍上告した。12 月 16 日に最高裁判所は、砂川事件につき、駐留アメリカ軍は憲法第 9 条にいう戦力でないとして、原判決を破棄し、差し戻した）。3 月、本年の大学卒業生の就職率が戦後最高を記録。3 月、中田機化工業は、証券用ボールペンを発売した。翌年の秋銀行に広まり、以後、一般にも普及していく。3 月、日本光学工業（現在のニコ

ン)が、35 mm 1 眼レフカメラ「ニコン F」を発表した。6 万 7,000 円である。

4 月 1 日、全日空が東京―大阪間の直行便を開設し、国内幹線に進出する。4 月 13 日、東海道新幹線の建設が認可された(4 月 20 日着工)。4 月 14 日、首都高速道路公団法が公布された(6 月に同公団が発足し、オリンピックのために東京の羽田―代々木間の首都高速道路工事を開始する)。4 月 15 日、最低賃金法が公布された。業者間協定などにより、業種別最低賃金を決めた(8 月 12 日、最低賃金法にもとづく初の最低賃金が、静岡の缶詰製造業者で実施)。4 月 16 日、国民年金法が公布さる(11 月 1 日に施行)。4 月、郡是製糸(現在のゲンゼ)は、兵庫の梁瀬工場で現場従業員として初めて高卒女子 20 人を採用した。求人難で、中卒は金の卵といわれていた。中学新卒者の最低賃金は、8 時間労働で 2,500 円。4 月 20 日、鉄鋼連盟輸出懇談会は、アメリカの財務省による、日本のダンピングの疑いに関して、対策を協議した。鉄鋼業界の技術革新・合理化が、輸出国アメリカにとり、信じられないほど急激に進んでいるのである。4 月 24 日、大蔵省は、貿易為替手続きの簡素化措置を発表する(それを受け 11 月 11 日、通産省は対ドル地域輸入制限 180 品目の自由化に踏み切る。貿易自由化の開始である。本年、輸入量が戦前水準に達する)。4 月、吉野善三郎は、1 眼レフの中判カメラ「ゼンザプロニカ」を開発した。後にプロニカカメラを創設した。

5 月 4 日、トヨタ自動車は、APA 特需 5,312 台とその補給部品を受給した。6 月に追加の 4,052 台を受注。5 月、通産省が、「昭和 34 年度電力需給計画」で戦後初めて「供給余力あり」と発表した。今までは、電力不足が経済成長の隘路の 1 つであった。仕事も労働者も揃った。無理して機械も導入した。しかし電力がこないで、機械が動かず、倒産したという企業が続出していた。6 月 7 日、日本通運が 300 t トレーラーを導入した。道路網も整備され、陸運が主力になってきている。

7 月 3 日、大阪空港が国際空港となる。8 月 1 日、日産自動車が、小型乗用車「ブルーバード」を発売した。1,000 cc で 64 万円、1,200 cc デラックスで 76 万 9,000 円、同スタンダードで 69 万 5,000 円。垢抜けしたスタイルと国内敵なしの高性能で勝負した。マイカー時代の幕開けである。

9 月 1 日、八幡製鉄は、戸畑工場 1,500 t 高炉の稼働を始める。日本最大の高炉である。9 月 5 日、政府は、インドネシアと北スマトラ油田開発の覚書に調印した。9 月 5 日、日銀は、売りオペレーション金利 1 厘引き上げを実施した。9 月 10 日、福岡で炭鉱失業者のために黒い羽募金運動が始まる。9 月 18 日、トヨタ自動車の元町工場が完成した。業界初の自動車専門工場で、月産能力 5,000 台である。この年は、自動車産業にとっての「量産元年」である。プリンス自動車は本年に村山工場、日産は 1962(昭和 37)年に追浜工場を建て、量産体制に入る。9 月 21 日、新三菱重工(現在の三菱自動車)が「三菱 500」を発表し、乗用車メーカーに参入した。

10 月 1 日、東証株式出来高 1 億 5,600 万株で、開所以来の大商い。10 月、オリンパスが、ハー

フサイズのコンパクトカメラ「オリンパス・ペン」を発売した。6,800円である。11月6日、国防会議は、次期主力戦闘機に「ロッキード改装型」を採用することを決定した。11月25日、社会党河上派の12議員が、離党した。11月26日に民社クラブを結成した。11月、国鉄は、東京・汐留―大阪・梅田間にコンテナ専用特急「たから号」を運転した。コンテナ輸送のはじまりである。11月、東京都内を走る国鉄中央線の車両がオレンジ色で新登場した。通勤電車のカラー化が始まる(1961(昭和36)年9月に山手線が黄色になるが、1969(昭和44)年4月にはうぐいす色に変わる)。

12月2日、日銀は、公定歩合を1厘引き上げ、2銭とする。12月3日、個人タクシーが東京でスタートした。マナーがよい、安全運転、運転手が紳士である、車がきれいなどの評判が良く、人気が高まった。翌年7月15日、京阪神で個人タクシー第1次認可182人が発表される。白タクは摘発強化さる。12月11日、三池争議始まる。8月29日、三井鉱山は、三鉱連に4,580人の希望退職第2次企業整備案を提示したが、10月13日より、三鉱連は反復ストに入る。総評と炭労は強力にそれを支援する。しかし12月11日、会社は業界初の指名解雇を強引に始め、本格的な三池争議となったのである。このストの時によく歌われたのが、『炭鉱節』である。「月」が、劣悪な社会状況や労働条件をありのままにお見通しであると、意識されながら歌われていたであろう(なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、59頁)。12月30日、政府は、財投融資計画の財源調達のため、政府保証による外貨債発行を決定。開発銀行債1,000万ドル、電電公社債2,000万ドル。12月、トヨタ自動車の月間国内登録台数が1万台を超えた。

この年、東京都墨田区のポンコツ屋が大繁昌した。「ルノー4CV1954年型」4万5,000円、「ルノー4CV1952年型」2万円であった。全国の会社数が50万3,034社に達した。中学新卒者の最低賃金は、8時間労働で2,500円。これまで4%前後の引き上げに留まっていた大企業の中卒初任給は本年、10%余も引き上げられた。小企業も競争上15%もの賃上げを強いられた。1961(昭和36)年には24%もの上昇を示す。全体の求人倍率は、本年度までは1倍を少し超える程度であるが、岩戸景気が本格化する翌年から急上昇して1964(昭和39)年には4倍を超えてしまう。求人難により、全体の賃金が上昇し、さらに大企業と、中・小企業の賃金格差、年齢別格差、学歴格差、労・事務間格差も縮小していった(昭和経済史、416頁。昭和40年度国民生活白書、114頁)。

総理府の全都市勤労世帯の家計調査報告で、エンゲル係数が戦後初めて40%を割り、39.8%になった。この年のメガヒット商品は、「バンドエイト」である。発売1年間で500万個が売れた。東京芝浦電気(現在の東芝)が国産初のカラーテレビ「17WF型」(29万円)を発表した。当時のカラー放送は1日1時間程度で、本格的普及は1970(昭和45)年の大阪万博あたりである。ワイヤレスのテレビリモコン装置(2万円)、自動オープン、扉の内側にビールや卵入れの付いた冷蔵庫、遠心脱水機、過熱防止用アイロン、わが国初の乾電池式電気カミソリ、電気着火式自

動ガス湯沸かし器、自動温度調整器付き電気ポット、ロースター、セパレート型エアコンなども売り出された。電気洗濯機の年産が100万台を突破した。テレビの普及率が急激に高まる。テレビは前年比20%増、ラジオは3%減である。自動車保有台数が200万台を超え、「自動車教習所ブーム」がおき、運転免許人口500万人となる。翌年は1,200万人。交通事故による死者が1万人を超え、社会問題になる。流通革命論が盛んになり、スーパー店が各地に続出する。テレビ広告費が238億円となり、ラジオ広告費162億円を抜く。総広告費の対GNP比が1%を上まわる1,456億円。テレビの影響力が増してくる。日本ペプシコーラ、京都セラミック、伊豆急行などが創立された。

(2) 社 会

1月14日、第3次南極観測隊は、1年間昭和基地に放置されていたカラフト犬のタローとジローの生存を確認した。2月、児童福祉法が改正され、15歳未満児童の深夜喫茶への立ち入りが禁止された。2月15日、主婦と生活社労組は、書記長配転で無期限ストに入る。2月21日、大宅壮一ら150人が、執筆拒否を声明。12月29日に解決する。3月11日、文部省はテレビの普及による子供への影響調査を初めて実施した。その結果、小学校高学年と中学生では、5人に1人が1日5時間以上もテレビを見る「テレビっ子」と判明した。3月24日、文部省は、盲・聾・養護学校高等学部生徒の通学や帰省にかかる交通費の都道府県負担を定める。3月28日、東京都千代田区の「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」の完工式がおこなわれた。旧戦地から収集の無名戦士の遺骨を安置した。3月、大阪市は、1区に1保健所を完備。4月10日、皇太子明仁・正田美智子の結婚式がおこなわれた。テレビ各社が総力で中継した。結婚式のパレードは、10時間35分にわたり実況放送された。そして結婚式を見るために、白黒テレビが普及した。テレビ受信契約が結婚式1週間前に急増した。14型テーブルタイプも発売された。7万円である。年収分の値段である。テレビ中継の視聴者は推定1,500万人に達した。テレビの前に正座して、家族や近所の人とともに、肩を並べながら見た。1956年「もはや戦後ではない」と宣言し、貧乏から抜け出し、その安穩の成果を祝福するのが御成婚であった。そして天皇家も、「戦後民主主義=恋愛」を、テニスや電話で演出し、「平民から選ばれた嫁」を迎え、パレードを中継させることで、新生・天皇家をアピールし、国民との接点をつくりだしたのである(家族データブック 年表と図表で読む戦後家族 1945~96、久武綾子・戒能民江・若尾典子・吉田あけみ、55頁)。4月、東京の丸の内オフィス街で高卒女子の臨時採用が急増した。神田の女子職安で扱っただけでも求人が400人あった。皇太子の結婚にあおられたOLが、結婚のアテもないのに次々と退職していったからである。

5月5日、東京の上野署が前年度の『家出人白書』を発表した。総数8,500人で、1954(昭和29)年の4倍増である。14~18歳の少年が6割で、学生も1,300人いた。5月26日、IOC総会

で、1964（昭和39）年東京オリンピック開催が決定した。6月15日、厚生省は、急性灰白髄炎（小児マヒ）を指定伝染病に指定。この頃八戸などで集団発生する（9月3日、ソ連製ワクチンが到着する。冷戦下、父母の熱意が政府を動かし、ソ連から緊急輸入されたのである。遅れて9月に小児マヒ予防薬「ソークワクチン」の国内量産が始まる）。6月30日、沖縄の宮森小学校に、アメリカ軍ジェット機が墜落し、死者21人、負傷者100人をだした。沖縄の人々の苦しみは続く。7月3日、厚生省は、戦後最高の赤痢発生にたいし、強制発動を含む防疫対策を全国に指示した。7月24日、児島明子が、ミス・ユニバース世界1位に選ばれる。8月13日、時速50～60kmの駿足台風・台風7号が、静岡、山梨、長野に風水害をもたらした。死者・行方不明235人。9月26日、伊勢湾台風・15号が名古屋市の住宅密集0メートル地帯を襲った。死者・行方不明者5,041人（そのうち児童生徒の死亡約1,000人。明治以降最大）、被害家屋57万戸。本年度の自然災害による被害額は飛び抜けて巨額である。506億9,020万円で、前年度の2倍以上である（昭和40年度国民生活白書、5頁）。

10月7日、1955（昭和30）年から動物実験で、神通川流域のイタイイタイ病の原因を究明していた荻野昇医師が、「原因は富山の神岡鉱山の鉱毒」であると発表した。イタイイタイ病告発のきっかけとなる。10月21日、通産省は、新日本窒素にたいして水俣川への廃水中止、浄化装置完備を指示する。しかし実行されなかった（11月12日には厚生省が「水俣病は有機水銀の中毒」と結論づける）。10月31日、文部省は、初の教育白書『わが国の教育水準』を発表し、そのなかで「教育普及度は世界最高水準だが、質はまだ不十分」と総括した。前年度の長期欠席児童は、5年前の34万人の半数に減少している。貧乏などで、学校に行けない児童がまだ17万人いる。11月1日、国民年金制度が発足した。11月19日、東京都内に学童交通整理員「緑のおばさん」が登場した。都労働局が、母子世帯や未亡人の失業対策事業として始めたものである。日当は350円。12月2日、京浜地方に集中豪雨。江東地区で164戸の床上浸水、都内で1万戸が停電、東横線菊名駅が水浸しとなる。12月14日、北朝鮮へ在日朝鮮人975人を乗せ、帰国第1船（ソ連船）が新潟を出航した。12月18日、東京都は、通勤ラッシュ緩和のため、都内の学校に8時はじまりを要請した。交通機関の設備投資は進み、輸送力は強化されているが、それ以上に都市化が進んでいる。経済が復興しだした昭和25年頃から都市化が始まり、昭和30年代に入ると大都市の周辺部への拡散がおき、都市化の進行は急増した。1955（昭和30）～1960（昭和35）年の市部人口は9.4%増、郡部人口2.7%減である。昭和34年の転入人口と転出人口をみると、東京区部57万人が転入・38万2千人が転出、横浜9万人が転入・5万2千人が転出、名古屋では8万3千人が転入・5万人が転出、大阪では21万2千人が転入・14万4千人が転出する（昭和40年度生活白書、67頁）。国鉄の設備投資は、1957（昭和32）年の総額5,986億円の第1次5ヵ年計画で増加し、1961（昭和36）年の総額1兆3,491億円の第2次5ヵ年計画から本格的

に急増していく。私鉄も1957(昭和32)年度から総額727億円の大手私鉄輸送力増強5ヵ年計画, 1961(昭和36)年から総額1,270億円の大手私鉄第1次輸送力強化3ヵ年計画, さらに1964(昭和39)年から総額2,248億円の大手私鉄第2次輸送力増強3ヵ年計画が実施され, 輸送力が強化された(昭和40年度国民生活白書, 14頁, 66~69頁)。

この年, 年間交通事故死者1万79人で, 1万人を突破した。東京で, 区画整理による児童公園の新設が盛んにおこなわれた。岡山県の児島湾が瀬戸内海から遮断され, 淡水化され, わが国初の人造湖となる。1988(昭和63)年に有数の汚れた湖として社会問題になる。全国の大都市を中心に, 地下街, 名店街ができる。改定指導要領による検定で, 82%もの不合格教科書がでる。なかでも社会科の検定強化が問題となる。有料老人ホームは, 全国で22ヵ所。特別養護老人ホーム(特養ホーム)ができるのは, 1963(昭和38)年からである。

(3) 食 料

2月6日, 農林省が甘味資源の自給力強化に乗り出す。以後テンサイ糖ブームがおきる。3月, 愛知トマト(現在のカゴメ)は, トマトペーストを発売した。この年にトマトジュース缶が登場する。4月, ライオン油脂(現在のライオン)が「液体ライボンF」を発売する。6月には日本油脂が「ニッサンセブンK」を発売する。台所洗剤ブームがおこる。5月, 東京の米屋が食料品をセットにして家庭への持ち込み販売を開始した。6月5日, 秋田の八郎潟干拓地で初めての田植えがおこなわれた。6月, 東京のオフィス街におむすびが大流行した。タクアンとカツオブシ入り2個50円の「おむすび定食」の他に, 梅干し, タラコ, サケなど14種, それぞれ30円であった。当時の銀座でのサンマ定食やおでん定食, 牛丼が各150円であった。7月14日, 閣議で, 生産者米価150kg(1石)1万333円, 消費者米価は翌年10月まで据え置きと決定した。7月11日, 米審議会は生産費・所得補償方式がまだ不徹底と答申している。8月, 栄養審議会が日本人の食料について厚生大臣に答申し, 強化食品の必要を強調した。8月, サッポロビールが缶入りビール(350ml)を発売した。10月, 主婦層を中心にお汁粉が第2次のブームになる。即席しるこも発売になった。東京における, 御前しるこの値段は, 1955(昭和30)年100円, 1960(昭和35)年200円, 1965(昭和40)年220円であった。12月, エース食品(現在のエースコック)が即席ラーメン「エースコック」を発売する。

この年, 米の作付け面積328万8,000ha, 本年度産米1,250万1,000t。過去最高である。以後1970(昭和45)年まで1,200~1,400万tを維持する。10a当たり収量は391kg。サケの稚魚の放流が始まる。この年6,382万尾を放流し, 55万5,144尾が回帰した。総理府の全都市勤労世帯の家計調査報告で, エンゲル係数が戦後初めて40%を割り, 39.8%となった。素材缶詰の元祖である「はごろもシーチキン」が発売された。また国産第1号の缶詰ベビーフード「レバーペース

ト」も発売される。食の簡易化も進む。バイオ野菜第1号「ハ克蘭」が登場した。白菜とキャベツを掛け合わせた新野菜である。山梨県農業試験場が種なしブドウを開発した。玉割れを防ごうとして、成長促進ホルモンを使ってみたところ、偶然に、種のないものができた。偶然の産物は画期的技術革新として注目され、巨峰やピオーネなどの高級ブドウにも応用されるようになった。ナベで煮るスープ別の棒状めん「マルタイラーメン」が九州に登場した。

(4) 住 宅

1月1日、メートル法が実施される。尺貫法やヤードポンド法は廃止される。ただし坪表示は1966（昭和41）年3月まで認められる。1月15日、東京都が、水洗便所への改造促進運動を開始した。オリンピック開催に向けての都市改造の始まりである。3月、大丸が京阪神の3店で、家具・装飾担当部を統合して、家具装飾部を新設した。家具や装飾品が売れている。4月30日、東京都保谷市に住宅公団「ひばりヶ丘団地」が完成した。2,714戸で、関東最大である。4月、住宅普及協会は、公庫融資による宅地分譲を始める。4月、建設省は、小家族向き公営住宅を今年度以降廃止すると決定した。5月4日、収入超過者の公営住宅入居者にたいし、明渡し努力を義務付けるなど、公営住宅法の一部が改正された。本年、東京の都営住宅の空き家申込み者が急増し、毎月300倍の競争率であったからである。6月、東京都日野市の多磨平団地に、わが国初の大型パネル工法によるテラスハウスが完成した。7月23日、京都の川島織物は、室内装飾織物展示会でプリントカーテンを初めて発表した。この時は片面プリント。両面プリントになるのは1961（昭和36）年。7月、『建設白書』で「住宅はまだ戦後である」と発表された。翌年になってやっと戦前水準に達した。しかし住宅不足は続く。7月、永大産業が、わが国初のプリント合板を発売する。9月、東急不動産が、初の公園付き分譲である東京・金町分譲地の第2次販売を開始した。10月、大和ハウスが、プレハブ住宅の第1号「ミゼットハウス」を発売した。「3時間で建つ、お子様に勉強部屋を、お年寄りに隠居部屋を」がキャッチフレーズ。住宅のレディメードとして、風呂場、ホームバー、車庫、音楽室、子供の勉強部屋、お年寄りの隠居部屋、別荘などの用途を考えていた。3坪タイプ11万8,000円、2.25坪タイプ10万8,000円。以後、プレハブ住宅が建てられていく。1973（昭和48）年には全住宅の70%、22万4,000戸をプレハブ住宅で占めるようになる。

(5) ファッション

1月27日に正田美智子（現在の皇后）さんが皇居へ初参内した時の、ヘアバンド、ミンクのストール、純白のドレスに白の長手袋という装いが「ミッチースタイル」と呼ばれ、翌年にかけて大流行する。特に、ヘアバンドや白いコート、ウールのストールが大流行した（さすがにミン

クのスーツではなかった)。また、白いシャツブラウスに紺のカーディガンの「軽井沢ルック」も流行した。女性の憧れる「プリンセススタイル」の一種である。3月、資生堂が男性化粧品「フォアメン」を発売した。3月、アメリカのマックスファクター社が日本に進出し、アメリカからマーケティング的活動理念を導入し、「ローマン・ピンク」の口紅を発売した。まず本年ミスユニバース第1位の児島明子を専属モデルに使い、衝撃を与えた。彼女の栄光をたたえる「アキコ口紅」も発売する。さらに、アメリカ流に洗練された「銅像さえもよみがえる……ローマン・ピンク」のポスターを使った。高島屋、東洋レーヨン、旭化成、内外織物などと共同で、キャンペーンを実施した。化粧品界初のメイクアップ・キャンペーンもおこなう。売上げを伸ばしていく。1957(昭和32)年日本マーケティング協会が設立されて以来、最初の本格的マーケティング戦略が実行されたのである。以後、化粧品業界が日本のマーケティングをリードしていく(水尾順一、化粧品のブランド史、116頁)。4月、日本流行色協会が皇太子の結婚を記念して、赤、青など20色の慶祝カラーを発表した。9月、YKKが、ナイロンファスナーを発売する。おしゃれの幅が増す。9月、高島屋が第1回テーマカラー「ベージュ」を決定した。ポスターやディスプレイに盛んにベージュを使い話題を呼んだ(本年の流行色は、チョコレート・グレー)。この頃からデパートが独自の流行色を発表した。1970(昭和45)年には三越が地中海の色「メディタリニアンブルー」、伊勢丹も「イタリアングリーン」をキャンペーンに使用する。色彩戦争といわれるように、色をPRする時代になった。そのはしりである。秋、防寒ハップサンダルが登場した。秋、大丸が高級既成紳士服「トロージャン」を発表した。既製服は「ぶら下がり」の粗悪品扱いされていたが、縫製技術の高度化と化繊繊維の高品質化が進み、既製服が多様化し、注文服に劣らないものもできてきたのである。流行を追い求める若年層を中心に、経済面からもスピード性からも受け入れられ、既製服時代が到来しようとしている。反対に、洋裁学校と家庭用ミシンが衰退していく(中山千代、日本婦人洋装史、470頁。昭和40年度経済白書、47頁)。11月、スキーの3冠王トニー・ザイラーが来日し、ザイラー・ファッションが流行する。スキーブームももたらした。

この年、Vネックセーター、バラなどの花柄が流行した。少女の髪型にレーザー・カットが流行する。カットの後に、ハンド・ドライヤーを使ってセットをおこなう技法も流行する。コンタクトレンズが女性の間で流行する。男性用ピンクシャツがブームになる。

ミスユニバース第1位の児島明子は、日本人の美意識を変えた。1950(昭和25)年のミス日本・山本富士子が和服の似合う古典的日本人美人であったのに、児島明子と1953(昭和28)年ミスユニバース第3位の伊東絹子は、欧米型の、8頭身美人である。明らかに日本人の美の基準が変化したのである。単に顔の美しさだけでなく、身体のプロポーションまでを含んだ動的美しさが求められるようになった。女性が家庭内に閉じこもり、静的・内向的美しさだけを問題とする

のでない。家庭の外での就労の増加、買い物やレジャーなどでの外出機会の増加などが、動的・外向的美しさを求めだした要因である。以後ファッション界は3S（スモール、スウィート、スマイル）が、美人の代名詞となる。理想の体型はトランジスタ・グラマー。まだ「スモール」や「トランジスタ」が付く（『モノと女』の戦後史、47頁）。

(6) 文化・レジャー

2月、日本模型が、自動浮沈式のプラ模型「伊号潜水艦」を発表した。大ヒットになる。6月10日、東京の上野公園に国立西洋美術館がオープンした。「松方コレクション」を主体に収蔵。6月25日、東京の後楽園球場の巨人・阪神戦を天皇陛下が観戦した。初の天覧試合で長島が村山からサヨナラ本塁打を打った。

この年、ゴルフ場ブームにわいた。全国に153ヵ所で、戦前の31ヵ所の5倍になる。茨城県伊奈村では、1村に7ヵ所。オートバイの「カミナリ族」が、第2京浜や甲州街道などに出没した。リアシートにしがみついた女性を「イナズマ族」と呼んだ。男女合同ハイキングがブームになる。ビニール製の人形の毛髪が、人毛や馬毛から漁網用のナイロン糸（植毛用サラン）に変わる。洗濯できる人形として評判になる。アサヒ玩具のミニカーが流行する。レジャー関係費（教養娯楽、交通通信費、交際費およびその他雑費の合計）が消費支出全体の20%を超えた。1961（昭和36）年まで横ばいであるが、1961（昭和37）年から急増する（昭和40年度生活白書、121頁）。

(7) 音楽、テレビ、ラジオ・映画

12月15日、第1回レコード大賞に、水原弘の『黒い花びら』が受賞した。前年にひきつづき好調なフランク永井『夜霧に消えたチャコ』（作曲・渡久地政信）も健闘した。歌唱賞と作曲賞を受賞した。女性グループが歌謡界をにぎわしていた。ザ・ピーナッツの『可愛い花』、『心の窓に灯を』、スリーキャッツの『黄色いサクランボ』、こまどり姉妹の『浅草姉妹』である。ペギー葉山の『南国土佐を後にして』。ど演歌の三波春夫の『大利根無情』、『忠太郎月夜』、そして村田英雄の『人生劇場』。以上10曲がベストテンである。

NHKの「BSあなたが選ぶ時代の歌」は次の12曲である。エセル中田『カイマナ・ヒラ』、キングストン・トリオ『トム・ドゥーリー』、ザ・ピーナッツ『情熱の花』、『黄色いサクランボ』、ニール・セダカの『恋の片道切符』、プラターズの『煙が目にしみる』、『南国土佐を後にして』、マヒナスターズの『好きだった』、『黒い花びら』、三橋美智也の『古城』、『人生劇場』、守屋浩の『僕は泣いちゃ』である。

村瀬学氏は、次のように指摘する。『南国土佐を後にして』は、単なる望郷の歌でなく、ふるさとの再確認の歌である。私が帰りたくても帰れない、懐かしいふるさとではない。私とは別に

存在する、豊かな「お国」が歌われている。土佐のお国自慢が方言で歌われ、ふるさとの再確認がされているのである。ふるさと土佐がデーンと存在して、都会に出て働いている自分達を見守っていてくれることを確認させる歌である（なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、45頁）。『古城』は、対象的な歌である。その歌は、ディスカバー・ジャパン、つまり古き良き日本を求め、懐かしむ動きが出てきた時の歌と批評されているが、違うのではないかという。『古城』は、明治時代に作られた『荒城の月』の現代版として作られた。『荒城の月』は、古き象徴としての城は崩れかけているが、永遠の象徴である月の光が輝いていることを歌っている。輝く明るい未来を歌っている。しかし『古城』は、「栄華の夢を胸に追い」求めて、都会で頑張ってきたが、今は石垣もくずれ、苔むし、「病葉の老い」にも苦しみながら、一人たたずむ、暗い現在の私を歌っている。つまり田舎から出てきて、都会生活での華やきを求めたが得られずに、苦しみ、倒れていき、古城であるふるさとをなつかしんでいる個人の姿を歌っているのである（なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、51頁）。三橋美智也が、1957（昭和32）年と1958（昭和33）年の紅白のトリを飾った『リング花咲く故郷へ』と『おさらば東京』も同じように解釈できる曲である。三橋美智也の民謡も、田舎と都会の境界線上にある。本来は泥臭い民謡の節回しが、都市化され、洗練された歌謡曲の節回しと混じり合い、独特の三橋節となっているのである。氏の指摘にもとづいて、両曲を比較してみると分かることがある。都会で「鯨を釣り上げ」ようとして励み、成功し、ゆとりのある生活のなかで、ふるさとを豊かに感じ、ふるさとが見守ってくれている自信をもち、お国自慢まで飛び出すような、元地方人と、都会で失敗し、苦しみの生活のなかで、「空行く雁の声を身にしみて悲し」と感じながら、ふるさとに哀愁をいだくような元地方人の姿の違いである。ペギー葉山は、前者の懐かしむ感情を、ジャズっぽい節回しで民謡を歌う。三橋美智也は、後者の哀愁を、「死ぬほ一どつらい」と民謡っぽい節回しで歌いあげている。

テレビは、1月NHK教育テレビ、2月日本教育テレビ、3月フジテレビと毎日放送テレビ、4月ラジオ中国テレビと東北放送テレビと札幌テレビ、11月沖縄テレビと次々と開局される。21局増えて38局。ネットワークの系列化が進む。1月9日、NHKは、東京、広島、札幌、福岡の4局にラジオ視聴者のサークル「婦人学級」を設置した。「婦人百科」など料理・手芸番組の基礎となる。フジテレビ開局の3月1日から放送された『スター千一夜』（1981（昭和56）年9月25日まで）と12月3日放送のラジオ東京テレビ（現在のTBS）放映の海外取材番組『世界飛び歩き』は、長寿番組になった。「スタ千にでなければスターではない」といわれるほど、人気を呼んだ。『世界飛び歩き』は、のちに『兼高かおる・世界の旅』と改称する。1990（平成2）年9月30日までの31年間に、160ヶ国をたずねる。『文藝春秋』1996年2月号の「読者5500人大アンケート史上テレビ番組ベスト100」の第4位290票である。7月12日、日本テレビが、連

続ドラマ『ママちょっと来て』の放送を開始した。本格的ホームドラマのはしりである。大村昆主演の『番頭はんと丁稚どん』が、大阪らしい人情喜劇で人気。同時間帯の『私の秘密』(NHK)を凌駕するヒット。10月10日、ニッポン放送がラジオの24時間放送を開始する。11月28日、日本教育テレビ(NET、現在のテレビ朝日)でクリント・イーストウッド出演の『ローハイド』が放送開始された。初の1時間シリーズの外国映画である。

映画では、小林正樹監督・仲代達矢主演の『人間の条件』、内田吐夢監督、中村錦之助主演『浪花の恋の物語』、松田定次監督、大川橋蔵主演『新吾十番勝負』、今井正監督、北林谷栄・高橋エミ子主演『キクとイサム』、市川崑監督、船越英二主演『野火』など。第9回ベルリン国際映画祭で黒澤明監督、三船敏郎主演『隠し砦の三悪人』が監督賞と国際評論家連盟賞を、家城巳代治監督、江原真二郎主演『裸の太陽』が青少年向映画賞を受賞。外国映画では、マリリン・モンロー主演の『お熱いのがお好き』、ヘンリー・フォンダ主演の『十二人の怒れる男』、ズビグニェフ・チブルスキー主演『灰とダイヤモンド』などがヒットした。10月5日、東京の芸術座で、三益愛子主演の『がめつい奴』の初演。以後270日のロングラン。「がめつい」が流行語となる。日本映画の観客数は減少したが、まだ映画の人気は絶大である。理想の男性は、石原裕次郎のようなタフガイ、小林旭のようなマイルドガイであった。

(8) 本・雑誌・新聞・漫画

本の第1位は安本末子の『にあんちゃん』である。クチコミでじわじわと知れわたり、NHKラジオの連続ドラマで放送されると一気にベストセラーにおどりだした。学校の推薦本としてもとりあげられた。経済は好転しているが、貧乏のつらさを身にしみて共感できる人々が、60万部を購入した。今村昇平監督により映画化され、それもヒットする。残りのベストテンは次のとおり。読売新聞社から刊行された全12巻の、岡田・豊田・和歌森他編『日本の歴史』である。日本史を唯物史観の立場から解明しようとする独自の方法への関心と、占領軍により禁止されていた日本の歴史を知りたいという欲求が、第1巻26万部という売上げをもたらしたのである。以後、歴史への関心が高まり、歴史物が次々と刊行される。安部能成他監修、講談社刊『少年少女世界文学全集』。井上靖の『波濤』。藤本正雄の『催眠術入門』。清水幾太郎の『論文の書き方』。新潮社編・刊行の『日本文学全集』。吉川英治の『私本太平記』。阿部・桑原・中島他編、河出書房新社刊行の『世界文学全集』。井上靖の『敦煌』。

第41回芥川賞は斯波四郎の『山塔』、第42回芥川賞は該当作無し。第41回直木賞は渡辺喜恵子の『馬淵川』と平岩弓枝の『鑿師』。第42回直木賞は司馬遼太郎の『梟の城』と戸板康二の『団十郎切腹事件』である。

昨年の経営学書ブームから産業書ブームに移る。岩波書店の『現代日本産業講座』、有斐閣の

『日本の産業シリーズ』、東洋経済新報社の『産業シリーズ』、平凡社の『工業大辞典』などが売れる。

4月1日、46紙が新聞購読料値上げ。消費者団体連合会が公正取引所に提訴。この年創刊の雑誌は多かった。3月17日、『週刊少年マガジン』（講談社）、『週刊少年サンデー』（小学館）が、同日に刊行された。少年週刊誌時代の始まりである。前年度をピークに、子供雑誌の発行部数は急激に減少していた。その打開策がこれらの少年週刊誌であった。1960年代後半に入る前は『週刊少年サンデー』のほうが出版部数が多かったが、1960年代後半を過ぎると逆転する（竹内オサム、戦後マンガ50年史、88頁）。4月、『週刊現代』（講談社）、『週刊文春』（文藝春秋社）などが刊行される。本年創刊の主な雑誌。『朝日ジャーナル』（朝日新聞社）。『週刊時事』（時事通信社）。『思想の科学』（中央公論社）。『週刊平凡』（平凡出版社）。音の出る雑誌である『朝日ソノラマ』（朝日ソノプレス、現在の朝日ソノラマ）と『KODAMA』（コダマプレス）。音の出る雑誌がブーム。週刊誌ブームが本格化する。この年に週刊誌が月刊誌の発行部数を抜く。理由は2つ考えられる。①生活単位が1週間でおこなわれるようになったこと、②マス・メディアの発達が多量の情報を流し、そのうちで関心のあるニュースを整理するには1ヶ月では多すぎて整理しれなくなったこと、つまり生活テンポが速くなったのである。高度成長が生活テンポを速め、豊かさの獲得をいそがせたのである（昭和40年度国民生活白書、123頁）。4月に創刊される雑誌が多かったのは、御成婚ブームに日本中が沸いたからである。創復刊誌124誌、休廃刊誌117誌。新聞に別刷りの『日曜版』が登場した。

マンガでは、12月、白土三平の『忍者武芸帳』第1巻（三洋社）が出版された。本格的劇画として注目を浴びる。この年から、子供マンガのテレビ化が盛んになる。

(9) まとめ

東京地方裁判所で、アメリカ軍の駐留は憲法違反であるとの、初めての判決がでる。最高裁で逆転するが、翌年の安保闘争へのはずみになる。次期戦闘機はロッキードにやっときまる。主婦と生活社争議では、文化人の支援のもと318日間戦う。翌年の8月まで続く、激しい三池争議が始まる。1960年代の「闘争の時代」の幕が開かれている。しかし経済は繁栄期を迎える。景気上昇は42ヶ月間に及び、経済全体に浸透していった。それは、神武景気を上まわるという意味での岩戸景気と呼ばれた。「投資が投資を呼ぶ」といわれたように、設備投資の高成長が、景気を牽引した。大規模新炉を導入した鉄鋼業界は、アメリカからダンピングで提訴されるほどの生産効率を誇った。石油化学コンビナートの拡大が始まる。オリンピック開催が決まり、高速道路や新幹線の建設が始まる。水洗便所への改造も進められた。外人に恥ずかしくない日本への大改造が始まる。ブルーバードがマイカー時代の幕を開ける。自動車の新工場が次々に建てられ、新

設備が導入され、量産体制に入った。自動車教習所がブームになる。カメラも6万円代の高級種から6千円代まで売り出されている。家族の成長記録をとるために買い求める。そして輸出の花形ともなる。二輪車も世界第2位の生産台数で、輸出を伸ばしている。カミナリ族も乗りまわし、四輪車より早くもモータリゼーションの波に乗っている。トランジスタラジオも、技術改良され、輸出を伸ばしている。貿易の自由化が始まり、輸入量は戦前水準を抜いたが、貿易は黒字である。電気は余裕がある。求人難で賃金は上昇している。エンゲル係数が40%を割る。御成婚で、テレビが爆発的に売れた。新製品も続々売り出される。テレビ広告が購買意欲を刺激する。高度成長が定着し、所得も増大している。地下街や名店街そしてスーパーマーケットがつくられていく。消費革命も進行し、人々は三種の神器やモペット、マイカーを購入し、豊かな消費生活を楽しんでいる。

社会的には、明るい出来事が続いた。御成婚で人々が喜びに沸いた。9,260万人の国民のうち1,500万人がテレビを見たといわれている。国民が今までに成し遂げてきた安穩の成果を祝福するのが、御成婚であった。経済効果も素晴らしく、景気を押し上げた。南極で生き残ったタローとジローは、感動を与えた。オリンピック開催がきまり、世界に誇る日本の力を示すための、日本再建が始まる。児島明子がミス・ユニバース第1位になり、自信をつける。しかし豊かな社会の明るい面の裏に、暗闇が広がっている。水俣病は拡大している。新たに「イタイイタイ病」が告発された。台風などの自然災害は巨大な被害を及ぼした。都市化が急激に進み、治水など防災対策が追いつかないことも原因である。人災の側面も多い。交通事故死亡者が1万人を突破した。都市部への転入者が急増し、通勤・通学ラッシュは収まらない。児島湾淡水化に、無駄金が使われる。教科書の検定が厳しくなり、国家統制が進む。家出人も増大している。表の面では豊かさは光り輝くが、裏では貧しさ、社会的病理が蔓延していく。

米は今年も豊作である。サケの放流も始まる。食の洋風化は進んでいる。即席ラーメンの種類も増え、素材缶詰、缶詰ベビーフードが売り出され、食の簡易化(手抜き)も進む。エンゲル係数は39.8%。しかし栄養不足で、強化食品が必要になっている。健康で豊かな食生活は難しい。

住宅は不足し、まだ戦前水準にも達していない。次々と建てられる住宅公団は300倍の、高嶺の花である。安く、早く建てられるパネル工法、プレハブ工法、プリント合板などの工夫がなされていく。しかし都市部では、安普請の木造アパートの建設が急増する。都市化に、住宅建設が追いつかないのである。本年、東京での、貸家の全建設戸数に占める割合は51%である(昭和40年度国民生活白書、51頁)。住宅に豊かさはない。住宅と比べれば金のかからないカーテン、家具、什器などで豊かさを演出している。本物の豊かさは、まだまだである。

御成婚を記念した慶祝カラーが話題を呼んだ。色彩戦争も始まる。独自の色を前面に押し出し、ファッションの売上げを競うようになった。ミッチー・スタイルとザイラー・スタイルが流行し

た。男女ともに、既成服の売上げが伸びてきた。化粧品界ではアメリカ流のマーケティング戦略が本格的に展開され始めた。マックスファクターが「ローマン・ピンク」の口紅を販売する時、強力なマーケティング戦略を仕掛け、人々を驚かせた。このようにファッションも多様化し、豊かな美意識を実現していく。だがマーケティングの戦略で、仕掛けられた豊かさを強制される可能性が大きくなっている。化粧品界の広告が不適切であると、たびたび注意・勧告を受けるようになる。また、女性が活動的になったので、女性の美意識が変わった。見島明子のような動的で、外的な美しさが求められだした。それにつれてファッション界も変わってくる。これら被服関連の消費は、2年連続減少した後なので持ち直し、1962（昭和37）年まで増加を続ける。

レジャー関連の支出が、全体の20%を超える。映画、音楽会・美術展、パチンコ、マージャン、テレビ、ラジオ、野球、観光旅行、ピクニックなどがレジャーの中心である。その他に本年は、スキーやゴルフがブームになる。プラモデルやミニカーも人気である。カミナリ族やイナズマ族が暴走し、警察が追いかけている。健全な合同ハイキングもブームになる。だがレジャー活動は、積極的・活動的にはならず、まだ余った時間、ごろ寝の時間、仕事の息抜きの時間という消極的意義しかもっていない。レジャーに豊かさはまだない。

第1回レコード大賞に輝いたのは、ドスのきいた『黒い花びら』であった。女性グループは、かわいらしい歌をヒットさせている。ど演歌も売れている。豊かな故郷を愛おしむ歌も歌われている。歌は心を豊かにしてくれる。

テレビ局が次々と開局し、新番組も多くつくられた。『スター千一夜』で、憧れのスターの姿を、ブラウン管をとおして茶の間でみることができた。雲の上の存在だったスターの、庶民的側面をみられて、嬉しくなった。『兼高かおる・世界の旅』では、自分が海外旅行にいったような、豊かな気分になった。『番頭はんと丁稚どん』で、泣いて笑った。1時間たっぷり、アメリカテレビ映画も楽しめるようになった。テレビの普及率も高まり、視聴時間も増大している。子供マンガのテレビ化も進む。テレビが、家族団らんの中心におかれる。テレビのなかに豊かさを見いだそうとしている。

本は、全集ものがよく売れた。『日本文学全集』、『世界文学全集』、『少年少女世界文学全集』である。過去の名作にふれることは、心を豊かにする。歴史物も売れた。『日本の歴史』は、占領軍により禁止されてきた過去の歴史を暴いた。歴史は、今を豊かに生きるヒントを与えてくれる。今は昔となつたはずの貧困にさいなまされながらも、明るく生きる姿を描いた『にあんちゃん』は、ベストセラーになり、映画化もされ、感動を生んだ。

御成婚ブームに沸く4月から、週刊誌ブームが本格化した。『週刊少年マガジン』と『週刊少年サンデー』も同日に創刊され、少年週刊誌時代も始まる。次々と週刊誌が創刊され、この年に月刊誌を発行部数で抜く。生活テンポが速くなる。豊かさを求めるテンポも速くなっているのだ。